その一　武田学園創成私記

武田ミキ

前書

昭和五十八年四月十五日をもって、学校法人武田学園は、創立三十五周年を迎える。武田ミキ理事長（学長）は、この創立三十五周年を記念して、大学本館の建設と三十五周年史の編纂とミキ育英会設立を発議された。大学本館の建設は、着実に実行に移され、昭和五十八年四月着工、十月の竣工を待つばかりとなった。

一方、創立三十五周年史編纂の議は、編集委員会を結成し、種々協議を重ねた。ところで、武田学園は、この三十五年という短期間に、幼稚園・高等学校・短期大学・大学という四つの学校を併設する学園へと急成長したのであるが、現時点でその成長過程を学園史として純客観的に記述するというのには、それぞれの細部があまりにも生々しく記憶されていて、一種の生体解剖ともなり兼ねず、いまだ学園史を編むにはなじまないものを感じるとの意見もあった。ただ、武田学園の歴史は、創設者たる武田ミキ理事長の歩みと一体のものであることは、天下周知の事実である。ここに、そ

の武田ミキ理事長の私記が存在する。

この私記は、昭和四十七年ごろと昭和五十四年ごろ、武田ミキ理事長（昭和四十七年当時は学長・校長兼任であった。）が、心臓を病んで長期入院され、時に生命の危機を感じられて、過去の自分の歩みを明確にしておかなくてはならないとの気持に迫られ、病床で執筆された手記なのである。廃物利用の更半紙の裏紙に、鉛筆で走り書きされたものであるが、孤児という不遇の身から立志して教育界に身を投じ、この道一筋に献身するも、敗戦後の世情の混迷を見るに忍びず学園創設に乗り出し、徒手空拳で大学設立の大業を果すに至るも、故あって病床に臥すに至る経過が事細かく記してあるものなのである。

武田ミキ理事長の、教育に生き教育に死するという鮮烈な生き様は、生きた教訓として武田学園の学園訓の中に生き続けると共に、明治の女の苦難に満ちた一図な生き方の典型としても、われわれの前に在り続けると思われるのである。この私記は、極めて私的なものではあるが、これからの武田学園の将来像を思い描く時、常に座右にすべき貴重な記録と思われる。元来、身内の者にだけ見せるつもりで公刊する意志のない手記であるとして、公表を固辞される武田ミキ理事長に押してお願いし、この記念誌の冒頭に掲出することとしたのである。

この私記は、系統的学問をしたことがないといわれる武田ミキ理事長独特の筆致で書かれており、方言そのままの部分があったり、時には楽屋裏の話に類するものも多いが、その中にむしろ生き生きした武田ミキ理事長の想念と武田学園の歩みが読み取れると思うのである。病床で、記録も見ずに、記憶にのみ頼って走り書きされたもの

であるだけに、時に数字などに錯誤があるかもしれないが（理事長としての数字に対する記憶力は超人的で、時に公的な帳簿類より正確なこともあるぐらいだから、大よそ正確と思われる。）、一つ一つ再調することなく掲出する。

創立三十五周年という時点では、この私記が、血の通わない学園史より、一層この佳年を記念するにふさわしいものと思うのである。

（昭和五十八年六月十日・横山邦治記す）

一　私の生いたち

〔昭和四十七年一月元旦　起稿〕

嬰児・幼児時代と家庭

広島県沼隈郡千年村字常石、神原嘉平治の五女として私は生まれた。父嘉平治は、私の生後八ヵ月で病死し、又母は十人目の私を産み、産後の経過悪くしばらく病床にあったが、私が生後三ヵ月の時遂に黄泉の客となった。従って、両親の顔は全然知らぬ私である。

兄五人、姉四人と私、併せて十人兄弟である。長姉ツルは、私より二十歳年上で、私が生まれおちると、母親代りとなって母乳の一滴もない嬰児の私をかかえて、貰い乳やおも湯によって私を育ててくれた由である。

私が三歳の時、姉は同村字能登原、市川卯之助に嫁いだので、私の養育の責任は次姉ユキの手に渡ったのである。又この姉も私が六歳の時、沼隈郡浦崎村の渡辺伝一郎と結婚したが、不幸にして離婚の運命となり、暫く家に戻り私

の養育に当っていたが、私が十歳の時、豊田郡大長村の大下豊市氏と再婚したため、その後の私の養育は私より八歳年上の四姉ヌイ（三姉トラは若くして病死）の手に委ねられたわけである。

義長兄（腹違いの兄）直吉は分家していたが病弱であったため、二子を残して若くしてこの世を去った。次兄巳之吉がその後へおさまったが、これ又身体弱く病気がちであったが、私が十五歳の時病死した。父の死後の神原家を継いだのは、私より十八歳年上の三兄勝太郎である。父は死が迫った時「勝太郎よ、ミキをたのむぞ。親に代って育ててやってくれ。」と目に涙をうかべていい残して逝ったという。

長姉、次姉の話や、三兄勝太郎の伝記によれば、私の生家神原家は、祖父の代は千石船（御用船）三隻もあって随分隆盛であったらしい。祖父の末年から父の代になって、御用船も不用となり、従って船業不振から財も次第に減少し、その上父が他人の借金の保証人となり、全財産を没収され赤貧となった。

その頃に私は生まれたのである。母が四十一歳の時である。想うに、母が私を産んで立ち上ることが出来なかったのは、貧困のどん底の中で大勢の子供の養育と、家計を助けるために骨を砕き身を粉にして働き続けてきており、精魂がつき果てていたからであろうと思う。

両親の顔を知らぬ私も不幸であるが、それよりも嬰児の私を残してあの世へ逝かねばならぬ運命にあった父母は、どんなに辛い苦しい思いをして去ったことであろうかと思うと、たまらなく胸がつまり熱い涙が流れるのである。

家族と私の養育

私を嬰児からはぐくみ育ててくれた長姉の嫁入りの時は、私の三歳の時（数え年で）であったから全然記憶にないが、姉は私をおいて嫁いだので気にかかり度々訪づれてくれていたらしい。姉がくれば、飛びついて行って抱かれていたことを、四歳頃からかすかに覚えている。又姉の家に連れて帰ってくれていたが、それがその当時の私の一番大きな喜びであった。

姉には男三人と娘一人の四人の子がいたが、姉はその四人の自分の子供を育てるよりも私一人を育てる方が辛かった、でも又、喜びも大きかったと申しておった。それもその筈、若い娘の手で母乳など一滴もないのに嬰児を育てるのだから。偉い子に育てようなどという余裕はなかった、ただ死なないで育ってくれればよいがということだけで一杯であったと言っていた。

長姉の手から次姉の手に渡った三年目に、又次姉も嫁入りという時期が来た。その時、私は姉の白無垢の花嫁姿にかぐりついて泣いたことを覚えている。結婚式に出る人、又見送る人、そこに居合わせた人、みんな涙したという話である。

私の兄弟は前述の如く兄五人姉四人と私で十人であるが、三姉トラは若くして腹膜炎を患い、薬石の功なく遂に黄泉の客となった由である。又五男庄兵は、これも少年時代から乗船業に従事していたが、不幸にして十二歳の時に船が遭難し水没死した由である。若くして逝った兄と姉は、青春の夢も見ずこの世を去られたかと思うと、いたわしく胸が痛くなるのを覚える。

次姉の結婚後の私の家庭は、三兄勝太郎、四兄宗一と四姉ヌイと私の四人家族であった。二人の兄は乗船業なので、いつもは家にいなかったので、八歳年上の姉との二人暮しであった。十五、六歳の姉は私の親代りとなり、又一家の主婦代りとなって家の世話をしてくれていた。勿論、長姉も次姉も幼い妹二人の暮しを気づかって度々訪づれて、色々と衣類や食事などの面倒をみてくれていた。

三男勝太郎兄は、家に帰ると私の手首を握ってみて、「よく肥えたのー。」とか、「瘠せたのではないか。」とか、「食べるものはうまいものをしっかり食べねばいかぬぞー。」と言って気づかってくれていたことを覚えている。四姉も年齢は僅か八歳しか違わぬのにすっかり母親気分で、色々とよく面倒をみてくれたことは、深く印象に残っている。

その中でとても嬉しく忘れられぬ一つとして、私はいつも昼食は家に帰ってしていたのだが、ある雨の降る日に、姉はわざわざ白いご飯を炊いて私の大好物の高野豆腐を煮て弁当を作り、学校へ持って来てくれたことがある。温かくてとてもおいしかったこと、姉の愛情の細やかなこと、思いやりの深いこと、母性愛の強かったこと、私は小さい胸一杯にこみあげるもののあるのを覚えた。それが今も忘れられない思い出として残っている。

この姉と暮すこと六カ年余、姉は私が十一歳の時、私の家の本家であり、又神原家總本家の神原熊吉の元に嫁いだ。それと相前後して三兄勝太郎の嫁としてヒサ義姉さんが来た。

種々の事情で零落した家の再興を心に誓って孤軍奮闘していた四兄宗一は、その大理想も果し得ず、二十一歳の若き身で、福岡県若松港沖にて船中でのガス中毒のため死んだのである。小さい船にしろ、一人で船を持ち一人で船に乗っていたところをみれば、頑張り強い努力家の兄であったようである。勝太郎兄は、この宗一兄の死を非常に悔い、残念がっていた。察するに、それは自分の船に乗っていたらこんなことはなかったろうにという無念さが、勝太郎兄の頭から一生去らなかったからではないかと思われる。

幼児・小児時代は、貧乏な家庭で、このような家族構成で成長して来たのであるが、貧乏だから、親がいないから、淋しいだのあさましいだのといった意識はあまり持たなかった。それは今にして想うに、兄や姉が温かくはぐくみ育ててくれたことと、生まれおちてから親の手で育てられていないので、親の味を知らぬせいもあったからでもあろう。

兄や姉が他人様に「この子は他家のお子さんみたいに手に手を入れて育ったのではない。一人で大きくなったので、家庭教育・躾け教育など何にもしていないのです。例えば、庭園の庭木のように手入れして立派に美しく眺めのよい庭木でなく、野原の樹木と同じように手入れなしの木で、伸びたいほうだい伸び、はびこりたいほうだいはびこった木と同じようなものです。」と言っていたことも覚えている。それは、確かに上品さや気品には欠けていたかも知

れぬが、伸びようとする芽をこがれることはなかったと思う。又甘え心を持たなかったことは確かで、即ち依存心を持たず（小さい時から）自分の事は自分でしていた。例をあげれば、五～六歳頃から自分のハンカチは自分で洗うとか、七～八歳頃からは、下駄の鼻緒が切れれば自分でたてて履くとか、小学校二年生頃からは姉と一緒に炊事・洗濯等をするとか、学校の勉強も家の者にせよといわれてからでなく、自分からやるといった習慣はよくついていたと思う。

小児時代の想い出

私の幼児時代の友人は、近所のシズエさん、タミヨさん、ミツエさん、キサヨさん、私の姪のヤスヨさんなどであった。現在は、姪のヤスヨさん以外の人とは音信も途絶えているが、おすこやかに晩年をお過ごしになっていらっしゃることを祈っている。

三～四歳頃からこの人達と遊び、又学童時代を送ってきたので色々と数多くの想い出があるが、私が四歳頃であったと思うが、姉からおやつに薩摩芋の蒸したのを一つ貰って食べようと思っていたところへ、前の道にヤスヨさんが現われたので、ヤスヨさんにその薩摩芋をあげようと思って、もう一つ貰って出て声をかけたところ、ヤスヨさんは、定一さんという男の子の友人と手をつないで、一方の手に長い紐のついた巾着を持っていた。その巾着を振りながら、私の方に心をよせず、下中というお店におやつの菓子を買いに行くのだというのです。その時は、私もおぼろげながらも聊か劣等感なるものを感じたようである。

今一つ深く印象に残っていることは、私が小学校二年生頃であったと思うが、私の家から四百米位にある同じクラスのシズエさん宅の庭で、四、五人の友人と日が暮れるのも忘れて遊んでいたら、日没と共に目が見えなくなってしまったので、我が家まで四つ這いで帰って来たことがある。その時姉は迚も心配して、長姉にそのことを早速相談した。それは夜盲症にかかったのだという。その手当てとして姉は、鶏の肝を尾道への渡海船に依頼して買ってきてもらい、私に食べさせてくれた。すると三日位で、全く日が暮れても夜が明けても以前と同じように目は良く見えるよ

うになったので、姉達はほっとしたようであった。当時を顧みるに、年少の姉との家庭生活なので、バランスのとれた栄養的献立など出来なかったのであろうと思う。即ち、ビタミンAが欠乏していたのであろう。

小学校五年の夏、三兄勝太郎の妻、即ち義姉が嫁入りして来たのであるが、その頃の兄は乗船中なので、家の中はその義姉と今まで一緒だった四姉と私の三人暮しであったが、間もなく四姉は前述の如く神原家の總本家に嫁いだ。遂に私は肉親の手から離れてしまったのである。

生まれ落ちて十一年間、三人の姉を親と慕い、姉達も私を我が子として育ててくれた者たちとの別れは実に辛かった。しかし、幸いに四姉は家が上下に並んでいたので、朝な夕な顔も合わされるし、又面倒もみてくれていた。義姉は賢明で勝気で口八丁手八丁の人で、俗にいう〝やり手のしゃんしゃん〟の人であった。仲々なじめなくて色々と苦労をした。気分のよい時には良くして下さるのだが、悪い時にはとても辛く当たられた。悪い時の方が多くて、時によっては長姉の家に暫く身を寄せていたことも何度かあった。

この頃から、自分の境遇の憐れさを感じ、時には劣等感を持つようになった。

小学校時代

私の母校の尋常小学校は、常石の八幡神社の下に所在していて、外常石区の者のみの就学する複式の三学級で、児童総数は百余名だった。先生は、校長先生、家庭科の先生（家庭科の先生は隔日出勤）、三人の学級主任、計五人という、小規模で小ぢんまりとした小学校であった。

私は今でもそうであるが、小さい時から感受性が強かったようである。小学校三年生頃から、修身科での例話による諸徳、克己・勉励・忍耐・節倹・質素等々の教えの一つ一つに強く感銘を受けると共に、自分もそうありたいと強く肝に銘じ、自分の年代なりにそれをよく実践して来た。

特に私の心を強く打ったものは、フランクリンの自立自営であった。今にして思うに、これらが私の将来への自己

確立の基盤となっている。自立自営心は私の幼少時代からの境遇が然らしめる関係もあってか、一層強く身にしみ込んでいた。即ち、他に依存しない、自分のことは自分でやるということで、私はこの頃から、自分は将来何か独立してやりたい、やろうと考えるようになった。

四年生の時の受持ちが、井上マツヨ先生といって、立派な先生であった。四年生の終り頃、自分は井上先生みたいな先生になりたい、なろうと決心したのである。

感受性の強い現れの一つとして、その頃の私の小学校では、赤穂四十七士の追悼会を十二月十一日の夜に催していたので、それにも三年生頃から毎年参加していたが、義士の行為に感無量のものを覚えていた。そして放課後、家に帰って友人と遊ぶのに、四十七士の討ち入りの時を模倣(まね)した遊びをしていた。その配役も自分で決めて、自分が大石良雄になってやっていた。非常に楽しい遊びであったことをよく記憶している。

又、修身科での中に「義を見てせざるは勇無きなり。」とあって、その具体的実践の一つとして、これは小学校六年生の時であったが、最高学年という気分もあってか、便所が下履きで行くようになっていたので、土があがりきたなく、従って使用法も悪く、便をかけたりして誠に不衛生であったので、二、三の友人に呼びかけ、便所の上履きを自分達で藁草履を作って持参し、そして便所の清掃をし、その上履を備えて、下履では一切行かぬことを先生に申し出て、それを全校児童に実践してもらうようにした。そして毎日毎日自分達で便所の掃除を六年生の一年間続けてきた。一年間の内には段々と仲間入りの申込みも増えた。そしてその仲間達で次々と学校のためになること、人のためになることを考えてはするようにした。

尋常小学校時代、理科系よりか文科系に弱かったようで、図画、音楽、書き方は特に不得意であった。四年生のある日の午後、授業が綴り方であった時、教室に入る折「やれやれあづり方かい。」といったのが、渡辺藤一郎先生の耳

に入って、初めからそんな考えだからよい綴り方が出来ないのだとひどく叱られて立たされた。そして、その時間の私の綴り方を板書されて批判されたことがある。図画も甲を貰ったことは殆どなく、乙か乙上、良くて甲下であった。

五年生の時、天竺葵の花を写生したことがあった。その時、どんな風の吹き廻しであったか甲をもらった。嬉しくて飛び上った。それからその花が好きになり、今でも花の中では一番好きで愛している。それから図画が段々と好きになり、上手とまではいかぬにしても、通知簿に甲がつくようになった。音楽だけは今もって音痴で全然ものにならないのである。文字も数十年も書くが、一向に上手にならない。

しかし、理解と記憶は比較的良い方であった。算術や理科はとても好きであった。誰よりも早く出来るので、いつも前に出て黒板でやらされていた。そんな事が非常に痛快であったことを覚えている。

また思い出の中で辛く感じたことは、六年生の中に宝田院（檀那寺）のお嬢さんである三須マサコさんが京都の女学校（本願寺経営）に進学されるので準備教育を受けておられるのをみて（五年生の時、六年生と複式学級であったので）、とても羨しく思った。四年生から学校の先生になりたいと思っていた私なので、進学にあこがれるのも無理はないことである。しかし、私にはそうした幸運はめぐって来ない。六年生になっても、家庭も、又学校の先生も、私の進学など夢にも考えてくれていない。私自身もそれを自分からいい出す勇気もなく、つらい辛い思いをしているうちに、六年生もとうとう終わり卒業した。

しかし、高等小学校へは進めてもらえた。二十余名のクラスメートの中、女子二人、男子四人が高等小学校へ行ったのである。学校は同じ村内であるが、村の中央の草深にあった。家から四キロ位あったが、毎朝、朝食および弁当の仕度をして、大越坂の淋しい林の中を通って四キロの道を通学したのである。この二カ年は家庭環境の影響からか、安定感がなく、不安で不愉快な毎日で勉強もふるわなかった。

学校の先生になりたいという心は、常に変わりなく持ち続けていたが、家庭でもそんな話を持ち出す雰囲気ではない。義姉との生活は戦々恐々の毎日であった。

二カ年の月日が流れて卒業となった。さて、将来をどうするかという問題であるが、家の者のいい分や考えは、尋常小学校卒で大半の者が仕事をしているのに、高等小学校まで行ったのだから、今後は地方の仕事である畳表を織って娘時代を過ごし、適齢期が来たら結婚すればよいといった、極く平凡な考えであった。それも無理からぬこと、当時は高等小学校まで行くものも殆んどいない時代であったからである。

二　教員を目指して

進学希望達成に努力

進学志望を実現するには、まず学資を作ること、そして家の者の了解を得ることが先決であると考えた。

幸いに、丁度その頃、我が村にある三島医院の薬局に人がいるという事を聞いたので、そこへ頼んで入れてもらい学資を作ろうと決心をした。それにはまず家の者の承諾を得ねばならぬ。おどおどしながらも勇気を出して、義姉に三島医院で働くことだけを、まづ第一段階として申し出て歎願した。それは何とか聞き入れてもらった。早速、三島医院へ一人で行って実情を話してお願いしたところ、快く受け入れて貰えた。

ここで、住み込みで一年間忠実に働いた。先生にも、奥様にも可愛がっていただいた。そして私の将来への希望も理解して下さっていたからか、報酬も身に余るものをいただいた。今でも私は節約する方であるが、この時の一年は

特に節約をした。草履は竹の皮で作って履く、下駄の鼻緒を作ることは勿論、下駄のはまを入れて履く等、四ツ身仕立の着物と羽織の二枚を合わせて本裁物に仕立直して着るとか、娘であっても衣類や持ち物に対して新しい物、流行的な物などにあこがれたり心を奪われたりすることは全然なく、仕事に専念すると共に自分の勉強にも精出した。

一年間の報酬が六十円(月五円)、辞める時はよく働いてくれたといわれて十円と反物を一反いただいた。私の小遣いは、月に五十銭もいらなかった。それも、三人の実姉が時折り色々な品物やお金をくれていたので、報酬には一切手をつけなかった。

かねての願望である進学に、この七十円を元に出発しようと決意し、その旨を第二段階として義姉に願ったが、今度は仲々了承は得にくくて困った。常石中で女の子が女学校まで行った人は、宝田院のお嬢さんだけだなどと色々言われたが、兎角(とかく)私は決心しているのだからその決心を翻す事は出来ない。快く了承を得られぬまま実行に移すことにした。

尋常小学校からすぐの進学ではないから、県立高等女学校の一年からでは年限からも、又学資の面からもどうせ続かぬと思い、私立増川実科高等女学校に入ることを決意した。入学願書の手続等、一切を自分一人で運び、勿論福山まで十六キロの道のりを徒歩で、依頼・出願・受験にと何回も往復したが、結局願望かなって入学許可をいただいた。

入学まで、入寮手続きや、荷物作りと忙しいうちに喜びと希望の日々を過ごした事が昨日のような気がする。

女学校に入学　進学・入寮といっても、袴を一着新調しただけで衣類・寝具・日用品等全然新調しなかった。寝具は、亡母の形見の蒲団を平常着ていたのを縫い替えて持参した。他の物は平素から心がけていたので、別に新調しなくても不自由な事はなかった。

入学式の五日前に荷物は尾道まで巡航船で、尾道から汽車送りとして、自分は又徒歩で福山に出向いたのであるが、家を出る時、佛前に額突き、亡父母に進学の報告を兼ね目的達成を願って出発した。

入学式は、大半が父兄同伴であった。自分は一人でも、淋しいとも又他人が羨しいとも思わなかった。それは、何時の場合でも又何をするにも一人でやっていたからであろう。

増川ヒサ校長先生の、凛々しい態度で厳しい中に深い愛情のこもった御訓辞、一言一句、ひしひしと胸に刻み込んだ。「よし、やるぞ。」の決心が一段と強まった。

さて、いよいよ待望の学生生活を始めたのであるが、喜びと希望の毎日であった。寄宿舎は、学校の校地内にあって校舎と続いた棟で、四間に七間、それに一間の廊下のついた畳の大広間に、端にはかなり大きな押入れの様な室がついていた。三十八名の舎生の荷物は一括そこに納めるのである。学校へは、廊下伝いに行ったり帰ったり、学校から帰るとその荷物の置き場所へ行って着替えをして、その大広間でみんな机を並べて勉強するのである。夜の自習時間が終ったら、机を両側の廊下に出し、掃除して夜の会に入る、それが終ったら、物置き室から各々が蒲団を運び二列縦隊に床をとり頭を並べて休むのである。藤井さんという岡山県出身の増川校長先生と縁類の人と枕を並べて、隣り合って仲良く寝たことが迚もなつかしい。

舎則はみんな厳守していた。消灯後、勝手な行動やおしゃべりをする者は一人もいなかった。豆電球のほの暗い下で、教科書を開き、頁を繰る音にも気をつかいながら勉強したことも、試験時には夜明けに便所へ入って勉強したこともあった。自分ながら強い精神力を保持していたことには自信がある。あの頃も、又今もその精神力においては一寸も変わりないが、ただ身体があの頃よりほんの聊か衰えたようである。

寄宿舎の食事作りは、生徒が輪番で行っていた。献立は、舎監の先生が、生徒と一緒に作られていた。「教育即生

活」の教育で、実地の良い勉強になった。

学校の正門の左側に売店があったが、三好さんという夫婦の人がやっておられた。誠にお二人とも優しい親切な方であった。今もその方達の面影を覚えている。売店には、学用品・日用品・間食のお菓子などがあった。間食は、水曜日と土曜日であったが、殆ど間食のお菓子など買って食べたことはなかった。すべてにおいて節約に節約を重ねていたので、毎月の学資は六円から七円位であった。

日本は今もそうであるが、一般的に私学といえば公立校より程度が低い感が自他共にあるようで、当時もそれはたしかにはっきりしていた。福山には、県立高女・門田高女・増川高女の三つの女子の学校があった。増川も門田も、その中にいる生徒はお互いに我が校の方がという意識を強く持っていたようであるが、私は他の者より根本的に目的が異っていたので――即ち短い期間に学資を少くして学校を卒業しよう、勉強の内容はその人の心がけから深くも浅くも狭くもなるのだ――県女であろうが私立であろうが、いや日本全国の何れの学校であっても同じことだ。決して劣りはしないという自負心を強く持っていたので、劣等感などつゆさらなかった。

その代り、頑張り通した。卒業の年の冬休み前、感冒から急性肺炎を起こし、更に運悪く肋膜炎を併発して一時苦しんだが、卒業を控えて今病気に負けてなるものかと、元気を出して養生に専念した。お蔭でこうした大病にしては僅な期間で治癒したので、目出度く卒業が出来た。

教員検定試験　女学校では、教員資格は得られぬので、教員検定試験を受けることを在学中から気にかけていたが、その勉強の方までは学校の勉強に追われて手が廻らなかったが、卒業後は専らそれに打ち込んでやることにした。

しかし、ここに又家庭とのいざこざがあったりして、受験勉強だけの苦労でなく、色々な困難があった。

或る時は長姉の家に、或る時は次姉の家に、又或る時は四姉の家に身を寄せて勉強した。次姉の家では子供の守役をしながら、四姉の家では子供の守りや牛飼いをしながら、長姉の家では、私より三歳年下が長男であったので子守りなどはしなかったが、農業の手伝いは時々していた。

こうした逆境の中での受験勉強であった。勉強も独学でやるのだから、行き詰ることも度々あった。最初の受験の時には草深の岡崎先生・能登原の寺岡先生に指導を請うていた。

受験の時、村の氏神様にお詣りして、水ごりを取って身を清め、百度を踏んで合格祈願をして、女学校卒業後二年目の秋、第一段階の教員検定試験を受けたが、お蔭で一発で合格した。姉達もみんな喜んでくれた。

母校の増川ヒサ校長先生にも報告に行った。先生も大層喜んで下さった。先生は、私の心情をよく知っていてくださったので、〃それならひとまず、うちの学校に来て、手伝いながら次の段階の勉強をしなさい〃との愛情のこもった言葉を下さったので、お願いをして帰った。

その頃、能登原の長姉の家にいたのである。長姉の家は貧乏で、生活は決して楽ではなかったが、義兄は理解のある誠に良い人で、自分の子供四人と同じように私を可愛がり面倒もよくみて下さっていた。私は前にも述べたように、生まれると長姉のふところに抱かれ、三歳まで育てられたので、その姉の家にいるのが私には一番安定感があって、勉強もよく出来たのである。また長姉の家にいる間が一番長かった。

三　教員生活へ

増川高等女学校勤務

増川へのお勤めを受けて帰った時、兄姉は一段と喜んでくれた。そこで早速赴任の仕度にかかった。

姉は、まず学校の先生なので一番に袴の調達がいるといって、袴の布地を尾道まで買いに行って来いといって、十円札一枚と船賃と小遣いとして一円、計十一円を持たせてくれた。朝の一番の巡航船で尾道まで行き、二、三の商店を見て廻り、十円で一寸おつりのある程度の布地を買った。色は当時海老茶が流行であったが、私は紺にした。帰って早速仕立てにかかり、一日でちゃんと仕上げた。

着物の反物は、姉が何時用意してくれたのか出してきて仕立てるようにいった。羽織は四姉が贈ってくれた。羽織・着物の何れも、モウカ（真岡）木綿であった。その時、私を小さい時可愛がって下さっていた常石の端田の下のお伯母様も大変喜んで、寒いから綿を買って羽織に入れて仕立て着て行きなさいといって、五十銭下さったので、切角のご厚意だから有り難くいただいて、羽織は温い綿入羽織に仕立てた。

こうして、あれこれと仕度に忙しくしている内に年の瀬も迫り、新しい年を迎えた。

目出度い春、私の人生に光明を与えてくれた希望の春であった。試験合格の時もだが、正月にも氏神様にお参りしてお礼を述べ、しっかりやりますと誓った。今までになく私の心は明るく、大きな希望で胸をふくらませる嬉しい春である。

一月八日が来た。上から下まで新しい物で身も心も新しい門出である。袴をつけた私の姿に姉は嬉しそうであった。吃度、花嫁衣裳をつけた我が子の姿に見入り、嬉しい涙にくれる母親の心境であったのであろう。送って出て「しっかりやれよ、何事も真心こめてやれよ。」と、涙ながらに励まして、私の姿が見えなくなるまで家に入らなかった。

年十九歳、女学校の先生にしては誠に若い先生であった。今でいう助手級であったのだろう。しかし、職名は講師の辞令で、教科は被服構成を担当させて下さった。

小学校三、四年生頃からの願望であった学校の先生になれたのだから、感謝の念と、しっかりやらねばという決意は実に強かった。兎角一生懸命であった。教材研究・授業参観・生徒との対話等々、張り切った希望の毎日が続いた。そして毎日の授業が楽しかった。

校長先生から〝若いのによくやる〟と誉めていただき、初任給十八円を有り難く、勿体なくいただいた。

早速、父母の霊前へのお供物と、氏神様への奉納品、御神燈の下にさげる房（白羽二重地に日本刺繍を入れたもの）、姉への贈物（肌着）を調達して、或る土曜の午後から日曜日にかけて帰省して、それぞれに供えたり、届けたりして喜んで貰った。

赴任三カ月後の四月から、舎監の兼務を命ぜられた。親代りをせねばならぬ舎監の役目で、若いお母さんである。でも、一寸も臆することはなかった。人間は、その気になれば何でも出来るのだということを体験した。

校長先生のお宅へ、よく呼ばれて行っていた。又土曜日の放課後など、校長先生が市内へ外出なさる時にお伴をさせていただいていた。岡山のお参り所へもご一緒したこともあった。職員朝礼・職員会議・学校行事等生徒への訓辞を通しての校長先生の教育信念には、何時も感銘していたが、ご家庭での校長先生のお態度やお心構えは、学校と又

変わった愛情の細やかな優しい、美しいものを発揮しておられた。

僅か一カ年のお勤めであったが、校長先生のお側で、他では得られないものを色々と学びとらせていただいた。誠に増川ヒサ先生のご仁徳は、仰げども限りない高いものであった。

教職についてからの、課せられた教育の大任を果すための勉強と努力は勿論最大限を尽していたが、その傍ら上級の資格を得るための勉強も決しておろそかにしないで、余暇を利用して受験勉強も続けていた。

初級の資格は、運よく女学校卒業二年目で取った。今度は本職の傍らの勉強なので、根気強い積み重ねの勉強でなければいかぬのである。増川校長先生の計らいで、一年後には公立学校の久地村立補習学校へ転任した。籍は補習学校であったが、初年度の一年は小学校勤務であった。

小学校教員の一年間

当時の校長先生は、難しい低学年や高学年を未経験な若い女教師の私に当てないで、三年生の担当を命ぜられた。

小学校なので修身、算術、読み方、書き方、綴り方、唱歌、体操等々、全学科を学級担任の教師一人で受け持つのである。そこで困ったのが唱歌である。元来、私は音痴の部類で、音楽ときたら全然駄目なので、唱歌を担当することには全然自信がない。といって、学科交換授業を頼むことは若さの勢いからか、又は性格からか、兎角出来ない。そこで私は思った、「他の人に出来る事が自分に出来ないというのは、勉強が足りないからなのだ。よし、夜を徹してでも三年生の唱歌授業が完全に出来るよう勉強しよう。」と決心した。

唱歌一教科の教材研究に要する時間と努力は、唱歌以外の全教科の教材研究に要するものより多かった。兎角何が何でも放課後は勿論、暇さえあればオルガンの前で楽譜を覗き込み、慣れぬ手つきで弾く歌う等して練習に練習を重ねて自信たっぷりで、教案も密案を作って授業に出た。

初めは教案に従って、まず新教材の音譜と歌詞を板書し、歌詞の内容吟味から入る。これはうまくいった。次は範唱、これも何とか出来た。次はオルガンにより旋律を一通り弾く、この関所まではどうやら越えることが出来た。ところが、次に歌詞とオルガンの両方を一度に示範する段階になって、はたと行きづまった。練習の時は自信満々であったのが、本番になるとうまくいかない。歌っておればオルガンが弾けない、オルガンを弾いておれば歌えないといった調子で、全くひやひやはらはら、汗は滝のように流れる、苦しい四十五分の授業であった。

しかし、二回、三回と重ねていくうち、少しずつ向上して楽になって来た。でもこうした芸術学科の指導者は、先天的なものが必要で、堪能な指導者から見れば、私の授業など全く問題にならないことだったろう。

ある時の児童との会話に、

「先生、唱歌はきらいであります。」

「では何が好きですか。」

「体操が好きであります。」

すると四十五人の学級の児童が「僕もです。」「私もです。」という。元来、私は小学校時代からお転婆で、飛んだり走ったりは大好きで、体操はよく出来ていた。好きこそものの上手なれというが、体操の指導は児童にも満足を与えていたのだろう。「わかりました、じゃあ体操にしましょう。」といったものの、その時ぐらい責任を感じたことはなかった。

教師は、児童・生徒の鏡である。教師のすべてが、児童・生徒に反映するという事は、教師になる前から承知しており、その事は十分心して教壇に立ったつもりであったが、こうした実際問題にぶつかって、理論と現実が一致しないことをしみじみ感じ、良い体験となった。今の私なら、学科交換授業を依頼して、児童に満足のいく合理的な授業

を行ったであろうにと思う。

小学校勤務一年間、いや私の一生を通しての教員生活の大きな「ミス」であり、また教師として一生を捧げる決心であった私には、この苦い体験がよい教訓になったわけである。

小学校教員の一年間は、このことだけでなく、リズム感に欠けているために、色々苦労した。遊戯（ダンス）の講習会へも他の女先生達と一緒に行っていたが、技（ワザ）を覚えることは誰よりも早く、又確実であったが、リズムに合わせて踊るとなると、全く合わないのに困った。一、二、三、四でやれば出来るのに、音楽には合わない。そこで講習に一緒に行った先生方が、「貴女は踊らなくてもよいから、そこにいて私らに技を次々と教えてくれ。そうすれば私らがリズムに合わせて踊りながら練習して覚えるから。」ということで、私は専ら技の覚え役になったこともある。それでも何とかこぎつけて児童に教えるまでになって、運動会には何とかやれるところまでこぎつけた。

今一つ困って今日になっても忘れられぬことは、当時小学校では、年一回の運動会と同様に学芸会と称し演劇発表会をしていた。その時も又演劇の脚本を見ながら、振付けをしてちゃんと一つの劇は出来上がったのだが、その中にリズムに合わすところがあって困ったことがある。

こうした点では随分苦労したが、小学校の児童は総じて無邪気で明るくて素直であったので、指導がし易く又可愛かった。

実業補習学校勤務の四年間

その後、安佐郡久地村立実業補習学校専務となった。赴任早々感じたのは、実業補習学校の教育は、一見小学校教育の補充のように考えられる向きもあったことである。しかし実業補習学校令にあるように、一応義務教育は終えてはいるが、更に知識技能を広め、高め、徳を養い、健全なる日本国民として、日本女性として研鑽を積む機関として制定されているのである。にも拘らず、当時の補習学校の女子部の教育内容

は、裁縫科の授業が大半を占め、全人教育の場としては欠ける面が多く、これでは補習学校教育の目的は達せられないことを痛感していた。

そこで、赴任間もない或る日、当時は郡役所の監督下にあったので、郡役所の学務課長が小学校視察に来られたので、私はこの機会をかりて課長さんに「補習学校の現状は補習学校教育目的を達する内容になっていないので、改善を要する点が多々ある。」ということを進言したところ、課長さんは非常に共鳴して、改善すべきところはどしどし改善し、充実した教育をしてくれと激励をいただいた。当時は郡の監督官が来られたら、みんな平身低頭の態で迎え、何をいわれてもご無理ご尤もという時代なので、二十歳前後の若さでおめず臆せずやるものだから、周囲の者は元より課長さんも吃驚されていたとかいうことだった。私は、早速我が意を得たりで、校長先生とも相談して、教養教科の設定、その教科担当の教師招聘のことや、又授業時間割の編成、教具・校具の増設等々、教育内容改善案を樹て、役場へも予算折衝に行き、予算増をして貰って、全人教育・婦道研修の場としての緒につけることが出来た。

しかし理想とまではいかなかったが、兎角将来への夢と理想で毎日を張り切って実業補習教育の充実に邁進した。思えば希望と喜びの日々であった。放課後に、順次個人訓話・個人指導・家庭訪問等をして、個性の伸長、家庭との連携を保ち、教育効果を挙げることに努力を続けた。

一方、教員検定受験勉強も、毎日どんなに学校から遅く帰っても欠かさず、少なくも三時間程度はしていた。従って、食事や自分の身の廻りのことは時間を取らぬようにしてきた。食事も簡単につくっていた。或る時の思い出なのだが、校長先生の奥様から、白菜のゆでたのを一株いただいた。それに油揚げを一枚買ってきざみ込んで煮付けて、朝も昼の弁当にも、又晩のおかずにもして二日位食べていた。考えてみると、若い時から粗食に甘んじていたのである。生活費（食費・衣類等）を節約して、研究費（図書代・講習会・講演会出席）に充当していた。

呉市の女学校へ勤務十七年

昭和二年六月に、呉市立阿賀実科女学校に転勤の命を受けた。切角四年間精魂を傾倒して着々と教育効果を挙げつつある矢先でもあり、又生徒や地域の人達へも愛情がわき、愛着心も強く働くので動きたくなかったが、上司の命となると仕方がなかった。

宮仕えのつらさを強く感じたが、兎角辞令をいただいたからには、何時までも女々しくしているわけにはゆかないので、心を新たにし、新任校で又懸命にやろうと己れに誓い出発した。新任校の教育内容、組織・校風・伝統、校長の方針、生徒の個性・能力、地域社会の風俗・習慣等をのみ込むまでには相当の時間と努力がいったが、思ったよりか早く解り、ここでも又身を入れて教育に精進した。

教育研究大会時の研究発表

実業補習学校にいる頃から、郡や県の主催の教育研究大会に出席して意見をよく発表していた。呉に変わってからも、毎年開催される県大会には、県からの要請もあったり、又自ら自発的に、女子教育に対する意見を発表したものだ。その時期が丁度毎年の呉のお祭りの前後なので、学校から遅く帰って家事一切を済ませて、その発表要項をまとめる時に、お祭りの太鼓の練習が続いていた。前夜祭、本祭りと幾日も太鼓の音が鳴り響くのに、元来ならお祭りは楽しい筈のものなのに、それがやかましく耳ざわりになっていた。

当時は、女性は静かに、おとなしく、慎ましくしているというのがよいので、教員の中にもその風習があって、どちらかというと女子で意見を発表するという人は少なかった。従って会場では、私の行動は県知事や県官等は勿論会員にも目立つらしく、議事等についての決議および諮問案に対する答申案作成が委員付託の場合には、必ず委員に選ばれ、その中で男子一名が委員長、女子の私に副委員長を命ぜられていた。

元来が浅学な身なので――即ち、系統だった学校に行って学問しているわけでなく、ただ教育が好きで教員検定を次々と受け、資格を取って教壇に立っている身なので――人の頭に立つ仕事をするには余りにも荷が重かった。しか

し、決して人後に落ちてはならぬの精神が常に張っていたので、絶えず教員検定の勉強だけでなく、広く勉強するよう努力してきた。

昭和五、六年頃から、あちらこちら（婦人会、青年団、父兄会、その他）から講演や講習の講師に招聘されていたが、謝礼は一切受けぬ主義を通してきた。それは、至らぬ私を利用していただくことが有り難く、又そのことによって自分が磨かれ向上していくのだから、却って私こそ有り難い次第であると考えていたからである。

昭和七年、九年、十五年と、全国青年教育研究大会に広島県を代表して出席し、研究・体験の発表をした。こうした大会時には色々な議題が出ていて、それに対する意見を言う為に発言権を取るのだが、仲々競争が激しくて発言権が取れなかった。その時、全然知らない私よりはるかに年齢も上で髭を生やしたどこかの校長さんらしい方が、私に、議長が貴女の方ばかり目をつけて見ているから早く立ちなさいと言って来て下さった。とうとう三回目位の時、発言権がとれたので、今度はやっと落ち付いて意見を発表出来た。会場からわれるような拍手を受けた。私の意見が良いというわけではなかったのであろうが、女性が堂々と臆せず発表するところに感激があったのであろうと思う。自分としても誠に痛快であった。

その時も委員に選ばれた。大会の期間は三日間であったが、期間中〝広島県の神原さん（旧姓）〟で人気者になった。しかし、苦労も大きかった。県の代表者としての重責を担っているのだから、一言一句へまな事はいえないという緊張感で……。

文部大臣より教育功労表彰を受ける

昭和八年五月三日、三十一歳の時、文部大臣より教育功労者として表彰を受けた。広島県からは、丸山丙、小山実先生と私の三人であった。県下の教員もあまたおられる中を、浅学非才な私に何と有り難い勿体ないことであろうか、全く感極まる思いであった。

受賞の時は、県から平岡主事と遠藤視学さんとが同行して下さった。青山の青年会館に宿泊したのだが、その青年会館の玄関には、全国の青年の父と呼ばれた沼隈郡千年村字草深のご出身、山本瀧之助先生の胸像が飾られていた。山本瀧之助先生は、私の小学校一年生の時の恩師である。紋付きの羽織に袴、白い鼻緒の高下駄に山高帽子姿で、常石西組の観音様の境内に三教室の小さな尋常小学校があったのだが、そこに毎日お通いになっていた。習字の時間、示範に横一を書く時、筆の使い方を〃ドシン、スー、エンエン〃といって教えて下さっていた。そのお姿が今も尚はっきりと私の目に心にある、お懐しい先生である。

私はその山本先生の胸像の前に、文部大臣からいただいた表彰状と勲章を持って行って、今日の栄誉を報告するとともに、「私は一生、生ある限り、教育に捧げます。」と誓ったのである。その後、度々研究会や講習会等で上京していたが、終戦まではその青山青年会館に山本先生に会いに行くような気持ちで、ここに宿泊を取っていた。

東京へもよく出かけて、共立・渡辺・和洋・大妻などの女子専門学校等で勉強したものだ、自分は高等教育（大学教育）を受けていないのだから、人並みの事をしていたのでは人並み以下の者にしかならぬのだ、人並み以上の努力をして始めて人並みの者になれるのだから、と常に心にいいきかせ、そのように努力して来た。

昭和三、四年の夏休み中、人気のない沼隈郡千年村の阿伏兎観音寺の堂にこもり、受験勉強をした。食事は能登原の市川の姉の家から、毎日甥の千代松が運んでくれた。市川の姉は元より姉一家は私の勉強のために随分と協力してくれたのである。我が子でさえもあんなには出来ないであろうにと思う事が常であった。甥も姪も私を姉のようにして大切にしてくれたものだ。それは姉が私の生まれ落ちた時から手塩にかけて育ててくれたので、私が大人になってからも我が子同様に思っていたからであろうと思う。

あの阿伏兎の観音様の横の岩壁に打ち寄せる波の音を聞きながら、昼も夜も身心を打ち込んで勉強したことは、私

の生涯に大きな想い出と共に、大きな収穫であったと思う。もう一度あの時代に戻り、あのような勉強がしたいが、もう生まれ代わらぬ限りかなわぬことである。

私は自分が勉強するだけでなく、生徒にもぐんぐん勉強させていた。学校の教科は勿論であるが、余暇に上級生や卒業生に教員検定の勉強をさせ、毎年幾人かずつ受験させていた。一度や二度では合格は出来ないが、根気強くやらせるので、少数ずつではあるが合格していた。その人たちを、私は県の学務課へお願いして教員に採用して貰っていた。採用の前、県から呼び出しがあるので、その時必ず私は同伴していた。発令になって赴任する時も、必ず学校まで付き添って行って、学校長や教職員、更に村役場などに御挨拶と共に御依頼に行っていた。帰る時には三つ子をおいて帰るような気がして、だれの場合でも何時も泣き別れをして帰っていたものだ。

学校が休暇になるとその教え子達が、それぞれ帰ってくる。産みの親元より私の家に先に戻って来ていた。この連中が帰ってくるのが何日も前から楽しみで楽しみで、待ちきれぬ思いで待っていたものである。

赴任して初めての休みに帰ってきた者は、玄関に入るなり上にもあがらないで玄関で私に泣きすがるようなこともあった。そのような時は、兎角あがって泣きなさいといって、先に戻っている者達が腕をつかまえて上がらせたりすることもあった。その時の彼女らの心境は、ひとまず任務を恙なく終えて帰省出来たので、安心と喜びと懐かしさで胸が込み上げてきて泣いたのだと思う。そこにいる者も、みんなもらい泣きする場面も度々あった。帰って来た晩は、それぞれ一学期間に起こったこと、やったこと、困ったこと、嬉しかったこと等、夜を徹してみんなが話してくれていた。その一つ一つに批判と指導を加えながら聞くのであった。

新採用教員講習会の講師として

県では現在も行われているようであるが、当時、新採用の教員に講習を受けさせておられた。私は、その新採用教員講習会の講師を委嘱されて、三、四年間出たことがある。

その或る年に、私が増川高女で一年間お勤めをしていた頃に一緒だった先生が、新採用教員の講習を受けに来ておられて、お互いにびっくりしたことがある。十年以上はたっておったと思うが、その先生曰く、「今まで、ぽやぽやしていたことが恥しいわ。」とおっしゃられた。別に恥しく思われることはないのに。しかし、その先生の気持ちを考えてみれば、元は同じような立場にあった者が、十年後の今日、一方は受講者、一方は講師という立場になっていたから、いやな思いがしたのであろうと恐縮した。

その後もこうしたような立場の例は他にもあった。それは、私が増川高女の生徒時代に助手として勤めておられた先生（指導を受けた先生で、公立学校に遅くから希望されたのであろう。）がこの新採用教員の講習に来ておられたこともあった。しかし私にとっては、いくら立場は変わっていても、どこまでも師であるので、尊敬の念は変わりないわけである。

又、こんなこともあった。旧制女子専門学校夏期講習会等で御指導いただいて来た教授の先生と一緒に、郡主催の女教員研究大会に助言者として、又或る時は講師として招かれたり、又ＰＴＡの総会の時の講師に一緒に招聘されたこともあったが、何かおこがましいような気がしていた。しかし、恩師は恩師としてのエチケットを十分に守りながら、やることだけはきちんとしていたと思う。

教科書編纂委員の委嘱を広島県より受ける

昭和八年、広島県青年学校家事教科書および同作法教科書編纂委員の委嘱を県より受け、委員長として編纂に当った。

約一年に亘り数名の委員と共に研究に出かけたり、この道の権威者の御高見を拝聴する機会を度々設けたり、又権威ある文献によって研究を重ね、又広島県下の青年学校の現実の視察参観および地域別の衣・食・住の調査統計を出す等々、研究に研究を重ねた。衣・食・住、育児、看護、養老とに分け、それぞれ分担して草案を作り、それを幾度

か訂正して、漸く一つのものにまとめ印刷に及んだ。その時の、肩の重荷が下り急に気が抜けたような安心したような何ともいえないあの時の私の気持は未だに忘れられない。出来上がったものは、県の御指示により、県下の青年学校の生徒に使用されたわけであるが、皆さんから非常に喜ばれたので、一年に亘る長い間の苦労が報いられたようで嬉しかった。

初め編纂委員の委嘱を受けた時、何分にも一冊の本を作るということは初めてなので、一寸躊躇した。言葉での発表は方々で度々やったけれど、文章での発表は小冊誌に四～五頁程度のものを時々載せていた位のことで、全然自信がなかった。勇気を出してやってみることにしたのであるが、やる気になればできないことはない、即ち、為せば成ることをここでも体験したわけである。

御親閲の光栄に浴す

昭和十六年五月二十二日、全国中等学校の教官並びに生徒に対し、畏くも天皇陛下の御親閲を仰ぐことになって、広島県からは県官五名、男子生徒五十名、引率教官六名、女子生徒四十五名、引率教官四名であった。

私は広島県の女子隊長として御親閲を受ける栄に浴することになり、御親閲までの準備として、幾度も集合して色々と県からの御指導・御指示・打合せや、親閲式の訓練等々、水も洩らさぬだけの準備をした。御親閲の四日前に広島を発ち、青山青年会館に宿をとった。翌日は上野の音楽学校に全国の者が集まり、御親閲歌の練習、更に広島隊は宿舎から宮城前までの所要時間の実地検証と共に、往復の態度についての演習などを行い、その翌日、即ち御親閲の前日に、全体で予行演習を行って明日へ備えたのである。これは厳しい演習であったが、広島県の女子隊は立派であった。

いよいよ当日の朝が明けた。私は他の者より早めに起き、洗面を済ませ、今日という日は私にとっては千載一遇の

日で、感激にたえないと、青年会館の三階ベランダから青山の森の東、宮城に向って、最敬礼をしたのである。いよいよ全員の仕度も整い、女子隊長として隊員に最後の諸注意をして会館を出発した。代々木駅から国電で東京駅まで、東京駅から徒歩で宮城まで、途中は警察官の出動で安全に歩行は出来た。全体の集合は御親閲の一時間前であったので、最大限の緊張で待っていたので、その一時間は随分長かった。

いよいよ時間も迫ってきた。やがてこだます宮城の森の中から御出城の合図の音が響いて来る。静かな吹奏楽と共に錦の御旗を前に幾人かの護衛に附きそわれた御車がしずしずと二重橋におさしかかりになった時、大隊長から全員に「キオツケ」の号令がかかった。私は万感胸に迫り鼓動が激しくなるのを、如何ともしがたかった。

いよいよ御車はお立台のそばまで進まれ、陛下が御車からお降りになってお立台に向かわれる前、大隊長から最敬礼の号令がかかった。現人神様としてあがめ敬い奉っている天皇陛下の御尊姿に対し、有り難く、勿体なく、まともに拝むことが出来ず、地べたにはいかがんでしまいたい感激で、涙にくれた。閲兵式も頭を上げて見ることも出来なかった。御親閲歌も、県でもしっかり練習してきた上に、前々日は上野の音楽学校で一斉練習をして臨んだのに、感極まって声がふるえて歌えなかったほどである。兎角、感激以外の何物もなかった。大東亜戦争が始まる直前のことである。

現人神の天皇が、敗戦によって人間天皇になられ、日本国統治の天皇が、日本国民の象徴天皇となられた今日も、私にはあの日の感激が一寸も変わらないものとして胸の奥深くに刻みつけられていて、思い出すたびに幸福感に浸っている。

広島県知事より教育功労者として表彰を受ける

昭和十五年十一月一日、紀元二千六百年記念式に広島県知事より教育功労表彰を受けた。

尚、この記念式の後、広島県教育研究大会が行われたのだが、その時、「女子教育の要諦」と題した発表をした時、知事が非常に感銘されたらしい。発表の最後が時間切れとなって壇上から降りたら、知事は「時間が切れても、あのような発表なら最後までやらせれば良かったのに惜しかった。」とおっしゃったということを、後から県の係官から聞いたことがある。思うに、私の言うことは理屈や理論ではなく、教育を愛し、教育に全てを傾倒した教育経験や教育体験を通しての信念から生まれたものであるので、知事もいささか関心を持たれたのであろうと思う。

同年五月十五日、全国教員協会長より教育功労者として表彰を受けた。広島県からは丸山亙、小山実先生と私の三人だけであった。この三人は意見もよく一致し、青年教育に対する意気込みも強く、気魄も持っていた。丸山亙先生が広島県の青年教育協会長で、私が副会長、小山実先生が理事というメンバーであった。このメンバーで、研究の為によくあちこちと出向いていたことも、今更の如く懐かしい想いにふけるのである。

丸山先生は、終戦後教壇から降りられ、賀茂郡志和町長として町政に力を注がれている。小山先生も終戦間もなく教壇から降りられ、生まれられた賀茂郡板木村で獣医と教育委員をなさっていたが、数年前に亡くなられた。今生のお別れをしないで永年のお別れをしたことは、口惜しく悲しい限りである。

あれこれと辛かったこと、嬉しかったこと、愉快に思ったこと、優越感を感じたこと、劣等感を感じたこと等々、次々と出てくるのであるが、県を代表して全国の研究大会に出て意見や又は体験発表をしていた頃、方々から私の勤めている学校を参観に来られていた。又、県からの強い要望により、中国地区の公開授業を二回に及び行ったが、随分遠方からの参観者も多かった。こうした時の準備には、幾日も徹夜して勉強や研究をせねばならぬので苦労も多かった。しかし、そうした機会がある為に勉強し、研究も一段と深く出来、私自身が磨かれて来たのだと思って感謝している。

又戦争中は報国隊として、宮城の整備清掃の奉仕にも参加したことがある。尚、地方では生徒と共に報国隊の旗を持って色々な所に勤労奉仕に出かけていた。又出征兵士の留守家族を守る意味で、衣類の洗濯・縫製等の奉仕も地域別順に廻っていたが、毎日放課後、又は日曜日も返上してやっていた。生徒は何一つ不足もいわず、思わず、心から奉仕の念を持ってよくやってくれていた。こうしたことは、生徒達にとってはかなり大きな負担であり、過重労働であったと思うが、決して命令されるから仕方なくやるというのでなく、即ち、盲従でも服従でもなく、自ら買って出て奉仕するという状態であった。そういう時代でもあった。

終戦までは、こうした美徳の積み重ねから人間形成がなされていたので、人間関係は誠によくいっていた。それは自己だけを中心に物事を考え判断しそれを実行するというのでなく、自分よりか相手の立場を常に考え、相手を大切に物事を行っていたからである。

現代は全く反対の考え方や生き方なので、なかなか難しい時代となった。確かに、自己を犠牲にしてまで他に尽さなくてもよいかも知れないが、他人を全然無視し、自己のみを中心としての考え方や生き方には、私は賛成出来ないのである。何時の世でも、又如何なる主義主張の時代でも、それではお互いが幸せではない筈だ。私は、死ぬまで、あの戦前に養われていた公徳心・公共心を養う教育はしたいと思っている。

四　広島県庁へ転任

広島県庁に転任の動機

昭和十七年一月、広島県立青年学校教員養成所長の岡本半次郎先生から、三月から是非本校に来てほしいとの要望があった。それより以前にも県庁から県立校に出ないかと奨められたのだが、現在校に愛着心が強くて断ったので、そのことを岡本校長先生に申しましたところ、「しかし貴女は教育ただ一筋に生きるという信念でやっているというが、それならその教育者の教育をする、即ち教育者の養成をする本校の教師になるのだから、尚更貴女の主旨に添うことになるではないか。」と理論詰めにあったので、成程と思い直していた。

聊か心が動いている時、県庁からも、銃後の婦人の力を強化せねばならぬので、その指導のために来てほしいとの強い要望があったので、県立青年学校教員養成所からの要望のあることを申したところ、「それは同じ県のことなので、学務課に割愛をして貰うからその事は心配ないから決心してほしい。」ということで、県庁内の話し合いのもとに県の指導主事として三月から県の方に出ることに決定した。

その直後、呉市の小田福松学務課長からお呼びの声がかかったので行って見たら、小田課長から「実は今回、水野甚次郎市長が辞任されるので、僕も進退を共にしようと思うので、そこで退任後は女子の私立学校を創りたいと思うが、それには是非貴女が必要なのだ。自分は女子教育には経験もなく、勿論自信もないので、自分は校主・校長という立場で、教育経営は総て貴女に一任してやってもらおうと思って、そのような計画をたてているのだが、どうか決心してくれないか。」とのお言葉なので、私は、小田課長の意外な言葉に驚いたのである。なぜかというと、この小

田課長には随分辛くあたられ、五年間も昇給停止されたので、よもやそんな声がかかろうとは夢にも思っていなかったからである。

五年間の昇給停止に至った経緯はこうである。昭和八年に、呉市の某学校に在職している私の最も親しい教員が、或る酒の席で校長の気に入らぬことを発言したのを根に持たれて、退職勧告を受けたのだ。勿論、退職勧告に至るまでには、校長は小田学務課長に十分相談された結果であったと思う。そこで私がその退職勧告を思い止ってもらうために動いたのである。

当時の呉市長は、貴族院議員の水野甚次郎殿であり、衆議院議員の宮沢裕先生とは御懇意な間柄であったので、私はこの件について宮沢先生から水野市長さんにお願いしていただくよう、御依頼したのである。それによって、退職勧告は思い止まって貰ったのだが、上司からいわれて思い止まらねばならなかった小田課長の心中はどんなにいやな辛い思いであったことか、今にしてよくわかる。ともあれ、その当時の私への風当りは随分きつかった。教育者が政治的運動に走ったという理由のもとに、五カ年俸給が据え置かれ、年末賞与も誠にお印し程度で、あれやこれやで罰せられた私なので、課長のその時の言葉に意外を感じるのは当然であったのである。

私はその時、小田課長に、二カ所からお迎えの声がかかっている話をしたところ、「自分がほしい者は、他の者もほしいかな――。」と大きな溜め息をしておられた。相手が県庁ということになると、自分の方は断念せざるを得ないということで、どうしてもというところまではいかなかったのである。その後、小田課長は辞任されたが、結局私立学校の設立はされなかった。

私がその要望に応えることが出来なかったために、私学設立も断念されたということは、それ程までに私なる者を教育者として高く評価していただいていたことで、深く心を打たれる。

小田課長は聰明な方で、御性格もはっきりしておられ、いいたいことやりたいことは、てきぱきやっておられた。従って悪いとなれば徹底的に、又良いとなれば前者と同じくすごく大事にされる方だったようである。

私は、昭和十七年三月末で、呉市での十七年間の勤務に終止符を打った。その後、小田先生の消息はよく解らなかったが、終戦後は呉駅前で薬局を開いておられたとか。そして数年前胸部疾患で遂に黄泉の客となられたことを聞き、お労わしく思い生前をお偲びしている次第である。

県指導主事就任後の活動

昭和十七年三月末を以って、呉市立阿賀高等実践女学校においとまして、昭和十七年四月に広島県指導主事として赴任した。大東亜戦争の真最中で、国民総動員という時である。

社会教育の一環である女子青年・婦人会の指導が主務であるが、銃後の婦人の力を強化するということが当時としては大きな目的なので、その意味を持っての講習会・講演会・座談会、或いは勤労奉仕、留守家族への慰問等々、各種の行事を計画し、夜となく昼となく懸命にやった。

県庁に赴任した年の七月に、茨城県の水戸市郊外にある有名な加藤寛治先生が校長をしておられた国民高等学校で、一週間の講習があった。それに参加して日本魂の浸透した教育をなさる加藤寛治先生の教育を観せて貰い、又その教育を受けたのである。日本人独特の使命感（義勇奉公の精神）、勤労愛好の精神の練成は仲々徹底し、効果大なるものを強く感じた。

満蒙開拓義勇軍訓練所も見学した。大規模な施設で多数の青少年の教育をされていた。そこで訓練を受けた青少年は、やがて満蒙開拓の実施に当っていたのである。当時の日本は、国連から脱退して満洲国独立を認めたので、満蒙の開拓と満洲国の発展に協力せねばならぬ義務と責任がある訳で、国を挙げてそれに力を入れていたのである。これも日本の国としては色々と考えがあったことはいうまでもないことである。今にして思えば、教育の在り方を含めて

全てが戦争の方向へ押し進められていたのだが、そういうことは全く考えない忠君愛国一本槍の私であった。ましてや、満洲独立を侵略などとは思いもしなかった。認識不足もはなはだしいのだが、当時の日本人は、大体私と同じようなことではなかったろうか。

満鮮視察

そうした認識のままで同年九月二十日から一カ月間、満洲朝鮮視察に出向した。丁度今から三十年前、私が四十一歳になる一寸前であった。その時の自分としては、決して若いとは思っていなかったが、今にして考えてみると、年齢も気分も身体も若くて強くて気魄があった。

朝鮮は内地と変わらない感じであった。勿論当時は日本国であったのだが、丁度十月であったので、広い広い田園には、稔った黄金の波がただよい、その中で白衣の民が稲刈りをしていた。内地を離れて一週間位しかならないのに、季候・風土等日本の風景と変わりない情景をみて故国を想い、懐かしい感に打たれた気持ちが未だに忘れられない。広漠たる広野を西北へ西北へと走る汽車の中で、歌の文句にあるように真っ赤な大きな太陽が地平線に落ちて行く光景は、全く大陸でなければ見られない。日本の狭さを感じると共に、大陸の良さをつくづく感じ、大陸の発展に貢献したいと強く感じた。

上海、ハルピン等、随分奥地まで行ったが、至るところに在満日本国民学校があった。これは日本が満洲国開発の為に、又日本の発展の為に出向してそれぞれの部門で働いている人達の子女が学んでいる学校である。これを見学し、ここでも満洲国独立の為に日本人が力を入れていることを強く感じ、聊かでもそれの力になりたいと思ったものである。

兎角、国民学校・中学校・専門学校・大学等も見学したが、内地と変わりない立派な教育がなされていた。

国民学校の児童に「日本へ帰りたいことはないですか。」と聞いたら「いや」と一言だけ答えてくれた。満洲での

日本人の開拓には、いろいろな部門がある。一般的なものは、広大なる原野を開拓して農耕にあたるもの、産業開発にあたるものなどであるが、農耕はコウリャン・トウモロコシ・ジャガイモ・大豆・小豆・小麦等であった。米も作れるように土地改良もなされていたが、まだ当時は十分でなかったため、稲は作られていなかった。吃度朝鮮あたりから輸入していたのではないかと思う。従って米食は十分していなかった。コウリャンを粉にして小麦粉を混ぜて、うどんのようにして常食としていたようであった。ジャガイモにしても、小豆にしても、誠に見事な収穫であった。

満洲の十月は、零下になる程の寒さであった。各府県から一名ずつの視察員なので、お役所の方など合せて五十名の団体であったが、あの広い満洲を、或る時には汽車で、或る時には馬車で、或る時は徒歩でと、強行軍で廻った。

吉林省で義勇軍の宿舎に分宿した時も、当時の満洲の未開地は衛生面が非常に欠けていたため、汽車の中でも、又開拓団や義勇軍の宿舎等にもシラミが多かった。汽車の中でシラミがごそごそ這っている場面も度々見うけた。

当時は、それ程衛生面でも不行届の所が、広い満洲にはあったのである。家も、開拓民や義勇軍の住むものは概ね手作りで、誠に粗末であった。しかし、冬の寒さにだけは十分心が配られた作りであった。寒地には寒地に相応して、学校にも民家にもそれぞれの設備がしてあるし、人間は大人も子供も寒さに備える服装で、零下三十余度でも結構別に辛い思いをしなくても暮されるように出来ていた。普通の家庭は、むしろ日本の冬より、オンドルとかペチカとかで、ぽかぽかと気持ちの良い部屋で睡眠が出来るようになっている。

また、満蒙開拓民・満蒙開拓義勇軍等が、如何に将来への大きな希望と夢を持って苦労しているかをまざまざとこの目で見、この肌に感じた。内地にいる我々は、この人達を何とかして励ましてあげねば、それと同時に内地にいる者はもっともっと心を引き締めてやらねばと強く感じたわけである。

暗雲たなびく昭和十七年秋のこと、今から考えれば敗戦になる三年前だったわけであるが、国境に立ち、遙かかな

たのシベリヤを見つめて、何とも言葉では言い表わせない、感無量であった。これからの満洲国独立の将来は、朝鮮は、ソビエトは、どのように展開するのであろうか。そして日本は！　無条件降伏等夢にも想像しなかった私は、矢張り日本は強国であると信じていたのである。

それにしても、満洲開発のために満洲に行っていた多くの日本人で、満洲の地に於て終戦を迎えた人々は、この第二次世界大戦のために出征して御国のために尊い生命を捧げてお尽し下さった兵隊さんに次いでの御苦労をされ、犠牲を払われ、人命を失われたことを思う時、申し訳ない次第で、満洲視察記を書くにつけて、尚一層その感を強くする。と同時に、日本侵略の犠牲となられた中国や朝鮮の人々にも、本当に申し訳ないことだったと思うのである。

敗戦後の日本は、僅かな年月で復興し、戦前の暮しと比べものにならぬほど物資にも恵まれ、何不足なく生活が出来ていることは、ここに至るまでには戦前の多くの犠牲者のあることを決して忘れてはならないのである。

日輪兵舎

その頃、満洲でも、日本の茨城県の日本国民高等学校へ行った時も、又広島県の七塚原の県立修練農場にも、日輪兵舎があった。この日輪兵舎は、文字の如く形が丸くて周囲が床になっていて、そこに畳の代りに莫蓙（ござ）が敷かれそこで寝起きするのである。これが一般家庭でいう座敷である。その中は空間で、土間である。この土間の中央に囲炉裏があって、ここで夜は火を焚き、その火を囲んで皆で一日を語り合い、明日への備えを話し合い、誓い合い、ここに集う者の憩いの場であると共に意気を鼓舞し、和協の精神を養う場でもあったのである。粗末な建物であったが、実に合理的に出来ていた。現在もあのような建物の中で、人間の真の姿、偽らない飾り気のない姿を見い出したい気がしてならない。

金殿玉楼（きんでんぎょくろう）の建物の中での生活に憧れる人もあるかとも思うが、時には日輪兵舎のような建物の中での生活も良いと思う。

日本魂の浸透

広島県でも、戦前から、又戦争中は勿論のこと、人間作り日本魂作りを目標として、県下の青年団や婦人会などを幾つかのグループにして、七塚原の日輪兵舎で、又福王寺とか仏通寺とかいった精神修養の場を選んで、講習をしたものである。又或時は、学校とか公民館とかいった所で、講演会・座談会等を催していた。それは県の主催のものであったが、地方単位で催されるものもあった。そうした時にはよく講師として招かれて、日本魂や日本女性を語ったものである。

或る時は一日三会場を、一人で担当して廻ったことがある。午前・午後・夜の部がみな別の場所だったので、その日は九里（三十六キロ）徒歩であった。勿論中食は座って食べる時間はなかったので、道を歩きながら日の丸弁当を食べたが、その時のうまさは又格別であった。

こうして、意気、気魄、希望の毎日を繰り返していたが、一寸も疲れなど覚えたことはなかった。

敗戦国となった日本の惨めさ

こうして戦争中は銃後の婦人の力の強化に努力してきたが、思いもそめなかった敗戦、私だけでなく日本国民全員が、この敗戦には全くがっかりしてしまったと思う。

敗戦の惨めさをつくづくと感じた。〃国破れて山河在り〃というが、広島の地は山河もなかった。

人類滅亡を招く原子爆弾は、昭和二十年八月六日午前八時十五分、広島市に投下された。市民幾十万人の半数は尊い生命を奪われ死傷、建造物は一瞬にして灰じんと化した。

私も、当日県庁にいたら、即刻白骨となるところであったのに、丁度比婆郡方面へ出張中であった。その時、比婆の方では、広島には何かひどい爆弾が落ちたんだそうだ等、云々で、原子爆弾とは全然知らずに帰って来てみれば、二日前の広島とは全く変わり果てた広島となっている実状を見て、気も失わんばかりの私であった。先輩、同僚の骨拾いに、焼け跡の灰の中をごそごそ掘り分けてありあわせの空缶に骨を納め、県庁の避難先である中国新聞社の二階

に持ち帰り、安置して四日後に遺族にお渡ししたのである。

常石の里の方では、兄や姉や親族一同が私を心配して、姉の三男神原安夫を広島にさし向けた由、その時は私を探し当てることができず、安夫は空しく何の消息もつかめぬままに、一昼夜日乾しになって家に戻った由を後から聞き、申し訳なく思った。肉親が私の身を案じてくれている事など全然気もつかず、ただその場の事のみに心を奪われ、只管(ひたすら)犠牲者のことにのみ専念していたのである。私は何でもこのとおり、その事にのみ打ち込んで物事をやる性(タチ)の人間であるが、その時は一段とそれが強かったのだと思う。一週間も十日もたってから、肉親の心配している事に気が付いたようなことであった。

丁度、爆弾投下の一ヵ月位前、私は安佐郡緑井村に疎開していた。緑井村の向いの川内村では、広島市内の家屋疎開の勤労奉仕の為、村をあげて（銃後にいた男性は、全部といってもよいほど）広島市に出ておられたので、全滅であったのである。その川内の川原には、死体が山をなしているのを見て、これが人間の人生の最後とは実に憐れなものと、いたわしさと戦争に対する憎しみとを強く感じ乍ら熱い涙にくれたのである。

続いて八月九日には、長崎に原子爆弾が投下され、広島と同様目も当てられぬ憐れでみじめな光景が繰り返えされた。その長崎へ投下される一日前に、ソ連は日本へ宣戦布告したのである。日本が敗けるのを見抜いて戦争を布告したというわけだ。日本が勝つような風向きだったら宣戦布告はしなかったのではないかと思う。

八月十五日、丁度お盆であるが、日本国民はお盆どころの騒ぎではない。正午には天皇陛下の重大ニュースがあるという。ラジオの放送なので、十二時が待ち遠しかった。十二時三分前からラジオの前に座って姿勢を正して待っていたら、陛下よりのお言葉は全然想像もしなかった内容であった。第二次世界大戦は降伏の已むなきに至ったということを国民へお知らせになったのである。歯痒いやら、残念なやらで、涙がとめどもなく出る。その涙の中から日本

は降伏したのだとさとった。

そうなると日本の国は今後どうなるのか、天皇の地位は等々、私はやはり大和民族の血の強さを感じた。それと共に私は実に一途に日本を信じていた。（その裏は物を知らないことにもなる、それは今にして思うことである。）日本は強い、日本は必ず勝つと信じ切っていた。また勝たねばならぬのだと張り切っていた。敗けるなどとは夢にも思わなかった。また思いたくもなかったのでそんな事は考えもしなかった。馬鹿だといえば馬鹿だし、純情だといえば純情なのだ。まあ私はそれで良いのだ。それだけに、わが日本国を信ずることは考え方によっては悪いことではない。

統治権はないが、天皇制は残るということを聞いて、敗けたのにしては天皇制が残されるなら我慢しようと、自分で諦めをつけた。それにしても、戦争中は、勝て勝てと一生懸命県下を廻っていただけに、敗けたことが残念で残念でたまらなくて食べるもののどをこさぬほどであったが、天皇制の存続がせめてものなぐさめであった。敗戦後は、日本国民であるからには、日本国の国是に従って行くのが道であると考えたのである。

戦前とは変わって、国の行政もあらゆる面で改革がなされ、民主化、民主政治の世の中となった。明治憲法から民主憲法に変わり、国民はこの民主憲法の下に生活せねばならぬので、私は戦前の勝て勝ての説を切り替えて、新憲法解説をして県下を廻るとか、新憲法による婦人の地位や役割が変わったことを説いてまわった。

選挙管理委員会、貯蓄推進委員会、その他何々委員会といった中に婦人部が新設され、その人選の任を申し付けられたので、増川ヒサ、杉原菊代、久留島フジエ先生等々を推薦し、御活躍を願った。

身体が不調となる

戦前、張り切っていた意気込みが抜けたのと、学校に勤めていた二十一年間と県庁に勤める間の無理な生活が体力を相当消耗させていたのか、身体が悪くなって仕事に耐えられぬようになった。

昭和二十一年の終わり頃から、咳が出る、汗が出る、根気が続かない、微熱が続く、腰が痛むといった状態になっ

た。県庁医の加谷女医に診てもらっても大したことはないと言われる。廿日市町に県病院が移ったので、そこへも診察を受けに行ったり、袋町小学校内に県病院の分院が一時宿借りをして診察をしていたので、そこでも診てもらったりした。

血沈が百七十も下ったので、病院長もびっくりされた様子だったが、別に病名もつけられず安静にしておれという程度で、そのうち首の右の方に大きなグリが現われてきた。可部の保健所長米沢進先生に診て貰った。先生は仲々はっきりとした事をいわれる医師であったが、なんにしてもこんなところにいらぬもののあることは邪魔だ、取ってしまえと、しきりにいわれた。今度は日赤に行って診てもらった。病名はつけられなかったが、摘出した方が良いだろうということだった。

大内外科病院が可部町にあった頃で、とうとう、大内病院へ診て貰いに行った。同じく摘出した方が良いという事で、二十二年の十月二十日に手術をすることに決定して、大内病院で手術をして貰ったのであるが、いよいよ手術に取りかかってみると、各医師方の外から診ておられたような簡単なものでなかった。場所が首なので頸動脈がそのグリにからみついて、それをメスではずされるのに、大内院長、吉永副院長、他からの医師一名の三人が随分苦労された。遂にメスが動脈にさわり頸動脈が切れて血液が一時に流れ出て、その血液が肩甲骨のあたりまで来たまでは覚えていたが、それからは失神してしまってわからなくなり、病室に運ばれてから気が付いたような危ない手術であった。その摘出物は、肉腫か或いはガン性のものかも知れぬということで、退院後はコバルトをかける必要があった。疎開した大内病院にはその設備がないので、緑井の今井病院に行った。今井病院長から、ガンだったら短かくて一年未満、長くて七年しかもてぬといわれた時は、全く死の宣告を受けたような気がして悲しみのどん底に落ちた。

そのうち、摘出物を大内院長の出身大学の附属病院に送り検査をしてもらった結果、結核性の淋巴腺（りんぱ）だと判明し、

不幸中の幸いだったことを喜び、その後一段と元気がついて養生に専念した。しかし、その結核性のものが首や骨へも来ているとは、予想もしなかったのである。

その後、腰が痛くて痛くてたまらなくなって来たので、その治療を始めた。これは長年の使い痛みという診断をされる医師、また神経痛という医師もあり、痛い時には兎角迷うもので指圧に行ったり、鍼・灸にも行ったり、手術後ずっと治療を続けたのである。ただ使い痛みや神経痛なら半年も治療を続ければ全治するであろうに、次第に悪くなり、左の股脇が痛み、まともに歩けず、足を引きずりながら歩かねばならなくなった。それでも医師には解らなかったらしい。また私も、使い痛みや五十肩の神経痛などにあまり心を奪われて神経を使うことはいらぬと思い、医療から離れて、鍼・灸に専念したのである。

その頃は職を退いていたので収入もなく、二十七年間勤めをしたけれど、貯えもなかった。それは、武田一家の生計の全部を引き受けてやって来たのと、私自身の勉強や研究にも投資してきたからである。私自身の生活は節約に節約を重ねて切りつめられるだけ切りつめてきたが、武田家に対しては二十二年間、物心共に自分なりの最大限を尽してきたので、今でも決して心残りはしていない。

県庁退任

話が前にもどるが、敗戦後といえども、新憲法下で国の方針に従って新日本の建設に尽さねばと思っていたが、前述の如く健康を害し、二十二年の初め頃から欠勤が多くなり、とうとう四月頃から出勤が出来なくなった。長期欠勤することは、県庁へ対しても県民の方へも迷惑をかけることになり忍び難いので、県官としての締めくくりをしないままに退任することは、余りにも無責任のようで誠につらい思いがしたけれど、六月初め退任をお願いした。八月三十一日付で許可になったが、その時の県よりのお言葉に「病気となれば致し方のないことだが、まだまだ貴女にはやってもらいたい事が沢山あって期待をかけていた。」ということであった。

五　広島県可部女子専門学校創立

武田学園創立の動機

日本国未曽有の歴史的現実に直面した敗戦後の日本は、百八十度の方向転換を余儀なくし、全く目も当てられぬ有様、国土は焼け野原となり、国民は希望も勇気もなく、全く骨抜きの状態であった。軍国主義に変わる占領軍からの天下りの民主主義の導入、国民はこの民主主義なるものの本義が十分のみ込めなかったり、それをはき違えた自己中心主義、自己の本能を満足さすだけの自由や権利を主張する者などさまざまいた。世の中は全く戦前の面影もなく、乱れ切った状態であった。

私の県庁での戦後二ヵ年は、この民主主義の真の意義を地域社会へ浸透さすべく只管(ひたすら)努めた。堕ちるのは早いが、挽回は仲々容易ではない。〃これではならぬ、悪化し混乱した社会世相、頽廃(たいはい)した道徳の正常化こそ急務である〃と考え、病弱な身も顧みず、敗戦日本の再建の一翼を荷おうとして立ち上がって、昭和二十三年四月に武田学園を創立したのである。それは、新生日本の根幹となる真実に徹した堅実なる女性、すなわち社会環境の欠陥や忌まわしい社会風潮に惑わされることなく、如何なる苦難にも挫けることなく、強く正しく明るく生き抜く力を養うと共に、世界に誇る日本女性の美徳の高揚に努め、社会の浄化に尽すことの出来る女性の育成を目指して発足したのである。

設立までの経路

昭和二十二年十月、頸の淋巴腺(りんぱ)摘出後、暫く静養した二十三年一月の寒い日であったが、里の兄のもとに学校を創ることの相談と共に、その援助を仰ぎに行った。その時も、腰の痛みが強くて、腰を両手で支えながら駅まで行った。当時は乗物も混雑していて、車中で腰かけることは、余程早く駅に行ってホーム

で一時間も二時間も立って順番を取らねばならぬ状態であった。勿論車中でも立って、腰を支えてゆられながら福山駅に着いた。

汽車から下りて、駅前の広場であげはんを売っていたので（これは私の幼い頃からの大好物）、一枚十円を二枚買った。弁当は平常県庁に持っていっていたアルミニュウムの弁当箱にご飯をつめて持って行っていたので、駅前の広場の石の上に腰をおろし、その好きなあげはんをおかずに昼食をしようと思って食べかけた。美味しくなく、食べたくないので、少し食べてやめ、暫く寒い冷たい風に当たりながら腰を休めていた。乗り物がないので、常石まで十六キロの道を徒歩で腰をかかえて歩き始めた。ところが、左足を引きづらなければ歩けないけれど、腰はかかえなくても歩けるようになったので、元気を出して五時間近くかかって実家にたどり着くことが出来た。

風呂に入り夕食をいただいてみんなと話をしていたら、兄が相談があるのだろうと言う。兄は昭和十九年からリュウマチ病で伏せっていたが、長年の病床であっても、兄の頭はしっかりしていた。そして人の心を見ることは誠に早く、それがまた、的の外れない見方をする人であった。

昭和二十一年、まだ県庁に勤めている頃、婦人参政権が与えられた直後に、参議院に立候補したらという周囲の奨めがあった。一寸その気になったので、その時も兄のところへ相談して応援を求めに行ったのだが、すごくやかましく叱られて（女だてらに何を考えているのか云々）帰って来たことがある。その時は勿論私も政治家としての自信もなく、又それほど魅力があったわけではないので、叱られ愉されておとなしく帰ったのだった。

今回は、真剣に私の希望を話した。兄は今度は前の時のようにきつくはいわなかったが、おもむろに、今から仕事を始めることは、兄は賛成しない。その理由は、第一にお前は身体が弱い（女学校時代に慢性肋膜炎を患っている）。第二は女が五十近くなって何も大した事はできない（当時四十八歳）。第三はお前はもう教育界では功なり名を遂げ

たのだ、これ以上の事はない。もう未練を持たず無冠となって気楽な余生を送れ、それが一番よいのだ云々……。

「学校を創ることは悪いことではないが、経営するということは、容易な業ではない。一教員として教壇に立ち教え導いて行くだけのことではない。例えば、オルガンを買えばピアノが買いたくなる。スタンドピアノを買えばグランドピアノがほしくなるといった理屈で、事業というものはそんなに簡単にいくものではないのだ。特に教育一筋で生きて来たお前には、経営など出来はしない。それよりも身体あっての物種だ。その弱い身体をして何が出来るか。お前よりか、こっちが心配だよ。」といって、てんで取り合ってくれない。「わしは学校作ることを応援するのが、たいぎいからいっているのではない。お前の身体を思っていっているのだから、それがわからなければいかぬ。兎角もう一度よく考えてみよ。」ということで、第一回の会談は終わったのである。

兄自身は元来、教育事業、社会事業において地域に貢献（小学校の建造、道路拡張整備等々）して来ている人なので、教育に対して理解のある人であった。その時、私に感じられたことは、兄は心の底から反対しているのではない。ただ私の身体を心配していることが第一と、第二は学校を創っても苦労する、そんな苦労を今からしなくてもよい、幼い時から不遇な子であったので、生涯苦労の連続をさせたくないという、ただ肉身の愛情からの言葉だと受け取れた。強いて兄の言葉をはね返して賛成の言葉を貰おうともしないで、その時は帰って来たのである。

十日位たって、今度は手紙で「どうしてもやりたい。私は教育に生き、教育に死する覚悟と信念が出来ているので、苦労は覚悟の上です。教育のために苦労して身体が悪くなって死ぬのは本望と思っているのだからやります。どうしてもやります、応援して下さい。」と、もうこちらは決定していることを報告した。

そうしたら、兄の使いとして、私を乳児から育ててくれた姉の長男市川寿太郎を使いとしてよこした。その時の甥の話に、「兄上があの子は（私のこと）いちがいな子で言い出したら後に引かぬ子なので、やるといえば仕方がない

よ、といっておられたよ」とのことであった。その兄の言葉は、正式な表面の返事でなく甥が裏話として私に聞かせたまでで、兄の返事は「苦労も覚悟の上、そしてこの仕事で死ぬのは本望だというなら反対はせぬ、やれ。しかし、よくよく考えて、一つ一つを木目細かく計画を樹て、社会に迷惑をかけることのないように、大切なお子様をお預りするのだから責任の重大なることもよくよく心におさめて取りかかれ。決して大きな事をするな、お前が学校を創って聊かでも地域社会のためにお役に立ちたいという、その心だけでよいのだ。兄も出来るだけの応援はしてやる。」というのであった。

私も一旦決意したからには、誰が反対しても悪いことではないのだからやろうと思っていたのだが、何より頼りにする兄からの承諾を得たので、心もすがすがしく準備に取りかかることが出来たのである。何も無い中からの発足なので、物心共にその苦労は筆舌には表わされない。

学校を創るという私の夢は、昭和八年文部大臣から表彰された時、小学校一年の時の恩師である全国の青年の父と呼ばれた（前述の）山本瀧之助先生の胸像の前で、終生教育に捧げますと誓った十五年前の時からである。いよいよその決意をしたのは、敗戦後の日本の乱れきった世相を見て、この時こそという気になったのである。昭和二十一、二年の頃である。

その頃、自分は動けない身体でありながらも、学校創立の心準備をしていたのである。いよいよ表にその意志を出したのは、昭和二十三年一月、兄の元へその意志を申し出たことからである。いよいよ、本格的な準備に取りかかったのは、二十二年十二月である。

開校までの経路

まず、学校の所在地であるが、私の発想が国土の一隅でもその地域において堅実な教育がなされれば、堅実な国家の一部分が出来るのだという論法から、本籍地の安佐郡の中心地である可部町に所

在地を定めようと考えたのである。

建物から考えていかねばならぬと思い、可部町の町中を上へ下へ、又西へ東へと歩いてみたが、仲々土地も建物も見つからない。探すにしても、相談する人もこの町にはいなかった。昼は建物のことで東奔西走、夜は学校設置申請書づくりに夜を徹した。

或る時、思い付いたのが、義弟が勤めていた三カ村組合立（三入・亀山・八木）の高宮中学校の校長、海渡先生である。その頃は、長男も大学生で、アルバイトでその中学校で数学を教えさせてもらっていた。この二人から海渡校長先生の話はよくきいていたが、秀才で識見豊富で誠実で教育熱心な方だという。

そこで或る日、海渡先生に面会を求めに行ったところ、快くお会い下さった。学校を創設したい旨を話したところ、賛成して下さり「自分の出来ることは手伝ってやるからやりなさい。」と励まして下さった。その励ましのお言葉に、私は一段と勇気が湧いてきた。

その後間もなく先生から「可部町の中屋に元の高宮中学校の校舎であった建物が競売になるそうな。何日何時が入札日だから行ってみなさい。」ということで、その日を待って行くことにした。

入札するのには、五万円の敷金がいると聞いていたので、里の兄のところへそのことをいっていた。それまでには間に合せてくれることになっていたのに、その日が来て時間が迫っても、一向に里からの使いの者の姿が見えない。いらいらしていたら、海渡校長先生が、それなら僕の金を貸してやろうといって、自転車で広銀まで走って行って用意をしてくださったので、入札の資格を失わずお蔭で入札が出来たのである。

その入札を終えて外に出たら、里からの使いの甥の市川寿太郎の長男寿一が、リュックサックを背負って、五万円の小切手を持って馳せ付けてくれた。当時の五万円というと随分大したお金である。肉親も及ばぬほど親身になっ

て、海渡先生自ら銀行まで出しに行かれて貸して下さった真心に、何とお礼を申し上げて良いか言葉もなく、ただ有り難い心で胸がつまり感涙の中から、寿一の持って来てくれた五万円の小切手を、その場で先生にお返しさせていただいたのである。

入札の結果は、弐万円の差で旧可部町に落札されたので、結局私は駄目だったのである。

その後、随分可部町を探して歩いたが、適当なものがなかった。古市町所有の元軍需工場だった建物があるということで、当時の古市町長加崎喜代三殿を訪ねて行ったところ、譲渡の意志はあるとのことで、その後三、四度役場に行ったり、町長宅を訪ねたりして、とうとう話を纏めて譲渡してもらうことになった。手付金を支払い、登記その他の手続きを終えて、代金全額を支払って、学校の校舎が名実共に得られたのである。

さて、この建物を可部町へ持って帰ろうと思って土地を探して歩き廻ったが、手に入らない。そうしているうちに日時がたって三月の中旬が来た。しかし、何としても可部町で発足するのが私の念願なので、海渡校長先生にその事を申したところ、購入した古市の建物を可部町に持って帰る期間はどの位かかるかと聞かれた。三ヵ月位なら出来ると思うと申したら、「よし、三ヵ月なら高宮中学校の一隅を貸してやるから、ここで発足せよ。」と言って下さった。

学校の所在地が定まれば、設置認可申請書作成は完成する。前から準備していた申請書は、学校設置の目的、学則から施設設備、予算、教授陣等々、木目細かい計画のもとに作成されていた。それを三月の末に安佐地方事務所の学事課に（担当は山中義雄先生）持参して説明したところ、「結構です。立派です。もう新年度も迫っているので直接県に持参されたら、万全を期される貴女のことですから、すぐ認可になりますよ。」と言われた。県庁に持参したら「いよいよやんなさるか、大いにやってつかあさいよ。貴女のことだから、きっとええのやんなさるだろうが、頑張りなさいよ。」などと、又ここでも励ましの言葉をいただいて、益々勇気が増して来たのである。

教授陣の方は、幸い私が勤めていた頃の教え子に教員検定を取らせていたのが、あちらこちらの学校に勤めていたのだが、その中の一人で公立校に十六年勤めていた新尾イチエ教諭が、「先生が学校を創りなさるのなら、私は現在の学校を退めて先生のところでお手伝いをします。」といってくれたのである。しかし、後一カ年で恩給になるのに、それでは可哀相なので、その事をいうと、「そんな恩給など問題ではありません。先生の一生のことです。やります。役には立たぬが手伝わして下さい。」と、自分の恩給とか身分とかいったものを棒にふって自ら進んで来てくれることになった。その新尾教諭が和裁を担当した。一方、洋裁担当の人として、豊田郡木江町出身の藤原サダ子氏に来て貰うことにした。一般作法、茶華道として、大下高喜氏を依頼。一般教養学科は、長男武田学千が広島文理科大学二年生であったので、長男に協力させると共に、それの友人の三浦富登氏（現在松江北高校長）に依頼した。家事科（食物、育児、看護）を私が担当することにした。

校舎に充当する建物の資金は準備できたが、校具・教具・図書等々全く無からの出発なので、一通りは揃えねばならぬ。

しかし、この資金作りがまた一仕事、私の衣類持物一切を売って備品費を作ることにして、昔の教え子達にその斡旋を依頼した。久地での教え子では、岡本アヤメ、高野ヨシ子、佐々木綾子、金本シズ子氏等、呉での教え子達は新尾イチエ、番本フサエ、竹並ユキエ、面谷ヒサエ、登根トモエ、折本シズ子、垣内フミ子氏等が、それぞれ我が事のようにして、みんな一生懸命に協力して私を援けて下さった。この人達の温い心に強く感動し、感謝し、今もなおその御恩は決して決して忘れてはいない。

幸いに、終戦後の物資の少ない時なので、古い物でも飛ぶように売れた。しかし、より高価にと思い、そのままでなく更生して売るように努めた。例えば、夏の絽の喪服の上下をワンピースに、羽織のスラセを子供物の着物とちゃ

んちゃんこに、毛糸物をといて染め替えて、若い者向きのカーデガンに等々、それぞれ工夫をして出した。

こうして一方では資金作りに、又一方では備品の調達、机・黒板・ミシン（里から立派なシンガーを贈ってくれた）、教卓・下駄箱・戸棚・標本等、生徒百人分を用意した。箒(室内用、庭園用共)、雑巾等は手作り、勿論、調理・作法等の校具・教具は、自分の物を一切出して足りないところを購入した。

このようにして、開校の準備も着々と進んでいる時、県からの学校設置認可が二十三年三月三十一日付で下りた。早速、入学案内およびポスターを作って、生徒募集を始めた。募集期間は二週間しかなかったこと、始めてのことで募集の要領もわからなかったこと、又一面甘く考えていたことなどから、百名募集予定の生徒は、その五分の一にも満たない十八名の入学応募者であった。

可部女子専門学校の開校

昭和二十三年四月十五日、海渡和雄校長先生の御厚意と御協力により、三カ村組合立高宮中学校の一偶をお借りして、広島県可部女子専門学校の開校式を行った。

開校式の前日、古市に校舎として購入している建物から畳を高宮中学校までトラックで運んだ時、海渡校長先生自ら出てトラックから教室まで畳を運んでくださったことも忘れられない。そのように、前日は開校式の準備にも海渡校長先生自ら手をつけて色々とお世話下さったのであるが、開校式には何かお差し支えがあって、出ていただけなくて、他の先生が代理で来て下さった。

今にして考えれば、現在の武田学園の第一歩を踏み出す広島県可部女子専門学校は、誠にひっそりした、ささやかな出発であった。

実は、前述の如くその頃から腰が痛むので、あちこちで診て貰ったり、レントゲン治療もして貰ったのだが、結局、神経痛だろうということだった。年齢的にも神経痛の出る頃なので大して気にもかけないで、出て歩く時は新聞

紙か風呂敷を持っていた。腰がたまらなく痛む時、それを地面に敷いて横たわるのである。

呉の教え子のところへ前述の衣類等の売却の依頼に行った時も、駅のベンチに横たわっているところへ教え子達が迎えに来て、私の身体を抱いて起こしてくれた。やせておとろえている姿を見て吃驚(びっくり)すると共に、痛ましく思ったのか涙を流し、私もなつかしいやら可愛いやらの涙、涙と涙の対面の場面、これも永遠に忘れられぬ一つである。

また、開校式をする以前の或る日、海渡校長先生から「武田さん、残念な事には貴女は県下では名の通った人だが、この安佐郡には貴女という者をよく知らない者が多いらしい。貴女にこの高宮中学校の一隅を三カ月貸与するといったら、三カ村の村長が、三カ月たって出てくれなかったらどうするかというので、三カ村の村長のところへ挨拶に行って貸与期間の三カ月は守るということを話しておきなさい。」とおっしゃって下さった。勿論、そんな御心配を村長や村の人々がなさらないにしても、当然挨拶に行くべきだったのだ。それに、そんな心配をなさっておられるという事になればなお一層のこと、一時も早く行って「お約束は違えません。」といって安心していただかねばと思い、八木・三入・亀山との三カ村へ痛む腰をかかえ、左の足を引きずりながら、徒歩でそれぞれ御挨拶に廻った。

健康な者でもこの三カ村を徒歩で廻ることはかなり苦しいと思うが、緊張して学校を作ることのみ身も心も打ち込んでいる時であったので、それが出来たのだと、今にして思うのである。その時も、道すがら何度となく新聞紙を敷いては身体を休めつつ廻ったことも忘れられぬ一つである。

昭和二十年五月、広島市舟入川口町から安佐郡緑井村に疎開していた頃、毎日緑井から可部まで通っていた。その頃、腰の痛みは神経痛とばかり思っていたので、その痛みは風呂にでも入ったら少しは楽になるであろうと思い、銭湯などに行ったこともない私なのに、大枚(たいまい)の風呂銭を五円も出して可部町下之浜の銭湯に入って緑井まで帰ったこともあったが、一向に風呂のききめはなかった。

兎角、こうして四月十五日の開校式までは色々と忙しい毎日を過ごして来たのだが、前述の如く、開校式が終わったら安心と喜びとでぐったりしたのか動けなくなった。それでも元気を出して一週間は学校に通った。しかし、どんなに元気を出そうと思っても、二週間目には全然動けなくなった。

六　闘病生活と学校経営

脊柱カリエスと診断　昭和二十二年十月、淋巴腺の摘出手術を受けた大内外科病院の本院は、既に広島市大手町に移転されていたが、その分院（分院長吉永時義医師）に診てもらいに行ったところ、左大腿部に注射針を入れられたら、濃い膿が出た。診断の結果、脊柱カリエスという病名だった。脊柱の腰椎の第四と第五が腐って、それが膿となり、大腿部にたまり、歩けないとか腰が痛むという状態になっていたのである。

吉永分院長の言葉は、「随分病気は進行しているので、本院の院長に診て貰ってくれ。」とのこと。私も吃驚して、その翌日可部線の電車で大内病院に向った。

途中の電車の中で小西春子夫人に出合った。小西夫人は私の病状を聞かれて、いたくいたわって下さった。小西夫人との御縁は、私が昭和十七年県庁に勤める頃、広島県立七塚原修練農場を会場に、満蒙開拓義勇軍の伴侶者として希望する女子青年の講習に時折行っていた時、春子夫人が七塚原修練農場（女子部）の教官としてお勤めになっていたので知り合ったのである。昭和十八年に小西義郎家に嫁がれるお取り継ぎをさせて貰ってから、尚一層御懇意の間柄となったのである。前述の昭和二十二年十月の手術前より、身体の調子が悪くて伏せっていた時、春子夫人が見舞

って下さり、その時のお言葉に「あんなに元気で活動家の先生が、こんな病気で横たわっておられるお姿が痛ましくて痛ましくてたまりません。」と涙を流し優しいお言葉をかけて下さった。そして、御見舞に銀飯でのり巻のお寿司を持参下さったのを、有り難くおいしくいただいた味がまだ口の中に残っている。

その時、おんぶしておられた赤ちゃんが、現在では二児の母となっていらっしゃる。小西夫人の労わりの言葉が身にしみて有り難く思っているうちに、横川駅に着いた。

横川駅で下車し、市内電車に乗り替え市役所前で降り、大内病院に行ったが、その間の時間が随分長くかかり苦しかった。院長先生の念の入った診断の結果は、「これは大変、すぐ入院せねば死んでしまう。」という。

入院一カ年の療養

家の方へ電話を入れて、入院の用意をして来て貰うように頼み、早速長男と当時のわが学園教員新尾イチエ氏とで、あれやこれやと身の廻りの品を取り揃えて持参してくれたのである。

その時、二人は「学校の事は何も心配しないで、ただただ養生に専念してくれ。学校を閉じるような事はせぬ、責任を持って留守を守るから。」と力をつけ励ましてくれた。

一方、里の兄のところへ『ビョウキニュウインシタ』という電報を入れた。早速、甥の市川寿太郎が兄の使いで病院を訪れてくれた（兄は昭和十八年からリュウマチで伏せっていたので身体が動かせないのと、元気な頃から仕事の事以外、すなわち身内の者の世話は、万事この市川寿太郎に委ねていたのである）。寿太郎が病院に来て「おじいさんは（兄のこと）、ミキが学校を創めて金が足りなくなって病気だといってよこしたのかもしれんが、兎角行って見てやってくれ。そして身体が悪いにしても、又お金が足りないにしても、いずれでもよくよく事情を聞いてきてくれということだったのだが、本当に病気だったのー。」という。私は「うそなどは言わぬ。金が足りないのを病気だなどと言うて心配かけるよりか、あっさりと金が足りないと言うよ。」と言ったような事であった。

とりあえず電報どおり病気ということで、病気の養生金として五万円持ってきてくれた。当時、千円札はまだ無い頃なので、百円札の五万円束は随分かさが大きかった。その札束を枕辺において、「何にも心配せず養生に只管(ひたすら)専念せよとのおじいさんの伝言だ。又親類中の者もそういっているからのー、大事にしなきぁーいけんで。みんなが心配しとるけんのー。おじいさんは〃あの子はやろうと思ったことはやり通す子だから、自分の身体の弱い事も無理な事も忘れ、無茶苦茶にやるので体をメーデ（身体を悪くして）しまうのだ。どうもならん〃というとられたで。兎角用心に用心をして病気を治して、元気になったら学校のことも出来るんだから、今はただ病気を治すことだけに力を入れることよ。」等々、甥は私の病体に心を残しながら病院から去った。

私はたまらなく淋しかった。神ならぬ身。終戦後の頽廃した道徳、混乱した世相の中に、成長する若き女性を正しく、強く、かつ日本女性の美徳を失わぬ女性に育てる事を目指して立ち上がったのも束の間、一週間にして倒れて終ったことは誠に残念至極である。〃何くそ、倒れたままではならん。預った十八名の生徒や父兄に対しても、又学校設置認可をして下さった県当局に対しても。三月の終わりになって学校設置認可申請書を県に持参してお願いした時、武田さんがやるんなら心配はないだろうといって、現地審査も来られないで私を全面的に信頼し、書類だけで認可して下さったことから考えても、このまま起き上がられないようでは相済まん。何としても回復せずにはおられぬ身体だ。起き上がるぞ〃と大内病院の二階七号室のベットの上で堅く誓ったのである。

看病は、夫の武田の妹の玲子が当たってくれたのであるが、物の無い時で、看病も随分苦労をかける事が大きかった。一年間、懇(ねんごろ)に真心こめて看護してくれた恩は、決して忘れてはいない。

また、武田の母にも心配かけた事は勿論、一年間、自分の末娘を看病に当たらせている間は、精神的にも肉体的にも苦労が多かったことと思う。母は、実に優しい、心の美しい人であった。昭和四十三年七月二十七日、八十六歳の

生涯を閉じたのであるが、病弱な上に学校経営という大きな仕事を持っている私のこと故、逝かれる頃は何にもようしてあげられなかったことが心残りでならぬ。

私の病気は、何しろ病気そのものが悪質な上にとても進行しているので、医師も周囲の者も全快には至らぬであろうと考えていたらしい。兎角養生には最善を尽さねばと、医師は元より周囲の者も一生懸命になってくれていた。

ストレプトマイシンがこの病気に良いという事であるが、当時それが医師でさえも仲々手に入らぬ頃であった。それを里の兄や姉が随分苦労して特別なルートをたどって手に入れて、十本ずつ持参してくれていた。当時、日本にはまだ少なかったらしく、従って高価であった。一本が壱万参千円で、結局五十三本使ったという事である。ストレプトマイシンが手に入ると、すぐ里の姉が持って病院を訪れてくれて、「早くよくなれよ。金はなんぼうかかってもえんじゃけんのー。おじいさん（兄のこと）もそういいよってじゃけんのー、元気を出さにゃいけんよ。」と励ましてくれていた。その姉が見舞って帰った後は無性に淋しくて淋しくてたまらず、生きる力を失ってしまうようなこともあったが、又、何くそと元気を取り戻すのであった。

一方、学校の方は主任教諭の新尾イチエ氏が中心となって、教育経営・経済経営の一切を担当してくれていた。新尾教諭は前述の如く、私の教え子で、教員になってからも私を親のように思い慕ってくれていたし、又教育にも熱心であった。私の教育方針もよくよくのみこんでいた。又長年に亘って私の訓化も受けているので、私がやろうと思っていたとおりの教育（天賦の特性の伸長と謙虚で優雅な女性の育成）をしてくれていた。そして又、少なくとも週一回は必ず病院を訪れて病気を見舞ってくれると共に、学校の事について木目細かい相談をしてくれるので、伏せっていても学校のことが手にとるようにわかった。そして私は、あれよこれよと理想を描き希望を持ちつづけながら養生が出来たのである。気力は人一倍持っているが、病気が病気なのではかばかしくはいかなかった。

二十三年十月九日、大内病院長先生の御長男が出生されたことを聞いたことは覚えているが、その日私は意識を失ったのである。そして翌年の一月五日に意識を取り戻したのである。即ち三カ月に亘る長い間、意識不明で死線をさまよっていたのである。この三カ月間は、だれがどうしてくれたのか、だれがどういってくれたのか、又だれが見舞ってくれたのか、全然知らない。

里の兄の長男の秀夫を始め、親類中の者は勿論、知人、教え子等々、もう駄目だということで見舞って下さったらしいけれど、わからなかった。ただその三カ月間のことがかすかに頭に残っているのは、現実から離れた夢かまぼろしか知らぬが、学校で何かはっきりはせぬが教えているような時と、学校に走って行っているところと、もう一つは、お寺で葬式をしているところへ大内院長先生がモーニング姿でお経をあげておられる光景、そしてお坊さんのところへ私を引き取りに来て下さったところや、私が川を泳いで渡っているところである。多分、世にいう三途の川を渡ってあの世に行っていたのであろう。

入院中の周囲の動き

家の方では、葬式の用意の為に米をつくとか、薪を用意するとか、又障子の張り替えをしたり畳替えをするとかしたということである。又一方、学校の方では、学校としてはどのようにしようかという相談会もしていたとか。又女子の先生は、喪服を家に取りに帰るとか、又送ってもらったりして、葬式の用意をしていたということである。

その頃、私が死んだら学校を閉じるかどうかという話が、教官と長男の間で持ち上がったらしい。長男はまだ文理大の三年であったのだが、〃母が死んでも母の意志を継いで学校は続ける〃といったということを新尾イチエ氏が、「先生、喜びなさい。坊っちゃんが固い決心をしておられますよ。」と涙を流しながらに、又「勿論私も、たとえ先生が亡くなられても坊っちゃんに協力して、立派な学校にして先生を安心させてあげようと決心していたのです。」

と申してくれた。

学校所在地を古市町に移す

開校時点に於ては、既に校舎として購入している古市町の建物を三カ月後の六月までに可部に移す予定が、前述の如く、開校式一週間後に私が病魔で倒れ入院加療を要する身となったので、予定通りに校舎の移築が出来なくなった。しかし、高宮中学校借用期間は三カ月の約束であったので、どんな事情があろうとも三カ村の村長さんとの約束は果たさねばならぬので、七月一日に夏休み直前ではあったが古市町に学校移転をすることにした。

そこで〃高宮中学校へのお約束は果たすことになっても、一方の生徒や父兄には義理が立たぬことになる。それは、学校所在地は可部町として募集したのに、年度の途中でしかも僅か三カ月間で移動するなんて申し訳ない。〃病床の中でいろいろと悩んだあげく、結局、生徒や父兄に理由を述べ、理解を求めるより他に道はないと心を決め、新尾・藤原教諭の二人と長男を病院に寄越してそのように運ぶようにということを依頼した。

その時、少しでも生徒や父兄に迷惑を少なくする意味で、可部町およびそれ以北の生徒に対しては、可部から古市までの交通費を学校が負担することにした。生徒も父兄も実情をよく理解してくれて、一人の不平者もなく、また退学者もなく、全員古市に無事移動することが出来、授業を続けたのである。

その時点、現場にいて直接この大変動の事に当ってくれた新尾・藤原教諭の苦労も並大抵ではなかったであろうと思い、感謝している。

第一回卒業式

発足時の学則では、一カ年制度の速成科があった。その速成科の生徒六名いた。この人達は本校の第一回卒業生である。

第一回の卒業式は三月二十日。私はまだ病院にいたので、勿論式には出られぬので、式辞の内容を長男にいって書

かせ、校長代理を長男が務め、無事第一回生を送り出したのである。六名の卒業生には誠に申し訳なく思っている。入学後一週間にして入院し、彼女らに何も直接お世話が出来なかったことが、今も尚心残りがしてならない。

退院して学校に戻る

一月五日頃は、まだ意識がもうろうとしていたが、いよいよ意識がはっきりしたのは一月中旬頃だったと思う。その頃からだんだんと良い方向に向った。

三月になって、大内病院長は「気分もしっかりしてきたし、膿も余り出なくなったので、この病気は一年や二年で治るものではないのだから、帰って気長に養生したが良かろう。」といわれるので、三月三十一日、骨と皮の身体を（大内先生は〝骨筋皮子さん〟といっておられた。）担架に乗せて、自動車に運ばれ自動車に仰臥して学校に戻った。

丸一年間の病院生活は、長い長い期間であった。その間にさまざまなことがあった。

退院して帰っても、私は全然動けない。勿論病気は全治しているのではなく、ただ死線を越えたというに過ぎない。これからの養生も大いに気をつけないといけないことを医師からよくよく申し渡され、約束して退院したのであるが、学校に戻れば養生だけに専念というわけにはいかぬ。又、自分の身体は動けぬが、頭は平常通りであるので、学校の事をしたい。コの字形校舎の中央の階下に、一室を教員室として、その教員室の窓側に古い材木を使った手製のベットを置き、その上にギブスをのせ、そのギブスの中に仰臥して養生しながら運営に当ること九カ年、しかし希望の毎日であった。

退院後は、可部の分院の吉永時義先生が、看護婦をつれて往診に来て下さるようになった。

校舎一棟購入増

古市の建物はコの字形になっていて三棟あったが、発足時は資金の都合と前述の如く可部町を学校の所在地としようと思っていたので、その時の建物移動等のことも考え、取り敢えず二棟だけ買っていた。

その校舎に充当した建物は、原爆にあっているので、屋根の瓦はずれ、壁は落ちている。あちこちにガタがきていて修理を要するところが沢山あったのだが、その修理費も用意出来ないので、雨の漏る所へは洗面器で雨受けをする、壁の落ちた所を素人の長男の手で塗るとか、又或る時には、屋上に上がって瓦のずれを直したりして、一時しのぎをしていた。

暫く古市町が動けないとなれば、残りの一棟も買っておかないと、その建物を他の者が買ってそこに入られたら、教育の場として不合理な点も出てくるからと思い、そこで退院後、直ちに古市町長に来校してもらって色々と交渉し、資金的にも随分と無理をして買い取ることにしたのである。

教員室にベットを持ち込み指導経営に当る

カリエスと診断された時には、大腿部に膿が二リットル以上もたまっていたのだが、入院してすぐ大腿部を切開して膿を出してもらった。入院中の一年間は勿論、退院後も少量ずつ膿が出ていたのだが、一年位で止まったので治癒する見込みがついたと、吉永先生がおっしゃって下さったので、養生にも張りが出た。

しかし、ギブスの中へ仰臥のまま微塵も動けないので、便所も寝たまま一人で処理した。勿論、食事も、読むことも、書くことも、計算も仰臥のままやっていた。三年目位からは、寝ていて刺繍や摘みの額などを生徒に教えていた。また、床軸の刺繍台を腹の上にのせて生徒に持たせ、師範していた。

目の見えない人、肢体の不自由な人達が、完全な身体の人達と余り変わりないように、何でもやれるのを不思議に思っていたが、人間は一部分に故障が起きれば、他の感覚が鋭く働いてくれることを、九年間でよく体験した。

九年間は全く動けなかったけれど、経営の一切（教育経営・経済経営）をやってきた。朝、先生方が出勤して来て下さるのが楽しくて待ちどおしい気持ちがしていた。毎朝の職員朝礼には、その日の計画を話し合い、週番教師から

の反省や注意事項を聞く等して、現実を踏まえての指導を大切にしてきた。県庁の文教係の先生から〝寝ていて良くやる。何でも用事があったら言え、何時なりとも出向いてやるから〟と同情と激励のお言葉をいただき、感激と感謝に満ちてやっていた。

新尾イチエ教諭の退任、そして逝去

新尾イチエ教諭は、本校創立当初から学校運営の中核となり、私の入院中は勿論、学校存続のため孤軍奮闘してくれた。随分と苦労をかけたが、おかげで開校二年後、漸く学校も明るい見通しがつき始めた。その二十五年三月末、新尾教諭は退任せざるを得なくなった。

それは、彼女は若い時、不幸にも初婚に破れ、可愛い女の子を婚家に残し実家に戻ったのである。その後再度教育界に戻り、教員生活前後十八年（公立に十六年、本校に二年）に及んでいたが、老母から「四十歳にもなる娘をそのまま残してあの世に行けないから再婚してくれ。」と奨められ頼まれて、本人にとっては今になってという気も働き、本意ではなかったのだが、親を安心さすために再婚することになったのである。

私の両腕となってくれて来た彼女に去られることは、火が消える想いがすると同時に、別れることがたまらなく辛く寂しかった。しかし、人間の一生にかかわる結婚のこと故、学校や私の都合ばかりいっておれないと考え、送り出すことに同意したのである。

退任した翌年の昭和二十六年十一月十六日、新尾イチエ氏が逝去された。（急性の腸結核であった。）本校にとって恩のある氏を失ったことは、誠に哀悼の情に堪えぬものがあった。

その後、一回忌、三回忌、七回忌の命日には学校独自で法会を営み、供養して、御恩に報いる一端としている。死去当時は、私も病床にあったので会葬出来なかったが、健康が回復した三十四年十一月、呉市阿賀町字原の墓地を訪れ、久方振りに対面した。ものいわぬ墓石に向って暫く話しかけて、心ゆくまで菩提を念じて下山した時は、なんと

もいえぬ安堵と寂しさを感じた。

開校二年度、三年度の生徒入学状況と教官の陣容

初年度の入学応募生を八十名見込んでいた。而し机等は少し余分にと思い百名分を用意した。ところが十八名（速成科六名、本科十二名）の入学者であった。如何に考えが甘かったかをつくづく反省していたので、二年目もその程度ではないかと心配していたところ、三十八名の入学者であった。新入生を二学級に、二年生の十二名を（速成科六名は卒業した）一学級に、計三学級編成で、二十四年度授業を開始した。

教官陣容は、洋裁担当の藤原サダ子氏が結婚の為二十四年の三月末で退任されたので、後任に私の呉市での教え子の垣内フミ子氏を、他に深田安子氏を増員し、計三名の専任教師と、非常勤講師に茶華道の大下高貴氏、家事科の藤田冨士枝氏、一般教養学科の武田学千・三浦富登氏の四人で、小数精鋭とまではいかぬにしても、徹底した教育が出来た。

斯して二十四年度も無事に終え、第一期生の十二名も目出度く卒業させた。

三年目の二十五年度は、本科生五十三名、研究科生四名を受け入れた。本科は一年二学級、二年二学級の四学級編成とした。教官は新尾イチエ氏の後任として、矢張り教え子の姪である藤本悦子氏を、更に小田富美江氏、大原百合子氏の二名を増員した。一般教養学科担当は、前年度までは長男武田学千とその友人の三浦富登氏で、学問研究のかたわら担当していたが、何れも文理大を卒業して、三浦氏は就職、長男も続いて文理大に研究生として残る予定であったが、恩師の県立可部高等学校長井上清先生から可部高校の非常事態に対応する為に是非来てほしいという強い要望に応えざるを得なくなり、それに応じたので、その後任として阿部善五郎氏・久保田達三氏を招聘し、教官の陣容も整え、希望の二十五年度の授業を開始したのである。

本学園発足頃には、一般的に日本国民の服装も戦前と変わり、女子も和服から洋服にと一変してきた関係で、洋裁学校なるものが乱立していた。わが広島県可部女子専門学校なるものも左様に解されていたようであるが、本学園は前述の如き主旨のもとに発足し、「心を育てる教育」「人づくり」が教育の根幹であるので、一般教養学科にも充分に時間を充当していた。特に道徳教育の徹底を期するため、倫理科を課していた。当時、中学校の先生方から「武田学園の教育は古い修身公民科らしきものをやっているそうな、云々」の声があった由であるが、私は「古くはない、道徳教育を抜きにした教育は駄目だ、十年先になれば全体に取り入れられるようになる。」といっていたものである。まさしくそのとおりで、十年もたたないうちに道徳が中学にも高校にも正科となった。

寄宿生収容

第一歩

二十五年度は生徒数も前述の如く増加したが、その中には寄宿生もいたのである。

それは、戸山村(現在の沼田町)から五名、小河内村（現在の安佐町）から四名、計九名の舎生で、勿論自炊であった。自宅より主食の米、副食の野菜類一切を持参し、二班（戸山班、小河内班）に別れた。それらの生徒は、授業が終われば輪番で炊事をするのである。舎生の居間は、昼は教室、夜は寄宿舎で、炊事場はその年は狭い庭の一隅にトタンの屋根をして、そこに瓦のくどと七輪とを据えて食事を作っていたのである。その頃の事が今尚目に浮かぶ。

本校の教育の目標である、質素堅実な人づくりの精神に則り、このような不自由を忍び、粗食に甘んじ、只管(ひたすら)自己修養に精進努力する生徒を頼もしく感ずると共に、将来への期待も大であった。

校舎の改造と設備の増設

この年に校舎の一部を改造した。建物が和室用に出来ていて、教室全体が座式であったのだが、洋裁室二室を立式にし、机も立式の机を五十個、河戸の寺本木工所に依頼して作った。ミシンも二台で出発したが、これも二台増設して四台とした。かように教具や標本なども少しずつではあるが増設し、授業の

充実を計るよう努めるなどして、この年から学校発展の緒についたという感じであった。

移動作品展開催（四年間継続）

創立初年度から、本校教育の実状の一端なりとも、父兄並びに地域の人々に知ってもらうと共に、生徒の技術練磨の向上にもなると考え、毎年秋季に一回、生徒の作品展を催していた。父兄からの人気を博していたが、更に一歩進めて、広く公開してみたいと考え、山県郡、高田郡、佐伯郡の中学校へそのことをお願いに参ったら、大変歓迎して下さった。二十五年度の生徒募集期から始め、即ち中学校の二、三学期の父兄会のある日を利用して作品展を行った。本校教育の実力のつく実態を、生徒やその父兄そして先生方も知って下さって大変な好評をいただき、年々応募者も増加して来た。

しかし、この催しをするのに、本校教員や生徒は苦労したものである。その作品を持参するのに三輪車を借り、朝早くそれに教員も乗って山坂の道を越えて行き、作品を展示し、その日に生徒父兄に御覧にいれ、夕方は帰ってくるとか、又はその中学校の都合によっては、一晩泊って二日間開催するとかしていた。当時は現在のように交通も至便でなく、道も悪く、又宿泊所もなく、勿論費用も最少限に止めるといった状態で、仲々教官にも苦労をかけていたが、当時の教員たちは何の不足もいわず、希望に燃えてやっていただいていた。感謝せずにはいられない。

当時の展示品の主なるものは、和裁・洋裁・手芸（日本刺繍・摘み細工・染色・生花等）等であった。父兄はこの我が校の作品展を見にくるのを、年中の楽しみと喜びとされていたようである。父兄同士の間での会話に「早く田植えを済ませて、女専の展覧会を見に行きましょうでー。」当日は一家総動員で、御近所の方々まで誘って来て下さっていた。又、県総務課の文教係の先生もおいで下さって作品を御覧になり、「沼の蓮池に蓮の花が咲いているようだ。」と感歎、又感歎とのお言葉を賜る等、感激の極みであった。

このちっぽけな学園の行事に、悠々県官が来校下さることは、現在では想像もつかぬことである。思うに、私が病

床にありながら学園経営に腐心していることに同情下さり、激励の思召しからだと思う。御来校下さっていた県官は、井上清、信田、細川の先生方であった。この三人の先生方には、この事だけでなく、本学園の教育・運営に、色々と御配慮、御援助、御鞭撻を賜って、今日に及んでいることを感謝している。

古市校舎時代のこの行事は、三棟の校舎全部、教員室までも使用していた。当時の私は病臥の身であったので、開催二日間は、階段下の一畳半ほどの穴みたいな所に床を運び、そこで過すというありさま。父兄の方がみて「まあ先生、こんな所で。」と涙を流され、慰め、励まして下さっていた。

作品展示の準備も、ギブスに仰臥のまま、陳列の配置、作品の種目・点数、それに必要な器具（器具もまだ不完全な時代なので、色々と工夫していた。）、陳列の方法等すべて計画を樹て指示していた。生徒も教員も、和協一致、夜を徹してやっていた。夜明け方に、陳列が終わった年もあった。陳列が終わったら、教員達は私を担架に乗せて会場を一巡させてくれていた。これは教員側では、校長の検閲を得るという気持ちからである。私は、一般へ公開する責任者としての立場からのことであった。

この行事は、三回までは展覧会と称していた。四回目から学園祭と名を変えた。その頃には作品展示だけでなく、演劇の披露、廃物利用品販売＝家庭不用の小切布等の工夫創作品（袋物、人形等）、食堂開設＝調理実習の演習の意味でやっていた。これらの出品も、どこまでも教育的見地からのものである。斯した展覧会学園祭時に展示する為の作品製作だけでなく、専門学校に相応し、専門的な高度の技術を身につけさせる意味から、洋裁では男子背広、女物ではウエディングドレス、カクテルドレス、和裁では男子物の紋付羽織・袴、女物の留袖・振袖まで進めていた。又手芸においては、精神鍛練の意味も含めて、日本刺繍を履修させていた。これは正科のみでなく、課外で盛んにやっていた。

夏休暇等には、クラブの者（三、四十名）は、四十日の休暇を全面的に返上して、泊り込みで昼夜兼行、夜に眠むくてどうにもならない者がめいめいに床も延べないで、その位置で三十分、一時間といった程度の時間を休み、又起きてやるといったように、一晩中休む時間は、合わせて二時間位であった。勿論私も、仰臥ではあったが起きていた。そうした特訓で休暇中にできあがる作品は、教材も自由であったので、額、鏡掛け、袱紗大中小、床軸、衝立等の大物で、豪華な作品ができていた。中には同じ出身中学校生四～五名で合作して、寄贈していたグループも沢山いた。そんな時、中学校の先生から「君達、こんな大きな手の込んだ立派な作品をいつ作ったのか。」と不思議がられてお尋ねになり、「何んにしても、身体だけでなく、心も技も随分成長したのー。」とお賞め下さっていたとか聞いて、私も喜んだものである。又親御さん達は、「材料費を出す時にはたいぎかったが、いいのが出来たのー、ええ記念になるのー、嫁入りには持って行けるのー。」、又家によっては「嫁入りに持って行かずと家においといてくれーやー。」といわれるということであった。こうした作品を作り、毎年展示したのを父兄が見られて、我がお子さんに「何でも、おまえも一つ記念に在学中に作らせて貰っておけーやー。」といわれる方も多くなった。又一般の方からも、生徒さんに作って貰えまいか等の依頼もあったが、これには応じる時間がなかった。

この刺繍の指導は、二十五年度には私がギブスベットに仰臥のままで、前述の如く大きな刺繍枠を腹の上に乗せて示範しながらやらせたが、二十六年度からは、有馬富士江氏が加勢してくれるようになったので、非常に助かると共に、益々盛り上がり拡充してきたが、三十二年に高等学校設置に続いて三十七年には短期大学を設置したので、この専門学校は新設の短期大学の母体となり、廃校となったのである。即ち発展的解消となった。専門学校は術の方がウェートが高かったのであるが、大学となると術よりも学の方へウェートを強くおくので、前述のような作品はできなくなった。専門学校時代は、本学園建学の精神にぴったりの人間教育が出来ていたと思う。

我が専門学校は、各種学校に準拠して二十三年に設立したのであるが、他の各種学校とは内容を異にし、旧制専門学校に近い内容で、即ち全人教育ということを根底に於ていたので、一般教養学科の全分野に亘る単位修得と共に、専門学科の専攻（被服）をしていたのである。丁度現在でいえば短大の被服科に技術を高めたようなものであったので、就学する生徒達は他の和洋裁学校に行く人達の目標とは変わったものを持っていた。いわゆる旧制専門学校に進学するようなかまえの者が多かった。従って気魄のある、家庭環境もよく、又性格もよく、素直で純朴で向学意欲も旺盛な生徒が多かった。この頃の卒業生は、みな一段ときわだってよき社会人、よき家庭人となって、社会の為に精一杯に働いて、それぞれの場で喜ばれ重宝がられている。

二十六年度教員増と経営の実態

二十六年度には、前述の移動作品展等により、本校教育の価値も高まり、四月の入学者は一〇二名を数えるに至った。遂に七学級となったので、その年から教官を二名増員した。広島市己斐町から和裁担当として今沢恭子氏を、呉市から洋裁担当として川本妙子氏に、就任を願ったのである。

教員室は、前述の如く校舎の中央の棟の階下にある十六畳の間の座敷を充当していた。教官机は以前から持っていた古い座机を寄せ集めて六個の机に向い合わせで座し、その横に私のベッドを据えて、教官との会話・会議・指示を行いつつ、教育を進めていた。

夜間部開設

勤労青年の教育機関の必要性は、私が公立学校に勤めている頃から考えていた。〝働きながら学ぶ〟これほど尊いことはない。私自身がそうして来た者である。こうした青年こそ有望である。こうした根性のある青年を育成したいと考え、この年の六月十日から夜間部を開設した。

生徒三十二名、主任教員を菊本ミサ子氏にしていたが、当時は洋裁担当の垣内、和裁担当の藤本、小田の先生達が校舎の一偶に住宅を構えていたので、それらの先生方にも夜間の授業の一部を担当してもらっていた。

当時、他のことは知らぬが、本校の先生方は、超過勤務云々などという不平不満は全然なかった。それはそれは真剣そのものであった。私が過去を大事にするのも、こうした先生方の苦労に感謝しているからである。

夜間部は、校舎を可部町に移した昭和二十九年度で閉鎖した。

二十六年度研究科卒業生の就職　二十六年度は四名の研究科生が卒業した。

菊本文江さんは日浦中学校の家庭科担当教師として、竹本シゲ子さんは山県郡豊平町の本家四郎先生経営の花嫁学院に、それぞれ採用してもらって赴任させた。

正畑シズ子さん、有馬富士枝さんの二名は、当年新設した一年課程の師範科に籍を置き、学ぶかたわら本校教官の助手を勤め、師範科を終えた。この二名は、翌二十七年度からは本校の教師として採用した。有馬氏は手芸、特に日本刺繍が得意だったので手芸科担当、正畑シズ子氏は和裁担当である。

二十七年度生徒急増　二十七年度は、本科生一三五名、研究科・師範科二十八名の入学者があった。在籍者一〇五名、夜間生三十二名、総数三〇〇名の九学級編成で教官十二名の学園となった。

ようやく発展の緒についた。しかし、決して自惚れることなく益々緊張して、和協一致で教育道に精進することを誓い合った。

七　学校法人武田学園設立

学校法人制に組織替え

本校は、発足から二十六年度までは私立学校制度の元で運営してきた。昭和二十六年に学校法人制度が施行されたのであるが、本校はその法人制組織にする為に、準備期間を一年とって、設置基準に沿う準備を行った。校地の拡充、校舎増築（調理室その他）、図書・校具等の調達、役員の選定等の万全を期して、組織変更の申請を二十七年四月に県へ提出した。

早速六月には県の係官信田主事が現地調査に来校され、調査の結果、設施も設備も総べて設置基準に達していることを見届けて帰られた。間もなく七月始めには県の方から法人の認可が下りることになったが、日付を何日にしようか、希望の日があれば言えと親切なお言葉があった。そこで創立記念日が四月十五日なので、その創立記念日にあやかり、七月十五日にして貰うようお願いしたところ、昭和二十七年七月十五日付で、同十七日に法人認可証が届いた。当時十余名の教員が手を取りあって喜び、しっかりやろうと誓いあったのである。

当時の役員は、理事長・武田ミキ、理事・神原秀夫、岡本半次郎、垣内フミ子、奈良井浩、大佐正之の六名、監事は吉永時義、神原重吉の二名である。他に評議員十名の組織となっている。

作法を正科に取り入れる

二十七年末、賀茂郡高屋町の教育長、樋口先生（元県庁におられた頃からの知り合い）からの依頼に、高屋町の中学校に勤めている森本花子先生を採用してほしいということがあった。そこで森本先生は何が専門かと聞いたら、家庭科なのだが、茶華道が得意だということであった。家庭科の方は、和・洋と

もベテランが揃っているし、茶華道の先生は非常勤がおられるので、今のところ欠員はないがと暫く思案していたところへ、再度樋口先生からお言葉があった。そこで、謙虚にして優雅な女性の育成を掲げている我が校のこの教育方針の浸透を計る上には、作法を正科として、専任の教師に来て貰って、全校生徒の指導に当たってもらうことも良いことだと考え、作法を正科とすることに決定したのである。

だが、森本先生という人が来られたので作法科が正科になったと解釈する人もあろうが、それはタイミングの問題であって、元々からその事は私の頭の中にあったのだ。

そこで、森本先生を迎えるに当たって、作法の先生に舎監を兼務して貰えば、舎生の生活指導に最適であるということで、茶華道の非常勤講師には辞めてもらって、森本先生を舎監を兼ねた専任教官として迎えたのである。二十八年四月一日に赴任され、本校校舎内に移って貰ったが、半年位で茶華道の教えを他から乞う者があるので、それらの指導を夜や日曜日にしたいからとの理由で、舎監兼務は断わられ、学校を出られて広島市から通勤されるようになった。

その舎監の後任に、本校卒業生の小原恵美子氏にお願いして、舎監の任務に就いてもらった。母校愛の人一倍強い小原さんは、それはそれは実によくやって下さった。率先垂範型で誠実一筋に生きる人で、本校の教育方針にぴったりの人であり、又その指導力のある良い舎監であった。

校舎を可部町に移す

二十八年四月頃から、可部町の町会議員、神田五郎氏外二〜三名の方々が来校になり、可部町に帰ってほしいといわれた。それには「可部町の元中原小学校を現在可部中学校が使用しているのだが、来春新校舎が完成するので、そこが空くことになる。それで、その校舎を求めて可部に帰ってほしい。」との要望であった。

元々、郷土の文化向上の一翼を担いたいという意志から創設した学校なので、それには安佐郡の中心地の可部町で発足したかったのだが、当時土地が求められず仕方なく古市町で建物を求めた。開校三カ月後、この地に移ってきたのだから、〃可部の地に〃とのお言葉には、飛んで行きたい気持であった。

しかし何分にも病床にある身のこととて、その校舎をすぐ見に行くことも出来ず、且又、創立の精神が〃最少の学資で最大の教育効果を挙げ、役に立つ有用な人材の有成〃を掲げている我が校なので、従って授業料も低額にしていた。そして月々の経常費も不足するので、兄から毎月私の養生金として送って来ていたものも学校経営につぎ込んでいた有様であった。

当然、校地校舎を購入する余裕はなかった為、その資金についても考慮せねばならなかった。そこで「よく考えたり、相談しておきましょう。」と御返答申し上げておいたところ、又引き続いて、その話で、今度は議員の替ったメンバーの人たちが四人お出で下さるなどして、可部町に帰ることをしきりにお奨め下さった。そこで病床から起き上がり腰をかかえて、垣内・森本・下垣内の三教諭と可部の地に参り、位置・校地・校舎を見て、これなら位置もよいし広さも現在とすればまずまずよいだろうということで帰ってきた。早速、長男や里の兄に相談して求めることに決心したのである。

それから間もなく、又可部町から来校下さって、価格の折衝に入ったのである。やはり、当時の相場よりやや高かったのであるが、買う事を承諾したのである。

それから資金の調達のため、仰臥の身ながらも手紙や電話で一生懸命に努力し、まず見通しのついた頃、又可部町から代表者がお出になって「会議の結果、先般の価格では安すぎる、もっと値よく買ってもらわねばということになりました。」というお言葉に、私は一寸異様な感に打たれたのであった。それというのは、私の方から決めた価格で

なく、可部町から打ち出された価格をそのまま承諾したにも拘らず、「町議会の結果云々とは、きこえぬ話ですねー。」と申したが、人生で最も思慮分別の良い年齢層の方々で、しかも町政を司る重責におられる人達が、三人も並んで座ってのお言葉である。年取った病臥のか弱い女性一人との対談なので、その場の空気は筆舌には表わされぬ程異様なものであった。

しかし私は勇気を奮ってこ、こぞと一息ついて、「それでは、幾らならよろしいんですか。」と申したら、「土地一坪壱千弐百円だったが、壱千五百円だ。」ということでしたので、私は暫く口を閉じて黙っていたのだが、「よろしゅうございます。それでいただきましょう。」と申したら、お三人があっけに取られたような顔をして、お互いが顔を見合わせておられた。それではよろしくといって立ち去られた。

後から聞いたことなのだが、私の方へ買ってほしいといってこられた後、水素会社を誘致したらということになって、武田に断る理由として、「値段を高くすれば、武田はついて来ぬであろうから。」という作戦をめぐらされての事であったとのこと。その三人が私方より帰る道すがら、「とてもようついて来ぬと思ったが、意外であったのー。」と会話したということであった由、これも後から耳に入ったことだ。

その直後、私は仰臥のままで、当時の町会議長中山（歯科医）さんに宛てて信書を出した。その内容は、「この度、貴町よりお奨めいただいた校地・校舎購入方の件は、本校を可部町に誘致下さる意味と考えておりましたが、そうでなく可部町所有の土地建物の処分の為のお言葉であって、その後、本校よりも可部町にとって有利な者が現われたので、その方に寝返りを打とうとされたという事を洩れ承りましたが、大可部町がこのような操をひるがえすようなことを考えられた事に、聊(いささ)か不快な感を抱いております。町政の中核であらせられる議長殿におかれましては、可部町の名誉にかけても、今後このような事のないようお願い申し上げます。」

その後、可部町議会の席で「武田さんから痛い手紙を貰ったでようー。」と話されたという事も聞いたのである。別に痛いのではなく、私の真実を申し上げたまでである。

兎角、こうした波乱曲折の中、とうとう可部町のその土地建物の売買契約の調印を、二十八年八月二十日に可部町役場で行った。校地は町有のもののほか、個人のものもあった。辻、土井、中川、その他二～三の方のもあったが、その時一緒に調印し手付金も支払ったのである。その校舎は、二十九年二月末と五月末との二回に亘って明け渡して貰ったのであるが、代金の手付けの残り分は、二十八年十二月末に全部支払った。そして一月から五月までは、学園所有の土地・建物を可部町へ無償で貸与してあげていたのである。世の多くの例は、私学などの場合は、市町村が便利を計るという事は聞くが、私は反対のことをしてきたのである。

二月に一部明け渡してもらったので、四月の新年度の発足は可部町のその校舎でしたいと思ったので、早速、移転の準備をして三月上旬に可部町に移ってきたのである。校舎は平屋二棟の二七〇坪、二階建一八〇坪であった。平屋は明治初年の建物で、全く老朽校舎であった。従って汚れて古びていたが、「無から有に」「狭いところを広く」「きたないところをきれいに」という主義で何事もやって来ていたので、この老朽校舎に手入れをして磨きをかけたら、見違えるほどきれいになった。町の人々がお寺の前を通るような気がするなんておっしゃっていたそうであるが、仏様の境内と表現されたことは、清らかなということで、それほど美しく掃き清められているという意味であろうと思う。

校医について

古市の旧校舎は寄宿舎として使用することにして、学校は五月の可部町からの完全校舎引渡しをまって、武田学園も完全引越しをしたのである。早速、笹木医院から校医の申し出をいただき、有り難く感謝した。しかし、舎生が古市にいるので、古市時代の冨士田校医をすぐ引いてもらうわけにいかぬので、

一年後に笹木先生に校医を依頼して、現在も尚この笹木先生に続けてやっていただいている。

笹木先生には、ただ校医というだけでなく、舎生の発病など随分と御心配していただき、御苦労をかけていることに対し、申し訳なく思っている。

運動場の整地　校地の一部に埋立てをせねばならぬ所があるので、勤労愛、母校愛の精神を培う意味と、一面経費節約というわけで、毎日放課後に生徒・職員で太田川の河原の砂を運んだ。器具も十分ないので、ある者は風呂敷に入れて運んだりしていた。その頃、中村の米屋さんの方から三輪車で運ぶのを加勢してやるといって運んでいただいたことなど忘れられぬ御恩の一つである。

こうして金をかけず、自分達の力と御親切な中村さんのご好意で、七百坪ばかりの運動場が出来上がった。その周囲に板垣をめぐらしたところ、がっちりとして学校らしくなって非常に嬉しかった。そこまでに至ったのは、移って満二年たってのことである。

運動会　可部町での一年目の運動会は、校舎と校舎に挟まれた（帯みたいな）細長い運動場で行ったのであるが、三年目からは、当時としては広い立派な正方形の運動場で、入場門も退場門も作って大々的に父兄へも案内して行ったのである。生徒も先生も、自分達の力によって整理したグランドで運動会をするので、その喜びは一入であった。

運動会には、本校創立以来やって来たワンド体操がつきもので、この体操は見た目も美しくて、その上運動の意義の十分含まれた体操なので、運動会等には適切な体操であるので、古市時代も古市小学校の運動会にも参加してこの体操をして好評を博していた。

古市時代は三百坪のグランドであったのだが、それでも毎年欠かさず運動会は行っていた。元より体操台も何も無

いので、ミシンの入っていた木の箱を伏せて、それを体操台としてやっていたこともある。近所の子供達がそれを見て笑っていた。私はその当時も病気で伏せっていたのだが、そうした行事のある時はコルセットを掛けて入場・開会式には出るようにしていた。その感激は一入であった。誠に小規模であったが、あの時代が本当に懐かしく、希望の多い毎日であったと思う。尚又やりがいを一段と感じていた頃でもあった。

可部に帰った頃の私の感想

グランド整備後の夏の夜、ギブスベットから出てコルセットをかけて、腰をかかえてグランドをそろりそろりと歩いて空の月を眺め、又その運動場を見廻して、〃ああ、有り難い。こんな立派な運動場も出来、広い大きな校舎も求められて、先生達も私の教育方針にそってぴしぴしとよく指導して下さる。又生徒も素直に校則を守って、社会から喜ばれる人間になってくれつつある。有り難い嬉しいことである。自分は本当に幸せである。〃神に仏に対し、澄み切った夏の月の夜空を見上げ合掌し、涙ながらにこの上もなく感謝した晩もあった。又或る晩は、平屋の校舎二棟が二列に並んでいたその校舎の廊下の端に立って、向こうの端までの廊下の長さを眺め、喜びに浸ったこともある。

又自分は今から考えると、あの頃がとても懐かしい。小さな夢に希望と喜びを抱いていた頃が、一番幸せであったのだ。これは二十九年、三十年、三十一年頃である。

私は、人間は常に止まることなく前進しなければならぬと考えている。知識に於て、識見に於て、又自分の仕事に於てである。歩幅は狭くても、歩数は少なくとも、進むことである。退歩であってはいかぬ。徳川家康公の教訓に〃人間の一生は重荷を背負って遠き道を行くが如し、急ぐべからず、不自由を常と思えば不足なし〃というのがあるそうだが、この教えに従って私の一生も過ごして行くつもりで、いそがずに遠い彼方に希望と夢を抱いてぽつぽつと進んできた。又これからも進んで行こうと思う。

その意味からも、創立前からの夢であった〝名実共に兼備した教育機関の設置〟に取りかかったのである。

女子専門学校は実力養成主義で、これも勿論必要である。某県立高校の校長先生の言に、「武田学園は高校教育の盲点をついた教育をしている。」とおっしゃったということを風のたよりで聞いたことがあるが、別に意識して盲点をついた教育をしているのではなかったのだが、要は心を育てる教育（人づくり）、知識技能の断片的な教育でなく教育が生活に結びつく教育、女性の性能の伸長教育によって実力ある役に立つ間に合う人間の育成に力を入れているのである。

八　新設・災害・復興

高等学校令により高等学校設置

日本の国は、資格もまだ一応間に合う中の一条件の時代なので、高校卒の資格も与えられる機関をと思い、三十二年度から広島県可部女子高等学校を新設の予定で、三十一年度よりその準備に取りかかった。

当時の高校設置基準として、まず校地が五千坪以上、校舎は生徒一人当たり一・五坪、それに設置学科に必要な機械器具（即ち校具・教具）、校舎は普通教室・特別教室とそれぞれ生徒数に応じたもの、校地購入費は別として校舎の設計図（青写真）、図書および諸設備のリスト、見積書、それに必要な資金の証明になるもの（即ちそれだけの金額を積み立てたものの銀行預金証明書）、校則、教授陣容、新設二年後までの経理予算書等を添付して、認可申請書を提出することになっていた。

まず土地を見つけるのに大童であった。元町長の山田保氏に依頼して、現在の可部町字中島に当時の台帳面積六千二百坪余（実測面積にすれば約七千坪）、坪単価は当時約八百円のところを壱千円で、山田保氏・森本堪太郎氏・木村茂氏のお世話で購入することに決定した。

三十一年八月調印し手付けを打ち、十一月末までには代金を全額支払い、登記も終えた。それと同時に、前記の高等学校設置認可基準による校舎その他必要なものを整えて提出したのが、三十一年末だった。申請書類には校地代金は別として県の指示により右の諸施設、設備費として必要な〃一金参千九百九拾六万五千円也〃の金額を地方の銀行に預金して、その銀行の残高証明書を添付して提出したのである。

同年に尾道高校も新発足の準備をしておられた。西部と東部であるが、よく県庁で出会っていた。

明けて三十二年二月二十日付で高等学校設置認可が下りた。その時の喜びも又一入であった。と同時に、充実した教育をして武田学園独得なものを発揮しよう。即ち、女性の天賦の特性を生かした教育こそ本校の特色であると、改めて思った。

三十二年四月からの開設なのであるが、それまでには新校地に新校舎を建築してその校舎で出発するまでには至らなかったので、ひとまず女子専門学校の校舎を使用することにした。当時女専の二年生が四学級あったが、その中から高校二年への編入制を県で認めてもらい、編入試験の結果、一学級だけ高校二年生を置くことにした。その生徒達には女専に於て足りなかった単位を高校二年間で補うことにして、高校は二年生一学級、一年生二学級で出発したのである。

教員は、教頭に峯元藤吉氏を採用した。この峯元藤吉氏は広島文理科大学文学部の哲学を専攻され、郷里鹿児島県の公立高校に勤務されていた方であるが、学友の広大の金子教授の紹介により来校願ったのである。峯元氏には教頭

役と共に高等師範の専攻学科である国語科担当、宮本昂氏（数学、体育）、小田正彦氏（理科）、福井敏枝氏（食物）、躍場久吉氏（社会）、養護教諭に市川八重子氏、音楽、書道、被服、染色、手芸等の担当は、既設の女子専門学校の教官が担当することにしたので教諭陣も揃った。

開校式

三十二年四月八日午前十時より、広島県可部女子高等学校の開校式を、新入生一年一〇三名、二年生三十七名（女専より編入）の計一四〇名、教官十三名をもって、感激の中で厳かに取り行った。

女専の新入生九十一名の入学式も同時に行った。新学期の授業始めは四月九日であった。

火災に遭い校舎・校具焼失

三十二年四月三十日午後一時二十分に出火。午後の授業に入って二十分たった一時二十分、当時の校舎の中では一番良い、木造二階建の校舎二階西端教室の天井裏の角の窓から火を吹き出したのである。

その時、その教室での授業は内藤昭子教諭であった。その火を見つけたのは生徒の一人である。

当日は風が強く、風速十メートル以上であったので、すごい勢いで火は燃え上がった。火元は階段のついている方の西側であったが、火元が天井裏なので、その階段からも生徒をおろすことも出来た。又半数の生徒は、東側に非常階段がついていたのだが、そこから避難させるように誘導した。ところが出口の扉に大きな錠前がかかっていて簡単にあけることが出来なかったが、生徒は二階の廊下から扉を飛び越えて、直に非常階段から下におろした。

こうして、全員の生徒を無事避難させることが出来た。

火は見る見るうちに校舎全体に廻り、百七十坪の校舎は一時間二十分で全焼した。幸い風が西風であり、西側には民家はなく田んぼであった為、他に類焼せず、その一棟の校舎が焼失しただけですんだ。

私のカリエスもその時はまだ十分回復していなかったのであるが、日常から火災についての消火避難訓練の組織は

出来ていて、度々訓練をしていたので、避難は勿論、重要書類や校具・教具の搬出も一部分ではあるが手順よく出来たが、消火には全然手がつけられなかった。それは火元が天井裏であったことと、それに風速十メートル以上の強風で火の廻りが早く、全然素人の手には及ばなかったので、消防隊にお縋りするよりほかなかったからだ。こんな時には、消防隊が来て下さるのが実に待ち遠しくいらいらした。可部町の消防隊に続いて、次々と近郷の消防隊が目ざましい活躍をして下さった。これによって御近所の民家や校舎の二棟も被害なく、出火した校舎一棟だけで難がのがれられた。

尚、生徒や教職員に一人の死傷者もなく、全員無事避難出来たことは、不幸中の幸いであった。

焼けた校舎の裏に、十六坪の宿直用の小さい家があった。そこには宿直代りをしている私の荷物が入っていたのだが、校舎が鎮火した後で、その家が全焼していたことに気がついた。ここに置いてあった私の衣類・家具等の焼失はものの数ではないのだが、私の宝である紀元二千六百年記念の賞勲局よりの勲章、文部大臣からの教育功労表彰の勲章、教員免許状等、尚私物ではあるが、標本にしていた日本刺繍入りの衝立・床軸・額・大中小の袱紗等、そして長男夫婦の結婚衣裳といった記念の物もあった。ところが、有り難いことに、生徒の佐々木イチ子さんが仏様だけは出していてくれていたことは、何ともいえないほど嬉しく、又有り難く感謝した。仏様まで焼いていたら、私の心の痛みも一入深かったと思う。

今一つ辛かったことは、火元の教室の隣の中二階の室に、古市の旧校舎から引きあげてきた寄宿舎生十八名の者の荷物を入れていたのが全焼したことである。これは気がつかなかったのではないが、火元のすぐ隣りであったので、どうすることも出来なかったのである。生徒たちが声をあげて泣いた。私も一緒に泣き乍ら、御免、御免の言葉の連続であった。

出火の原因は、漏電より外に考えられないのであるが、電気会社で警察と一緒に一週間もかけて調べられたが、漏電とはどうしても認めてくれなかった。火災保険に入っていなかったことも大きなミスである。世間知らずであったとはいえ、建物を可部町から譲り受けた時、何にも気がつかないままであったことを、強く反省している。

私の九年間の闘病生活も終わりを告げようとした時点で、又こうした災難に遭遇したことは、私の重ねての試練であった。

授業再開

色々と苦労して、ようやく高等学校発足に至り、大きな喜びと希望を持って開校式をやっと済ましたばかりのところで斯した大火に遭い、大切な校舎や高校発足に当たって調達した校具・教具・図書も空しく消え、元の一に戻ってしまった。私は、自分の不運を痛く感じた。

しかし、ここで悔んだり悲しんだりしていたのではいかぬ。復興、復興だ。まず授業再開が一番だ。翌日の五月一日のみ授業を停止して、焼け残った平屋二棟の校舎で、平常通りの授業を開始したのである。

御礼廻り

出火して御迷惑をかけた陳謝とお世話になった御礼のため、近所は元より各消防署、警察署、県庁等へ御あいさつ廻りをした。何処でもいたく同情と励ましのお言葉をいただき、感激の涙にくれた。

その御礼廻りをするに当たり、本校の女子の先生方から、私の物が全部焼けて身につけるものが無いことに心を砕かれ、我々がお見舞いとして一揃い作りますと御親切なお言葉をいただいた。私はその真心のこもった温い御心だけ頂戴して固く断り、焼けた中から取り出して縫い直して着用して行くことにし、先生方のそのお見舞は学校の復興の方へ廻していただくようにお願いした。

後片付け作業と復興準備

兎角、このように高等学校新設早々大火に遭ったことは、私は元より学園にとっても大きなショックであった。落胆していただけでは生徒達は勿論、父兄に対しても相すまないので、早速学園

復興に取りかかった。

まず残材の整理である。黒こげの柱が校舎の形をしたままで残っているのを、教職員や父兄のお手伝いで倒した。当時、父兄の一人に土井武俊さんという大工職の方がおられて、その方が先頭に立って主な柱にのこを入れ、ロープをつけて引張り、倒してしまわれた。

私はその光景に、可愛い我が子が奪われたような悲しい辛い想いで胸が一杯になり、涙がとめどなく流れて、まともにその黒こげになった柱を見ることが出来ず、よそへ向いて立ち尽していた。その時、私の側に立って見ていた生徒の黒田郁子さんも、「先生！」といってしゃくり上げて泣いた。あの時の自分の姿、心境は、永遠に忘れることは出来ないであろう。こうした残材の片付けから、焼けた校具・教具の整理に取りかかったが、理科の機器・ミシン・調理実習用具・標本等、焦げて憐れな跡形は今でも私の目から消え去らないのである。

火災跡の整理をすると共に、失なったものを再び求めて授業に支障のないようにしなければならぬので、その計画に取りかかった。そして焼失した校具・教具を調達する為に、復興資金作りの計画を立てて実施に着手した。

この復興資金作りには、教職員も生徒も一生懸命になって下さった。しかし、寄付だけは、生徒父兄からはいただかないことにした。それは、本校発足時からの私の強い決意である。放課後、日曜を利用して男子の教員は、映画会を各中学校を廻って行う、生徒達は、田植、麦刈、仕立物等をして、その報酬をクラス単位で目標を定めて積み立てるなど、各々懸命に努力していただいた。

又、昭和二十七年から常石で鉄工所を経営していた長男からの援助、更には神原秀夫理事から多額の復興資金の寄付、また親戚一統からの見舞いなどによって、校具・教具の調達と古市寄宿舎からの十八名の舎生の焼失した品物の弁償等、短日時内に復興出来た。授業は休講することなく進めることが出来た。

再び病床に伏した

二十三年から九年間、病床の中での学校経営をしていてやっと離床出来たばかりのところへ、こうした災難に遭って大きなショックを受けた関係か、又は復興の為にあれよこれよと今まで以上に気をつかった関係かわからないが、また臥床の身となった。以前と同様に、教員室に夜・昼ともベットを置き、その上での学校経営である。もう九年以上もこの生活なので、自分にとっては余り苦しいことでもなかったが、思う時に思う所へ出歩き、色々折衝の出来ないことが苦痛であった。

例えば、県庁や私学振興会に出向いて、色々と相談したり依頼などがしたくてもそれがかなわず、手紙なり、又電話などによるわけで、それがなかなか会って話すように徹底したことにならないのに不都合を感じていた。

九　中島新校地へ

古市町よりの迎え

記事が前後したが、火災の翌々日、古市町長加崎喜代三氏が来校になり、「実は昨日、臨時町議会を開催して、武田学園に古市町に戻ってもらおうという決議が出来たのだが、どうか帰って来てくれないか。校舎は、大町小学校をあけて貸与しようということになった。」と、誠に有り難い勿体ないお話を持ち込んで下さったので、私の感謝と感激は一入であった。武田学園をそうまで思って下さる古市町の町民の方々の温い御心、その優しい御心にすぐお応え出来なかったのが、今も尚申し訳なく、心残りがしている。

お応え出来なかった大きな理由は、まず、可部町中島地区に七千坪の土地を地区の方々に学校を創るのだからといって譲渡してもらったばかりの時期であったこと。次に、県庁への高等学校認可申請書に、学校の所在地をこの中島

として認可を受けていたこと。今一つは、創立前から学校所在地を可部町にしたいと思っていたこと等である。

学校所在地を可部町にと思い考え続けてきた自分の心理が、自分ながら今でも時には不思議に思うのである。それは、可部町の極く一部の方々ではあるが、武田学園に対して必ずしも好意を持って下さっていない感じを度々受けることがあるにもかかわらず、ついつい可部の地に執着するからである。

その一部の方々の言葉の一、二を挙げれば、この中島の土地を購入した時、ある人が「武田はよそ者だから何も知らずにあの中島の〃荒廃〃した土地を買うたそうだが、今に大水に押し流されるであろうに、云々」。又或る時は、町役場の助役さんと衛生課主任が来校され、「学園の裏に町の屎尿(しにょう)処理場を設置しようと思う、云々」、驚いた私は、学校環境衛生上良くないと強くいって断念してもらったこともある。又、或る時は「武田はどんどん金を儲けて、校舎を次から次へと建てる、武田株式会社だ、云々」。そして「武田学園は頭の悪い子が行く学校だ。」などと、町民の方々がいわれているということを、度々耳にして来たのである。

私は、〃教育は普遍的である。秀才だけを集めて教育するのが教育ではない。高等学校教育を受けたい意欲を持つものに対し、高校の課程が終えきるだけの能力があれば、秀才でなくともその意欲を満たしてやることこそ、真の教育である〃と確信している。頭が良くても、人間的に欠けていたのでは社会のためにならない。数学や国語で百点がとれなくても、人間的に百点の人こそ、社会を浄化し社会に貢献することが出来ると信じている。資金難の中で校舎を建設していく学校経営の苦しさを解ってもらう事など考えないにしても、金儲けとか株式会社などいう評語は嬉しい言葉ではない。こんな苦しい中でも、地域社会の為にと思い、文化の中核となる学問の府を拡張して行こうと努力してきていることなど全然わかってもらえないことは、聊か寂しい感もしないでもないが、そんなことは教育の大局から考えれば問題ではない。そんな小さな問題にこだわっていたのでは、教育の仕事は出来ないので、信念を持って

発足した教育であり、又、信念を持って選んだこの地である。町民や周囲のことなどどうであれ、兎角一生懸命やり通そう、と自己に鞭打って初心の貫徹に努力を傾倒することが肝心なことだと信じ、可部の地を動かないことにしたのである。

中島新校地造成
校舎新築・移転

土地造成は資金の都合で、一棟の校舎を建てる所だけを土木工事専門の原田権右衛門氏に依頼した。校舎は設計を河内設計事務所に託し、建築施行は可部町の竹野下組に依頼し、現場監督は、当時町役場の建築課勤務の上中敏雄氏に勤めの合い間に見て貰うことにして、施行実施に入ったのが八月の始めであった。建物は木造モルタル二階建延三百三十坪である。竣工が十二月二十五日で、施行者から施主に引き渡された。

一方、焼けた校舎の棟に松材で一尺七寸に一尺角の五間ものが八本もあったのが、真(しん)まで焼けていなかったのでそれを主材として、五間に十二間の小さい講堂を建てることにしたのであるが、元より土地造成は生徒や教職員に協力してもらって五日間で行い、十月の始めに取りかかった。施行者は、当時父兄の土井武俊氏に依頼したのである。竣工は、三十三年一月二十八日である。(これは、数度移転改築して、現在大学の小講堂として活用している。)

新校舎に移ったのは、三十三年一月三十一日。当日の午前八時三十分に全校生徒は旧校庭に集合し、旧校舎との別れの式を厳かに行った。九時二十分、最高学年の重光幸子さんが旗手となり、校旗を先頭に懐しい学舎と涙の別れを告げ、二列縦隊で、三八二名の生徒が隊伍を整えて新校舎に慶びと希望で胸をふくらませて入ったのである。あの時の感激はとても筆舌に表わしきれないものがある。今も尚私の脳裡に胸中に強く残っている。

七千坪に近い広い校地の中には、田んぼあり畑あり籔ありで、広漠たるものであった。

全体の校地の造成は当分出来そうにないので、四反ばかりの田んぼを三年間ほど舎生を主体として耕作した。取り

入れの時期には、教職員の方々にも援助を仰いだ。また野菜も作って舎生の食糧に充当したものである。食糧難の時でもあり、当時の舎生は、食材の現物持参ということになっていた。（最少限度の学資で最大の教育効果を挙げ、役に立つ間に合う人材の育成ということが、私の教育目標の一項目にしているので。）

寄宿舎の調理は、初めから教育即生活という意味で、学校に於て学習した調理の実習の場として、生徒達に輪番で食事の用意をさせていたので、作った米は勿論、大豆は豆腐として、菜種も油として、食膳にのぼらせていたのである。だから、当時の生徒は、炊事当番となれば、朝四時に起き、六名で二百余名の舎生の食事を作っていたのである。三十三年度中の寄宿舎は、可部駅裏の旧校舎の中にあったが、そこの炊事場の設備は小規模で平釜が四つだった。朝はまず二つの釜に弁当分の御飯を、一つは弁当のおかずを、一つは味噌汁を炊くので、結局御飯は二回炊いていたのであるが、結構時間には間に合わせていた。炊事当番の日は、みんな緊張して頑張っていたので、一年の時より二年に、二年より三年と、段々と台所の切り廻しも良くなり、又味付けも上手になり、家庭の主婦振りが身について、女性として良き修行となっていたのである。

当時は、生産から消費経済までを舎生が司っていたわけである。

校地整備

校地の造成も、生徒や教職員の協力の元に、田畑の作付けを年々減らしつつ、運動場作りなどを少しずつやったのである。

三十三年度中は、旧校地から朝五時に起きて新校地に出かけ、七時半までは教職員と舎生とが新校地の土地整備のために、竹の根を掘り起したり土を運んだりした。毎日の放課後も精出した。

ある時、籔の竹の根を掘っていたら、宮本教諭から「ブルトーザーに頼んでやってもらいなさい。そうすりゃ一ぺんできれいになりますよ。」と言われた「でも金がかかるので。」というと、「約手を書いて後から払いなさいやー。」

と教えられた。約手というのはどういうものですかと聞くと、その方法を詳しく教えてくださり、初めてそんなやり方もあるということを知ったのである。

早速、ブルトーザー屋さんの所へ相談に行って現地を見てもらって見積らせたら、五万円で出来るというので依頼した。七百坪ばかりのところが三時間できれいになった。改めて機械の力の偉大さを強く感じたものである。結局は、五万円の代金を約手にせず現金で支払ったことである。

中島校地進入道・鈴蘭橋造り

新しく求めたこの中島校地は、当時は民家から三百米位も離れた田んぼの中であった。従って人の往来する道はなかったが、元の可部町本通りに通ずる可部線の踏み切りの所から入ることが出来るので、この所をまづ通路とすることにして、道づくりを始めた。それは、丁度踏み切りの所から校地の前の古川に合流する小川があり、その小川に沿って、一米幅の堤防を通らせて貰うことにしたのである。その堤防には、その小川が、見分けのつかぬまでに長い草が繁茂していた。それを教職員で刈り取った。次は橋かけ作業である。旧校地より焼けて黒こげになった校舎の材木を運び、堤防と校地に渡し、カスガイ釘で頑丈に止め、その上に柴木を置いて土を盛り、両側にどっしりした黒光りのする材木を打ちつけ、何とか格好を整えた。素人造りにしては上出来であった。

この橋の命名は、本学園の校章の鈴蘭を引用して『鈴蘭橋』とした。この鈴蘭橋の渡り初めは、本学園最年長者阿部善五郎教諭（六十九歳）を先頭に、武田、峯元、躍場、宮本、小田正彦教諭の順にテープを切って、渡り初め式を行った。

この道作り橋造りには、生徒の手を借りず、峯元教頭を筆頭に教職員全員で三日間で終えた。当時、小田正彦教諭はその年の三月に山口大学を卒業したばかりの新進気鋭の青年教師であったが、この道作り橋造りに、水はあまり流

れてはいなかったけれど、その小川にズボンを膝までまくり上げ、白い足のままで長い草の中に潜り込んで、何に一つ不足をいわず黙々と草刈りをして下さった。先生のその姿は、今も尚私の目に心に深く刻みついている。いや小田教諭のみでなく、その頃の教職員は、我が学園を生徒を如何に愛し如何に大切に考えて下さっていたことか。この一つや二つのことだけでなく、この学園の基盤は、伝統は、斯して身も心も打ち込んで精進努力下さった教職員の方々のお蔭で作られたのである。この御恩は常に私の脳裡から離れたことはないのであるが、今日これを記述するにあたり、改めて心からの謝意を表します。

私学振興会より借入れ

第一校舎の建築費は高等学校設置認可申請時に用意しておったのだが、次々と校舎も建てねばならないので、私学振興会で火災復興費の借り入れのお願いに、三十三年一月八日に上京した（十年間も病床にあった身体であるので、少々不安でもあったけれど）。そして私学振興会の専務理事である高木一郎先生にお会いして事情を述べ、借り入れをお願いした。

その時の一般の貸し付けは支払年限が五年で、災害の場合は十年ということであった。私はそんなに長く借らないで早く支払って安心したいと思い、「一般の貸付期間で支払いますから、そのように手続きして下さい。」と申したら、係の方が不思議そうな顔で私を見て、「他の学校とは反対です。他の学校は少しでも長くしてほしいといわれるのですが。」と言われた。借金は出来るだけ少く、借りれば出来るだけ早く返すというのが、私の主義なのである。

兎角借用することにして、教えられるままにまず借り入れ申し込みの用紙に記入をした。次の段階は、正式な借用証書作成である。担保物件等の色々な書類手続きがいるので、それらを詳細に御指導いただき、必要書類の用紙一切をいただいて帰校し、書類作成に取りかかった。何しろお金を借り入れすることは始めての事で、よくよく聞いて帰ったと思うのに解らぬところが出てきた。崇徳高校の事務長さんが詳しいと聞いたので、御指導にあずかりに行った。

事務長さんから懇切丁寧な御指導をいただいて書類を整えて、お願いを兼ねて書類を持って再び上京したのであるが、その時振興会の方では、郵送で良かったのに、わざわざ持参されなくてもというお言葉であった。事務的にはそれで良いのかもしれないけれど、それでは私の心が許さない。借り入れる者としては、礼を正してお願いに上がるべきだと思っていたからである。

それから二カ月後の三月末、参百万円の申し込み通りの金額の貸与が許され、広島銀行可部支店に送金していただいた。

特別校舎建築

借り入れの参百万円を元にして神原理事からの寄附を合わせて特別校舎を建てることにした。設計は河内設計事務所、工事は竹野下組に施工してもらい、同年十月三十一日に竣工したのであるが、仲々立派な校舎(木造平屋建て、一九五坪)が出来上がった。礼法室・調理室・理科室・被服整理・染色室等である。

この特別教室の校舎は、当時としては随分完備していると好評をいただいたものである。県の文教係の信田主事が来られて「こんな立派な理科室がいりますか……。」と言われた。武田学園の高校出発は家庭科からであったから、そんな言葉も出たのであろうと思う。家庭科こそ理科系の学科であると、私は意識して作ったのであった。又、礼法室が、県下の高校には見られない規模と設備を備えているのに目を見張られたようであった。

礼法室の施設設備を充実させたのは、この学園発足の主旨の一つとして、日本女性の麗わしい伝統を失わないで、益々高揚して行く女性を育成しようという意味から、学園訓の中にある〃謙虚にして優雅な人になりましょう〃即ち慎みのある礼儀の正しい上品な人を育てる場としての施設として、礼法室を完備させ、専任の礼法教師を置いたのである。

調理室のユニットキッチンも、都会向きと農村向きの二種類を作ったが、それが十六年後の今日、各家庭の台所に

用いられてきている。当時は、この施設を方々から見学に来られたものである。

この建物を建てる資金は用意出来たけれど、土地造成費がないので、自分たちで敷地を造成した。昭和二十年十月十七日の豪雨で、太田川が氾濫してこの地一帯が押し流された時の土や石が、あちこちの田や畑に山積みとなっているのを運送屋に頼み運んでもらった。積み荷、荷下ろし等は生徒に手伝ってもらって、余り金をかけずに敷地を作ったのである。

考えてみると、当時の生徒は仲々愛校心に燃えた生徒が多かったと思う。中には少々不平のあった者もいるであろうけれど、それを言葉にも態度にも出さず、黙々とよくやってくれたものである。それが、ただ母校のためになったばかりでなく、「あの当時の、勤労を愛する学園訓の実践が、今社会に出て大いに役立って皆さんから喜ばれ、又自分にもいい修行になった。」と今になって卒業生が当時のことを語り、私を喜ばせてくれる。

三十三年度は、まだ中島新校舎のみでは五百名近い生徒の授業は出来難いので、旧校舎（可部駅裏）も使って二カ所で授業をしていたのだが、十月に特別校舎が完成したので、少し狭隘を感じたけれど、第一校舎十教室、特別校舎四教室、小講堂の三カ所で授業をすることにした。

中島校地内に寄宿舎を作る

三十三年度の終わりから旧校舎平屋二棟を、新校地に寄宿舎として改造移転工事を始めた。この工事は、又私学振興会で三百万円の借り入れをしたのである。三十四年八月末（木造平屋三一五坪）竣工したので、あちこちに宿泊させていた舎生を一括ここに移らせた。

その時の舎生の喜びは一入であったが、私自身、大事なお子さんを預って、昼夜二十四時間教育をしている私の責任の重大さを痛感していたので、当時としてはこれ又大規模にして完備した宿舎で生活させることが出来るようになって、それが私に大きな喜びと安堵をもたらしてくれた。

こうして、一つ一つ生徒の為に教育の為に築き上げて行くことの喜びと希望によって、その間の苦労は吹き飛んで終うのである。

商業科新設

昭和三十四年度には、社会情勢から見て、産業教育の拡充を計らねばならぬと考え、商業科を新設することについて色々と研究していた。大体の計画を樹て理事会にかけたところ、時宜を得た学科新設だということで、決議となった。三十四年一月に県に設置認可申請書を提出していたのが、三月三十一日付を以って正式に認可された。

三十四年度の生徒募集要綱に、商業科設置認可申請中として載せていたのだが、いよいよ認可がおりたので、各中学校にその旨の文章を送ったが、何分にも認可の時期が遅かったので、定員までには至らなかったが、四十名の新入生を迎え、島本正則教諭、横山勉教諭の二人を商業科専任教師として迎え、ここに発足したのである。

本館建築

学科増と共に、生徒も年々増加するので、校舎増築の必要に迫られた。

普通教室、特別教室は出来上がっているので、今度は管理部門を備えた本館の建築である。本館建築の準備に移った三十四年の秋までは、校地内の田に稲を約三反から四反作っていたが、本館を建てるとなるともう表の方へ稲を作ることも出来ず、稲の取り入れ直後に校地造成に取りかかった。素人の我々の手ではもはや不可能なので、祇園町の桑原組に依頼して造成したのである。

この本館敷地造成と共に、グランドも造成することにした。今までのグランドは、元の畑であった所を我々の手によって地ならし程度に整地して使用していたので、現在のグランド(旧中島校地のこと)の半分足らずであったが、今回は本職の手によって出来たのだから立派なものである。但しグランドの部分は、雨の場合は水はけを良くせねばならぬというので、裏の根の谷川の河原（漁業組合にお願いして）から小石を拾って敷いたのである。これは又、我々

が生徒と共にその作業に当たった。授業の合間並びに放課後を利用して、輪番で二週間位でやり終ったのである。

本館は、鉄筋コンクリート建てにすることにした。資金は、丁度旧校地の建物を撤去したので、度々旧校地を売却しないかといって来られていた大和重工へ、壱千五百坪ばかりあったのを五十四号線の道路に予定されていたその幅員の中心から西側を譲渡した。その代金とその他を加えて、この建築費に充当したのである。

設計は従来通り河内設計事務所にお願いした。亀本技師が担当で設計されたが、仲々工夫を凝らしたデザインで、又建築も入念ですばらしいもので、三十五年九月から取りかかり翌三十六年六月竣工したのである（鉄筋三階建て約七〇〇坪）。

この建物は、鉄筋コンクリート建てで、当時の田舎の学校としては珍らしく、近郊にないと言って、方々から参観に来られるような状態であった。

この建物の変わったところは、まず基礎が高くて地下室が物置きになっていること。そして、階段教室（理科室）、整容室（鏡の間）付きの被服構成室（和裁）、各机に電気コンセント付でアイロンやミシンの使用に机を離れないで出来る便利さを考えている被服構成室（洋裁）、そして図書館は天井を高くして明るくしてあるなど、当時としては非常に合理的に近代的に出来ていたと思う。

校舎は立派に出来たが、今にして考えてみると、あの可部の中央である可部駅裏の校地を、今暫くあのままにして持っていたら、学園の経済運営が楽に出来ていたのではないかと思う。何しろ、私に商売気がないこと、従ってそんな知識もなく思慮もなく経営能力が全然ゼロ、唯々教育一筋に生きてきた人間なので、一生涯貧乏で四苦八苦の経済運営であるが、それでも私は結構楽しい毎日を送ることが出来るというのは、貧しくて苦しい苦しい財政を司りながら、私の好きな教育の仕事に、こんな老齢でありながらも携わることができ、そこに大きな感激と喜びが湧き、毎日

を緊張して過すことが出来るからである。

三十六年商業科専用校舎建築　三十四年度に発足した商業科も、三十六年度は完成年度で、生徒数も多くなって校舎全体が狭くなったので、商業科専用の校舎を建築することにして、三月から工事を初め、同八月末に木造二階建て二九五坪が竣工した。

商業科主任で本校商業科の基盤を築き上げた島本正則教諭の喜びは、又格別のものであった。研究室に机・椅子・戸棚・応接セット等を自費で持参し、教室の方は実務室、実践室、簿記・計算実務室等々、ご自分の設計どおりに出来上がったので、これを有効に使うことに、更に緊張の色がみえていた。それを見た私の喜びは、更にもう一段上にあったのである。

校地買収一九七六坪　三十五年十月頃から、短期大学新設の下準備として、現在の校地（旧中島校地のこと）の西側を一九七六坪購入し、校地造成に取りかかった。

この短期大学新設は、私のこの学園の建学の時からの懸案でもあったし、又その頃から地域社会からも、父兄からも強い要望が出始めていた時期なので、愈々（いよいよ）実施の段階に入らねばという意図からである。資金は、この時も理事からの援助を仰いだのである。

十　可部女子短期大学の新設

短期大学設置準備にかかる

商業科校舎の建築と平行して、短期大学新設の準備に、昭和三十六年二月頃より取りかかったのである。

まず本学園は、女子専門学校も高等学校もともに家庭科から出発しているので、短期大学も被服科から出発することにした。

文部省へも度々参り、技術教育課や振興課に行って相談したり、指導を受けたりしながら、設置基準に合わせて、校地・校舎・設備・図書更に経営能力があるか否かを検討される材料とする為に、設置年度の二年前と二年後の、四年間の経理一覧を作るのである。その財政面を私が担当し、大下とみえ氏が付いて手伝ってくれた。教授陣容やカリキュラム構成等の教育面を、当時広島大学大学院博士課程三年であった横山邦治氏が、昼夜の別なく大半このことにつきっきりのように、礼法室の一角を使って、専らその準備をしたのである。横山氏の方は一人で担当したが、而し私もその方面へも首をつっこんでやった。

又文部省や審査委員（大学設置審査委員、私大審委員）の二方面へも出向いて、御挨拶や御指導を仰ぐために度々上京していたのである。東京都内は元より、広く千葉・埼玉県方面までも幾度となく出向いて御指導を仰ぐなどして、万全を期すことに努力した。

可部女子短期大学認可申請書提出

提出期限は九月三十日であったが、みんなが緊張してやったお蔭で、九月十五日までに完成したので、早速、小荷物として三十キロのものを二個にして十六日に広島駅を発送した。私と横山氏は十七日の汽車で出発、十八日未明東京駅に着く。小荷物受取場に行ったら、幸い荷物は着いていたので、タクシー二台で文部省に運んだ。

それからが大変、経済面の書類、教育面の書類、各々の厚みが二十糎近いもの六冊、正副各々二冊、学校の控各々一冊、その他私大審委員用、大学設置審委員用、それぞれの部門別のものが数種類を二十冊、三十冊というように提出するので、大きな荷物にもなるのである。これを一応庶務課の方へ提出しておいて、今度は三十日までに文部省の方で決められた日時に再び出向いて、文部省の一つ一つの質問に答え、また我々からも説明する等、あれこれ多忙であった。そこで、文部省の方でその書類が完全とみなされたら受理されるのである。それまでに、私は設置基準に従って書類を作って、文部省のそれぞれの係官の所で内容を見て貰い、良くないところはやり直し、差し替えするなどして、これで良いといわれたものを正式に印刷して提出するようにしていた。即ち、正式受理をして貰うまでには、ミスのないように整えていた。

しかし、何分にも初めてのことで、様子も要領もわからず面喰う事も多かったが、しかし、文部省でもそれぞれの部門で比較的懇切丁寧に御指導下さるので、それをよく聞き、よく守り、係官のおっしゃる通りに整えているので、正式受理の時には、誠にすらすらと何の疑義もなく受理して貰えて嬉しかった。今も尚、あの時の場面を思い浮かべると微笑ましくなるのである。

現地審査を受く

現地視察が短期大学新設の時には、私大審委員と大学設置審委員との二回に亘ってあるのであるが、第一回は三十六年十一月十一日に、私大審委員が来られた。短期大学の校舎としては、本館を充当し

た。

施設設備・図書・標本類等、総べて設置基準を上廻るくらい完備していたので、審議委員の注意等もなく、全委員から、特に日本女子大の氏家寿子教授からは「学長さんのご専門ですので、何も申し上げることはない。誠に立派です。」と賞めていただいた。

次に、大学設置審査委員三人が、十一月十六日に来校された。この時もあまり注意はなかったが、教授の研究室をもっと充実さすようにとのこと。それは、二人で一室というところもあったからである。一人一室にするようにとの事、また染色室が臨時的なもので三十八年度内につくる予定であったので、その図面を添付していたのを見て早く建てるようにとの注意であった。あとは前者と同じように、別に指摘するところはないということであった。

次は、設置認可証がおりるか、おりないかの問題である。これは、三十六年度大学および短期大学の設置認可申請されている全国の学園へそれぞれ手わけをして現地調査されてから、私大審委員会、大学設置審委員会が開かれて審議される。認可の可否が決定するのが二月二十日頃になるということであった。それが待ち遠しく、又心配なやらの毎日であったが、人事を尽して天命を待つという言葉のように、私としては現在の経済状態として、又私の力としては最善を尽くしたのだから、それから先は神に仏にまかせる外はないと思い、二月を待ったのである。

設置認可さる

ところが二月二十日、文部省から電話で二十日認可証を発送したからというお知らせをいただいた時の感激、喜びは説明出来ない。涙、私の長い間の思いがかなったことの喜び、私のような無学文盲な者に大学経営を委ねて下さった有り難さ、勿体なさ、又一面、現在以上の大きな大きな責任を背負ったこと、この役目を立派に果たさねばならぬと、決意と覚悟を一段と強めた。

ここにおいて、本学園発足時の女子専門学校は新設短期大学の母体となったので、三十六年度をもって廃校とし

た。即ち、発展的解消となったのである。そして三十七年度から既設の高等学校を短大の附属高校とするので、高校に普通科を新設した。

横山邦治氏は、長い間の大きな苦労が報いられて責任が果たされたことも嬉しいので、〃万歳〃と大きな声で手を挙げて我が事のように喜んで下さった。私は、横山氏に深く深く労を謝し、厚くお礼をいった。それと共に、強い決心を我れと我れに誓った。必ず立派な大学にするということを。

お礼廻り後の横山氏の厚い看護

設置認可証が届いた翌日、早速、横山邦治氏と二人で上京した。文部省の各関係課、技術教育課・振興課・庶務課・教員養成課、大学局長（当時の局長は小林行雄氏）、管理局長宮地茂氏、その他大学設置審議委員等を訪づね、厚くお礼を述べると共に、今後の努力を誓ったのである。

六人の審議委員宅を廻り、最後の委員さん宅（法政大学の先生だった。）を出てバス停まで出る途中から気分が悪くなり、目まいがして息苦しくて歩けなくなった。丁度幸いにその近所に薬局があったので、そこまで横山先生の腕にすがって連れて行ってもらい、病状を薬局の方に申して、二・三種の薬をいただき、そこで飲み、暫く休ませて貰った。横山先生の親切な心づかいと薬のお蔭で、一時間ほどで胸も楽になり気分も落ち付いてきた。

その日は予定のお礼廻りを終えて広島に帰ることにしていたのだが、横山先生が私の病状を心配して、到底この状態では広島まで帰れぬであろうから、神原の寮まで引き返して、二〜三日静養してから帰広したらと奨めて下さったが、私はその親切な言葉に従わないで、無理を押して帰広することにした。それは十有余年の病床から立ち上がって、三年足らずの時なので、「元の病気の再発であった場合は、又東京で一年も二年も動けなくなるかも解らん。いや、もうそのままになるやもわからぬ。」と思ったからである。兎角、学校まで帰っておかねばという気がしたからである。

横山先生が帰途の車中を気づかわれ、私には内緒でグリーン車にして下さった。節約家の私にグリーン車にすると言えば吃度断ると思われたからであろう。御自分は普通車なので、私の席まで度々足を運び、色々とお世話をして下さったのである。肉親にも勝るきめ細かい至れり尽せりのお世話をして下さったお蔭で、途中順調に帰広することが出来た。

横山先生には学校のことは勿論であったが、私個人のこともこうした病気をした時等は勿論である、いつも親切にしていただき有り難く感謝しているが、あの東京のど真中で動けなくなった時、真心こめてお世話して下さった有り難さは、今尚忘れられない。いや一生忘れられぬことである。

帰宅して二～三日は休養したが、次の段階（発足の準備）に入らねばならぬので起き上がった。喜びと希望に燃えている毎日なのだから、病気もどこかに吹き飛んで終まって、いよいよ本式な学生募集、県下の高校に御挨拶廻りと、忙しい毎日であった。

可部女子短期大学開学式

可部女子短期大学被服科認可は、三十七年一月二十日付であるが、同三月二十八日付で可部女子短期大学被服科卒業生に「中学校教諭二級普通免許状家庭」付与の認定があった。入学定員は四十名であるが、応募者の関係で、二割増として五十一名の入学許可をした。

喜びと希望に満ちて開学準備をしてきたが、いよいよ開学式の日がきた。四月十日、小講堂の会場に学生、父兄、教員入場、高校からも御臨席をいただき、厳粛な中に全員、喜びと希望に満ちた意義ある開学式を挙行出来た。

この短期大学校舎には、三十六年六月に完成した鉄筋三階建て七〇〇坪の建物を充当したのである。

第三校舎新築

終戦直後の出生率の高かった子供が、三十七年頃から高等学校に就学する時期となったため、高校生の数が七三八名となった。従って校舎が狭隘ということになり、この年も前年に続き校舎の建築をし

たのである。

木造二階建て一部鉄筋三階建て（三二二坪）は、理科（生物、化学、物理、地学）・社会科等の特別教室である。三十八年度の短大の一、二年の学生数が一一四名で、高校生はこの年が最もピークの年なので校舎の狭隘を感じながらも、中学校からの強い要望に応えなければと思い、四百余名を受け入れた。三十七年に建築した三二二坪の特別校舎の一部を除き、普通教室に使用せざるを得ない状態となった。

短大に食物栄養科増設

三十九年度より短大に食物栄養科増設の予定で、その準備に取りかかり、三十八年九月三十日設置認可申請書を提出した。

尚その準備としては、校地を現校地（旧中島校地のこと）の続き東側に二一五四坪求めた。そこに屋内体育館（鉄骨造亜鉛メッキ鋼板葺平屋建二八二・五坪）を建築し、短大と高校の共用とすることにした。それと共に西南側に短大校舎として、鉄筋三階建ての集団給食室、調理室、染色・被材実験室等四四五坪の校舎が三十九年三月二十日に竣工した。

こうした施設の為の資金繰りに東奔西走、一方では学科増設申請書作成に大わらわであった。幸いにして学術共に卓越した立派な教授の方々を招聘することが出来、充実した教授陣となった。文部省からも賞めて貰った。

十一月中旬には現地審査も終わって、一月二十日前後の認可の可否を待つ。今回の申請は二回目なので、初めての被服科設置申請時よりか落ち付いた気分で準備が出来た。

設置認可が三十九年一月十七日にあった。その時も文部省から前以って電話で知らせをいただいたが、認可証を手にした時は、矢張り以前と変わらない喜びと責任を感ずることにおいては同じである。

三十九年二月二十四日、食物栄養科卒業生に、中学校教諭二級普通免許状（家庭科）付与の認定を受けた。

続いて三月三十一日、食物栄養科の栄養専攻卒業生に、栄養士養成施設として指定を受けた。栄養士養成は、文部省の指示を受け許可を貰っただけではいけないので、厚生省管轄の認可を必要とするのである。厚生省の方は、県の衛生部を経由して申達して貰わねばならぬことなので、それには色々と苦労もあったが、幸いに砂原格先生が当時厚生省の政務次官であらせられたので、随分と力になって下さり大変助かった。

三十九年四月から短期大学食物栄養科を目出度く開学したのである。入学定員八十名（栄養士コース四十名、食物コース四十名）であるが、初年度なので七十四名受け入れた。

高校生急増のため第四校舎増築

高等学校の方は、前年に続きピークなので、矢張り前年と同じように四百余名を受け入れた。益々施設が不足してくるので、これは永久のものではないのにと思い乍らもたちまち困るので、又々校舎を一棟増築することにした。完成は四十年になった。

この年の高校生総数は、千四百数十名であった。短大生は一六九名である。何れにしても大世帯である。高校の教職員が七十名を越え、これだけの陣容を整えるだけでも大変であった。

短期大に国文科英文科増設

短大の方は家政系が整ったので、文科系を設置したらということになり、国文科、英文科をそれぞれ入学定員四十名として設置認可申請をすることにして、又々三十九年四月に準備を始めた。

これは施設の方は余り面倒ではないが、図書館の完備、図書の整備、教授陣の完備等々、家政系とは少し趣きを異にした準備がいる。図書購入はリストを作り、紀伊国屋に依頼したので余り骨はおれなかったが、教授陣容を揃えるのに、又々東奔西走した。しかし、これも比較的楽に整えることが出来た。考えてみるに、伝統のある文科系の学者は、家政系より比較的多いのではないかと思う。

前例の如く、これも九月三十日までに申請書を文部省に提出せねばならないので、それまでに幾度となく文部省を訪ね、係官に色々と御指導と御指示を仰ぎながら作り上げて、九月二十八日に上京し提出した。現地審査がいつものように十一月中旬なので、それまでには矢張り校舎も教室も研究室も図書も整えておかねばならぬので、それらの手配は元より、その資金繰りも大変であったが、何が何んでもやらねばならぬという意気込みでやった。

六人の審査委員の現地審査も無事に終わり、翌四十年一月二十五日に設置認可が下りた。そして四月一日、国文科、英文科を開設したのである。入学の定員は各四十名であるが、国文学科四十三名、英文学科三十九名を受け入れた。短大生総数は三四一名となった。

小規模ながらも、四学科二専攻となったので、ひとまず短大の学科増はこのあたりで暫く中止しておくことに腹を決めた。

高校家庭科を被服科と食物科に

高校の家庭科の拡大と時代の要望に応え、家庭科教育の徹底を期する為、食物科と被服科に学科組織を変更して、専門的な教育をすることにした。食物科卒業生には調理士の資格が得られるようにしたので、喜んで多くの者が応募するであろうと思ったが、初年度も二年目も定員に足りない状態であった。そうしてみると、食物・調理・栄養といった、人間が生きて行く上に最も大切な、いや一生必要な学問に、高等学校課程においては未だ余り関心がないのかなーということを感じるようになった、そうとなれば、啓蒙の必要があろうと思い、食物科の使命を理解さすべく相当強く説明して廻ったが効果が薄い。

しかし、四十年度の入学生数は前年と余り変わらぬほどであった。高校入学生は、三十八、九年度が最高で、その後は段々と子供の数は減ってくる時であった。

十一　広島文教女子大学の新設

大学令に拠る文学部新設

地方の最高学府の機関としては、矢張り短大だけでは十分でないので大学までは創りたいと思っていたが、一応大衆の望まれる短大を大体整えてからと思っていたので、前述の如く、短大は四学科二専攻までにしたから、ここらあたりから大学設置の方向へと考えていた。

そこで私は、私の専門の家政学科を設置しようと思い、その下準備の為に色々とあたってみたが、どうも教授陣を整えるのに難色があるので苦慮していたが、この方は時間をかけて整えることにして、教授陣の整えやすい文学部を先に設置し、次に家政学部を設置することにした。そして、その準備に取りかかった。

校地の物色と購入

これは、今までの短期大学の学科増設のようなわけにいかない。一つの学部を創るのだから、土地、校舎、内部設備、図書および図書館完備が大事である。

まず第一に、土地購入である。その土地の物色にあちこちを見て廻った。八木峠に四万余坪の広大な土地があるからと、佐東町の町長さんと助役さんとで誘致に来て下さった。その時、私は場所としては最適な所だと思ったが、何しろ四万余坪という広い土地を求めるほどの資金がなかったのである。造成費を加えれば四億もの金を作るだけの肝もなかった。

それは、いつもの如く石橋をたたいて渡る主義なので、借金するにしてもはっきりと近い将来払える見込みがたたねばしないといういき方の私なので、どうしようかどうしようかと思案しているうちに、可部町長から上原の土地を

世話をするから可部町に大学を創りなさいと言って来て下さった。広さも丁度壱万七千坪位で手頃であるが、場所としては八木峠の方が遙かに良い。

一方、高校や短大の所在地が可部であるので、どうしたものかと、色々と迷ったあげく、上原に決めた。そして購入に着手したのが三十九年十二月からである。農地転用の許可が終わったのが、四十年四月であった。一部の者の未登記もあった。それは、地主が米国にいる人、替え地を要求され、その替え地が気に入らない人等々、仲々容易にはいかなかったが、ぐずぐずしていたのでは間に合わなくなるので、未解決の土地の地主は石田三市氏であるが、それはそのままにして校舎を建てることにした。

校舎新築

校舎は、鉄筋四階建てと三階建ての一〇三七坪が、四十一年三月三十日竣工した。

勿論、文学部設置認可申請は、四十年九月末に提出し、同年十一月十二日と十五日の二回に亘り、大学設置審査委員と私大審議委員が現地審査に来校された時は、校舎はまだ鉄筋を打ったばかりであったが、工事工程に三月中旬完成となっていたのと、砂原格先生が同席下さって色々と説明を加えて下さったので助かったのである。図書等については、別に心配なく通過したのだが、校舎の完成が一番に心配であったが、開学には充分間に合って助かった。

この校地購入費と校舎建築費の資金づくりも、並大抵ではなかったが、運用財産の売却費並びに地方金融機関からの臨時借り入れ、神原理事からの援助などで、何とか出来た。思うに、老いた女性の私を信用して融資して下さることに、感謝せずにはおられない。

過労からカリエス再発

三十六年短大新設以来、殆んど毎年の如く学科増をし、四十年には大学の学部新設まで全く無我夢中でやってきた。文学部設置の現地審査も無事に終わったので、例の如く文部省各係官と審議

委員の方々の所へお礼のため上京した。

各課、各部門を廻って後一日という日から腰が痛みはじめて、東京での最後の日には、腰を両手で支えて歩いて予定の用件は何とか済ませて夜行に乗り、帰広するなり全然動けなくなった。丁度カリエスを患った時と同じ症状であった。

吉永病院長の診察の結果、カリエスの再発の兆候があると共に、腎臓に病気が来ているかもしれんので、総合病院で診察を受けるようにとの事であったので、早速、広島大学の附属病院に入院して精密検査を受けた結果、腎臓には来ていないが、カリエスは全治するものではないので、身体の衰弱に伴ってカリエスが出て来たのだから、まず心身を安静にして、衰弱の回復に努めることが第一だということだった。四十日ほど病院で衰弱の取り戻しとカリエスの養生に努め、年末に退院して、家庭に於て七カ月ばかりギブスベットの中での闘病生活をしたのだが、思ったより早くよくなって、四十一年七月には起き上がることが出来たのである。

周囲の者は、カリエスの再発と聞いて、もう今度は駄目だろうと思っていたらしいが、私は死ぬなどとは全然思ってもみなかった。〃まだまだ自分の仕事はこれからだ。ようやく長年の希望であった大学設置の認可をいただいたばかりなのだから、これから地方の文化向上を一段と高め、広めていかねばならぬ時なのだ。一日も早く起き上がらねば〃と、一生懸命養生に努めた。

校名の変更

短期大学までは、校名は地名をとって『可部女子短期大学』としていたのだが、大学ということになると、今度は地名を取るにしても範囲を広げて広島を入れた方が良いということになった。広島女子大学というのは県立があるので、この地域が文教の地域なので、その文教を入れて、広島文教女子大学と名づけたのである。

広島文教女子大学文学部設置認可申請の認可は、四十一年一月二十一日に下りた。いよいよこの地に、最高学府の機関設置が許されたのだ。大学教育の大使命を十二分に果たす教育を行うことに、一段と強く覚悟と決意を固めたのである。入学生は国文学科が二十一名、英文学科が二十名の四十一名であった。開学式は四月十五日である。島根大学を同年三月に御勇退された古川尚雄先生を文学部長として迎えることにした。古川先生は他からの誘いも沢山ある中を、我が校に是非にと無理を願っておいでをいただくことにしていた。先生は、開学二日前においで下さり、私方の裏座敷にお泊りいただいて、開学式を待って下さった。

広島文教女子大学開学式

私は前述の如く病床にあったのだが、やや快方に向ってもいたし、又永年の願望がかなった大学の開学式なので、途中で倒れても出ねばと思い、元気を出して式場に臨んだのである。

開学といえども私は病気の身であるので、他には御案内もせず内輪で行ったのだが、文学部の教授連は勿論、短大部の教授連も御列席下さり、尚かつ父兄もはるばる全員御出席下さって、厳粛に目出度く取り行うことが出来た。

杉本直次郎先生のお言葉

式が終わって学長室に戻っていたところへ、杉本直次郎先生がお入り下さって、涙を流して私の式辞に感激され「学園創立十八年目、大学開学の今日までの苦労は大変であっただろう、よくやりました。これからもどうか頑張って下さいよ。」と犒いと激励をして下さった。今も忘れられない嬉しい有り難いお言葉である。こうして杉本先生のことを書いていると、先生のお姿が目に浮かんで懐かしさがこみあげてくる。

先生は、開学から二年余り広島の地におられたのだが、京都にお帰りになり、その後は年二回の夏と秋に集中講義に来て下さっていた。お年は八十歳になられるのに心身共にお元気で、何時御来学下さっても、熱心に大きな声で学生によく解るように講義して下さり、休憩の時には色々と私に話をして下さっていた。私も色々と勉強になるので、楽しみに聞かせて貰っていた。先生は、教官住宅にお泊り下さっていたのだが、天候が良くても悪くても、毎朝上原

の神社にお参りになり、石段二五〇段を登り降りされることを日課とされていた。それは足を鍛える意味に於て。健康上には十二分の御注意と努力を払っておられた先生が、昨年夏の一週間の講義を終えて七月十九日に御帰京なさったのに、九月三日には亡くなられた。七月十九日がこの世での最後のお別れとなってしまったことは、何としても悲しい限りである。

人の命のはかなさをつくづく感じる。

四十一年度の各部門の状況

◎文学部発足初年度の状況

入学生は定員以下の四十一名であった。この程度の人数は、学問を究める為には丁度良い。個人研究・個人指導等も徹底が期せられて、大学教育の使命を果たす上には理想の人数であるが、ただ私学は、学生の納入金をもって経営するのが大体の建前なので、経済面に於ては苦労がある。しかし、経済経営は苦しくても、最高の学問の府であることを基本に於て、大学教育の使命を果たすことに重点を置きたいと思う。

それには、学ぶ学生自身がその十分なる覚悟と決意を持ち、大学教育と取り組んでやろうとする熱意と意欲の旺盛な学生のみを受け入れ、学問の土台となる人間性の陶冶に力を入れるというのが本学教育の理念なのだから、数には余りこだわらず、この主義で行きたいと思う。

◎短大の現状

短大に於ても然(しか)りである。短大創立五年目なので、本学短大の評価も高まり、且つ又広く認識されてきて、各地の進学校からの応募者も質量とも段々と増加してきた。島根、山口、鳥取、愛媛、九州辺りからの応募者が多い。年々進学率も上昇して来たのと、この年当たりからベビーブームの時の子供達が大学進学期に入ったのとで応募者が多く、開学以来定員厳守をしてきたのだが多少定員をオーバーしたので、四学科二専攻、総員四八一名となった。

◎付属高校の現状

この年あたりからはベビーブームの生徒が段々と減ってきて、前年より二百名近く減となって総数一二二〇名となった。昨年（昭和四十年）、教室の必要に迫られて無理をして建てたけれど（第四校舎）、将来は必要がなくなるのではないかと思う。

◎寄宿舎の現況

四十年は高校の舎生が三五九名であった。これだけの者を収容する宿舎は、三十四年に中島校地内へ建てた（三一五坪）寄宿舎である。それは八畳間二十室、十畳間二室、それが正式の寄宿舎であったが、これだけでは迚も収容しきれないので、小講堂を臨時改築して八畳間十四室、更に三十三年度に臨時的に簡単な音楽室として五間に八間の建物を造っていたのが不用となったので、これを改造して八畳間八室、更に生活実習室（短大設置の際建てたもの）六畳間三室、八畳間二室、三畳間一室、更に私の住宅八畳、六畳各一室に各々収容して、舎監は本校卒業生六名を依頼し、舎監長の役目は私なので自ら先頭に立ち、朝な夕な指示指導に当たっていた。

食事の方は、学園創立当初の主旨である現物持参（米、野菜、その他食品何でも）だが、寮生宅は大半が農家なので時価で計算していた。炊事はこれも前述のとおり、教育即生活という意味から、初めから寮生が輪番で（六～七人で）やるのである。

当番は、朝四時半起床。まず七つの平釜に、一番釜として五つはご飯（これは昼の弁当）、二番釜の五つは朝食、朝食のご飯が出来ている間に弁当を入れる。二つの釜に弁当のおかずを煮る。もう一つの釜では朝の味噌汁というように、七つの釜を二回に亘って使い、昼食と朝食を作るのである。舎監の先生には、こうした寮生活をした卒業生に勤めて貰うことにしていたので、炊事の指導も、寮生活の指導も、自分達が通ってきた道なので、何かと十分に心得、

体験してきているので、円滑に行われていた。寮生達も先輩であり先生であるので、現在の寮生達よりも、はるかに心身は労していたけれど、何にも不平も不満もいわず、先輩の舎監の先生達と楽しく且つ又意義深い毎日を送っていた。

この時点に於て、大学生の寄宿舎として学寮を創るまでには手が廻らなかった（資金の問題で）ので、三十二年の火事の時の焼けた材料を使って、三十五坪の二階建ての小さな粗末な建物を大学の寄宿舎に充当した。僅か二十余名しか収容出来ないので、学外に二ヵ所ほど元大和重工の社員寮だった建物を借り受けて、これに四十余名を収容していたのである。大学寮生は、初めは寮に寮にと言って入ってきた者が、中途で下宿をするといって寮を出る者が段々あって、年間で幾等という事で借り受けた建物なので、年度の途中で出られては家賃も払えなくなる始末であった。

寄宿舎新築

第一期工事

本学園寄宿舎は、高校も大学も粗末な臨時的建物である上に、誠に狭隘なので、この対策に迫られていた。大学名儀なら住宅金融公庫で借り入れが出来るという事で、建てることに決心して四千万円の借り入れを申し込んだところ、申込額どおりの金額を貸与して貰えることになった。

勿論、自己資金は建築費の三五％出して、四十一年九月着工して四十二年三月二十九日に、二三三二平方米の宿舎および管理棟が竣工した。これは大学寮として借り入れをし建築したのであるが、一部高校生にも使用させることにした。

寄宿舎第

二期工事

大学生と高校生とを一緒に収容することは、教育上種々の支障が次々と出てくるので、一年後には、これではどうにもならぬということで、又々住宅金融公庫に第二回の借り入れが出来るかどうかを伺ってみたら、三千万円位はまだ融資出来る（学科、学生数などを基本としての計算）ということなので、重ねて借金を背負うことは辛い思いがしたけれど、遠隔地より親元離れてきている寮生に、温い家庭的な和やかな環境と雰囲気

の中で生活させて、学問に精神の修養に専念させたいと考え、思い切って借り入れすることにした。そして自己資金の仕度をして、第二の寮を矢張り鉄筋三階建て十畳の間四十二室、和室六畳の間四室、屋上保健室八畳、六畳二室、計二七〇〇余平方米の第二寄宿舎が竣工した。この建物を大学寮専用として、前年度建築したのを高校寮に充当した。

大学図書館新築

大学の図書館には会議室を一時使用していたのだが、文部省に提出した大学設置認可申請時の計画書に四十二年度中に図書館を建築することにしていたので、経済上では色々困難であったけれど、私学振興会より借り入れをして、図書館と大講義室と学生ホールの三用途の目的で、鉄筋三階建て一三一三余平方米を建築した。

この建設で、大学教育の施設としては一応完成したので、学生達も教職員も大変喜び、図書館の利用度も高くなってきた。借金の苦労はしたが、学生生徒達が喜ぶ顔をみると、苦労は何処かへ飛んでしまうのである。

私の送り迎えする毎日は、唯々生徒、学生、学校、そして教育だけに生きている。

十二　変動の中での諸事

定木昭子さん

定木昭子さんは、神石郡油木町から本校に入学して三年間勉強して、その後本校の事務職員として、又舎監として五年間勤めてくれた。その傍ら、四十年十一月から四十一年六月まで私が病床にある間のことであるが、私の住宅に一緒に住み、私の食事その他の世話をしてくれていた。ところが、矢張り本校

の卒業生で、これ又本校の為に昭和二十九年に卒業して以来、現在も尚学校の為、私個人の為に我が身を忘れて尽してくれている大下とみえさん（三十七年に嫁いで現在は重間とみえさん）であるが、この人の生家の弟、大下忍君の嫁として定木昭子さんがどうしてもほしいということになって、四十一年四月二十九日に結婚したのである。

定木昭子さんは、卒業後五年間本校に勤めてくれたが、迚も気の優しい思いやりの深い人で、その上頭も良いので、人物に於ても申し分のないよい娘である。五年間、安月給であったにも関わらず、三十幾万円という当時としては大金の預金をしていたので、嫁入り仕度は自分で全部したのである。私は嫁入道具の調度品、即ち箪笥・長持ちといった五点を買いととのえただけで、衣類からミシンや自転車に至るまで整え、結婚式の借り衣裳代も自分で支払い、親に何一つ迷惑をかけず、嫁入りしたのである。

二十九日午前十一時に可部町の西宮神社で式を挙げたのだが、勿論私の家から花嫁衣裳をつけて、私の病床に最後の挨拶に現われた時は、私の主旨をよく守って親に何一つ心配かけず、自分の力で仕度をして出て行く姿を見て、満足感と喜びと淋しさが一度にこみ上げてきて、ものがいえなかった。又一面病床の身で、我が娘同様に育ててきた子の結婚式に臨めないことが残念でならなかった。

私の家から花嫁を出したのは二度目である。最初は、山県郡豊平町から来ていた沖野昭子さんである。この人も本校の本科、研究科の卒業生で、これも頭が良く真面目な良い子であった。成績も良かったので、東京の杉野学園に二年間勉強に行かせて、洋裁技術をしっかり身につけて学校に勤めさせた子である。当時、本校に勤めておられた中前孝先生と婚約が出来て、三十七年十二月二十七日鶴羽根神社で小西義郎先生御夫妻に御媒酌をしていただいて式を挙げたのである。

沖野昭子さんの時は、十年間の闘病生活から立ち上がって心身共に元気であったので式に参列出来たのに、定木昭

子さんの時に出られなかったことは、今尚心残りがしている。

定木昭子さんは本当に可愛い子である。現在四人の母親となっているが、年二回位は子供をみな連れて学校のおばあちゃんとこへ行くのだと泊りに来て、色々と私の世話をしてくれる。来たら二～三日泊って、何もかもしてくれるので、私がお客さんになってしまうようなことである。食事も作って貰い、床ものべて貰って休む状態で、嫁入りしている娘が親の家に来てくれたような気がするのである。泊りに来てくれるのが楽しみで、子供達が「おばあちゃん、おばあちゃん」と言ってなついてくれるのも大喜びである。今も尚、この子達が来るのが待ち遠しい心境である。そして、昭子さんへの親しみも他の者と変わった、即ち遠慮のない肉親の娘が膝元へ来てくれたような気がするのである。そして彼女らが帰った後の淋しさと空虚さは一入である。こうしたことが私生活での一番大きな喜びと楽しみと淋しさであるように思う。

この昭子さんだけでなく、多くの教え子や卒業生たちの子供もみんな可愛いく、『学校のおばあちゃん』と自ら称して、抱いて頬づりでもしてやりたくなる。

こうした心境は、学校に総てを捧げて一生を送ってきた私には、矢張り当然のことでもあろうと思う。教え子の中には、既に六十七、八歳の者もいる。その孫が本校に入学していたりする。高校に来るような孫のいる者にでも、私は無意識で三つ子にいうような事をいっている時がある。これが矢張り教員の共通点かとも思うが、私のは一段とひどいようである。しかし、私は自惚れている。それだけに、教え子に対する愛情に深いものを今も尚持っているのだと。呉の教え子、久地の教え子、本校での教え子、沢山の良い子供を持って私は幸せであることを強く感じるのである。

市川寿太郎の死

私の赤ん坊の時から親代りになって育ててくれた私より二十歳年上の長姉の長男市川寿太郎が、肺ガンで四十年秋に京都大学附属病院で手術をしたのだが、その時は既に手遅れであった

ため、翌四十一年五月十三日遂に黄泉の客となってしまった。

その甥の寿太郎は、私より三歳年下で、全く兄弟のように姉が育ててくれていたので、この子の死は、私の晩年の私生活の中で一番大きなショックであった。私が大人になるまで、いや教員になるまでの生活は、この市川家が根拠のような気がする程で、この市川家の長男の死は、弟にいや親に先立たれたような気がして、悲しみのどん底に落ちこんでしまった。

再び校務に励む

秋風の吹く九月中旬頃から十月頃になると、再発のカリエスも治癒して健康もすっかり回復し、心身共に教育に取り組むことが出来るようになった。高校と大学を往復しながら、学校経営にあたる楽しい毎日が続くのである。

高校生募集の為各中学校訪問

十月終わりから、ぽつぽつと高校も大学も新年度の生徒・学生募集の準備に取りかかる。大学の募集には私自身出かけないが、高校は例年の如く県下一円と島根県・山口県の一部の中学校を、それぞれ手分けして、各地域のチュウター（担当者）が各担当の地域を訪問して、在学生の現状の報告と新年度も引き続き後輩を送って貰うよう学校案内を持参するのである。その中学校訪問には、私も時に担当の教員と一緒に弁当持ちで出かけるのである。教員は担当地域だけだが、私は毎日の出張であるのに一寸も疲れることなく、かえって心身共に張りが出て楽しい毎日である。

或る時は、黄色に稔った稲穂の波打つ田んぼの畦道に新聞紙を敷いて弁当に舌鼓を打つのも、変わった風景であり楽しい一時である。中学校も毎年伺うので、校長先生も又先生方とも大変親しくなり、話に花を咲かせる一時もある。一日に六校位は廻っていた。これは私が九カ年の間の闘病生活から起き上った一年後の三十三年頃からのことである。

島根県の中学校訪問

島根県方面の中学校に出かける動機は、長男学千の高等師範学校時代の特別仲の良かった周藤豊さんという方が、島根県安来高校に勤めておられた時「島根県の方に来てみなさい。こちらの人は広島方面に出られるのを好まれる傾向があるので、お宅の学校の教育は人間教育をされるので、それが中学校や父兄に解れば喜んでやられると思う。兎角一度、これこれの中学校を廻ってみなさい。」というお便りをいただいた。

当初、農・山村の女子の教育を目指していた我が学園なので、それではと、三十四年の一月初めの雪の朝に出かけた。早朝の四時過ぎに家を出て、五時二分の松江行きのバスに乗ることにした。可部町三丁目の川越店の前がバス停であったが、仲々来ない。さしている傘には雪が積る、手はかじける、身体は震える。三十分以上も待って、ようやくバスが来た。それに乗り、もう大丈夫という気持ちで落ち付いた。バスの中で地図を出して見ながら、行先の中学校の位置の検討をするのである。赤名峠を越え、赤来下車。赤来、頓原、掛合と各中学校を訪問して、学校の内容を説明し、頓原では生徒さんに話をさせていただいた。

その日は、田舎ではあったが宿屋があったので、宿に泊った。そして堀炬燵のある室に案内された。その堀炬燵にはたどんを入れてあったが、それがなかなか温くならない。膝までの積雪の中を一日中歩き廻り冷えきった為か、宿に着いて気がゆるんだ為か、全身に震えがきて仲々止まないのに困ったことも、今も忘れられぬ一つである。田舎の宿なので、一カ月に三人か四人位の泊り客しかないという話であったが、仲々夕食も時間がかかり、それまでに、懐かしい五右衛門風呂に入らせて貰ったので、震えは止まってよい気持ちになった。その頃には炬燵も温くなっていた。身体全体の凍えがとけて非常に気持ちが良くなったのと、一日中の心身の疲れとでボーとしているところへ夕食が出たが、飢えたるに粗食なしの言葉の如く、油揚げと大根の煮付けと味噌汁と漬物のお膳に、舌鼓みを打ったのである。明日の予定を再検討して、堀炬燵の中にうずまって休んだ。翌日から邑智、川本、石見、瑞穂地方の中学校を

廻って、三日の旅を終えて帰校したこともある。

島根県の開拓は、この年から始まったのである。翌年からは、訪問の時期を中学校へ前以って通知して都合を聞いて行ったので、生徒へ説明する機会を作って下さった学校が多かった。それから二～三年後には、島根県からもぽつぽつ応募者があるようになって、現在ではかなりの生徒が就学している。

現在の中学校訪問は、乗用車でどこまでも出かけられるので、当時からみると時間的にも労力的にも非常に楽になると共に、能率もあげることが出来るようである。

本校の生徒募集は主に郡部へ

純朴な農村子女が戦後の悪世相に染まらぬよう、日本婦道に徹した堅実な女性の育成を目指して発足した学校であるので、開設当初の学校訪問は、主に郡部に力を入れてきた。

その頃の郡部では、本校の教育方針・教育内容の説明会をして貰って、父兄にも聞いて貰っていた。本校の全人教育、人間形成、人づくりの方針に、随分共鳴して下さり、高校進学率のまだ低い時代でもあったので、「女の子なら武田学園へ、武田学園にやるなら寮に入れることだ、寮で育てて貰えば安心だ。」又地方では「嫁に貰うのなら武田学園の卒業生を貰え。」という評判があったようだ。

その頃、そうした田舎から本学園に入学する生徒は頭も良く、人間も非常に純朴であったので、本校の教育方針の浸透も計られ、社会から所望される有為な卒業生を送り出すことが出来ていた。

戦後のベビーブームによる高校生急増

三十七年度の入学生受け入れ時期に入った頃、旧広島市中学校校長会長の山本先生外二名の校長先生が来校された。急増の現状を訴えられ、今年度百名ほど是非新しく受け入れてほしいとの要望があった。私はその時「旧市内からの生徒は余り受け入れていないのです。」という言葉が喉まで出かけたが止めて、「御要望になるべく応えられるよう努力しましょう。」と答えた。それが、旧市内からの生徒受け

入れの始まりとなったのである。その後旧市内で溢れる者を年々送られた。

それに応えるには相当の施設設備が必要なので、将来は無駄になるがと思い乍らも、受入れ体制を整えぬわけにはいかぬので、無理をしながら、校舎も建て設備も整えて溢れる生徒を受け入れてきた。生徒数は遂に一四〇〇名を越えた。その中には成績や行いの良い者ばかりではなかった。その指導に当たる教員も増員せねばならぬので、七十名に及ぶ教員を迎えた。この教員の中には、本校の教育方針の浸透に努力する者ばかりでもなかった。

生徒増と共に、本校教育の特色も薄らぎ、嫁に貰うなら武田学園の卒業生をという声も陰をひそめ、反対に武田学園へは成績の悪い子が行く等の声さえあるとかいうことを耳にした時、この転落の挽回に最善を尽くさねばならないと決心して努力して今日に及んだ。高校生急増は三〜四年続いたが、その後は段々と減少傾向を示し始めた。それと共に、本校の受け入れ方法も変え、少数精鋭とまではいかぬにしても、兎角本校の教育方針（心の教育、人間づくり）の浸透に一段と力を入れ、本校の特色の発揮に努めている。

このあたりまでが、昭和四十六年の多田病院入院中の記述である。この後を大幅に削除してあり、これからはいくらか記述に前後不同がある。

十三　学園教育と寄宿舎のつながり

本校寄宿舎（淳風寮）の経緯

本学園寄宿舎のことについては、既に発足時（二十六年四月）のこと、続いて四十年頃の最も舎生の多かった三五九名ころの状況とを述べてきたが、ここでは発足から現在までの経緯を省りみて、本校教育とのつながりの深いことを記しておきたい。

食料持参もあれば、自耕自作（校地の一隅での米・大豆・菜種・野菜作り）による自炊生活は、三十六年頃までであった。その後は現品持参、金納の者もある等いろいろであったが、調理は矢張り輪番制の自炊であった。

舎監設置は二十七年四月からである。その時の舎監は呉市広町の方で、元教員をしておられた大江みつるさんに専任として来て貰っていたが、ご家庭の都合で同年九月に退かれ、二十八年四月より森本花子先生が作法指導のかたわら舎監をこれ又九月まで、その後は本校卒業生で本校の寄宿舎生活をしてきた小原恵美子さんに専属で来て貰った。二十九年四月には、学校を可部町に移したので、寄宿舎は古市の校舎であった建物を充当した。古市の建物は、寄宿舎と、二十六年に始めた夜間部として使用した。

その頃の舎生は、五十名を少し越えていたが、二十九年の一年間は全員が古市から通った。翌三十年からは、本科生の舎生は距離的に通学に（古市から可部まで）至難なので、又可部の校舎の一隅を宿舎に兼用して住まわせることにした。従って、食事の用意をせねばならぬので、炊事場、食堂、洗面所、浴場等、小規模なものを暫定的に平屋校舎の裏へ、建築した。古市の寄宿舎には、研究科・師範科生十数名が残寮したのである。この生徒たちは、本校の本

科を出た者、又他の高校を出た者などであった。

舎監の小原恵美子さんは可部の寄宿舎の方へ、古市の舎監は豊田郡木江町出身の大下益子さんであった。この人も三十一年三月に退任されたので、その後は矢張り本校卒業生で本校の寄宿舎生活をした者を漸次増員して、生活指導にあたらせた。この指導者達は、本校の生え抜きで本校教育が十分浸透している者達ばかりであった。〃謙虚で優雅で、礼儀の正しい責任感の強い、実践力のある、勤労を愛する人間づくり〃に自分たちの体験を通して、後輩の指導にあたることに感激を持ち懸命であった。それだけに、寄宿舎教育は充実しており、武田学園にやるなら寄宿舎に入れたがいいなどいう評判があったのである。

舎監は二十八年から三十六年頃までは、本校卒業生（広島県可部女子専門学校）のみで、常に六名ずつはいた。この人たちは専門学校の研究科、師範科を卒業して本校の専門学校の本科生の指導に当る者、事務を担当する者達で、専任舎監は一名であった。他の者は兼務であったので、時間的にも労力的にも大変だったと思うが、何一つ不足や不満をいわず、母校の為に後輩達の為に、ほんとうによくやってくれていた。米作り（田植え、稲刈）から、菜種・大豆・野菜等の植え付け、手入れ、収穫等も、みなこの人たちが先頭に立ってやってくれていた。私もまだ若かったとはいえぬが、今のように高齢でなかったし、而し身体は大病を患った後なので頑強ではなかったが気が張っていたので、その人達と一緒に楽しく仕事をしていた。今、その頃の田植の田ごしらえ、エブリを使う姿、その一人一人の顔が瞼に浮かび、感謝で一杯になる。母校愛に燃え、母校に奉仕して下さった方々に改めて心から感謝し、厚く御礼を申したい。この感謝の意味を込めて、その方々の芳名を記す。（敬称略）

小原恵美子、下西スミエ、大下とみえ、西岡幸子、沖野昭子、黒田郁子、花本千草、河野好江、重光幸子、池口マツ子、福原多美江、定木昭子。

段々と時代が変わって来るにつれて、父兄の要望もあり、食料持参制度をはずし、食費は金納でも現物持参でもよいことにした。これが三十八年頃まで続いた。三十九年頃、高校生の急増と共に、前述の如く舎生も急増した為、現物持参の煩瑣を避け、金納だけの制度に切り替えたのである。

調理の輪番制度は、四十年まで続いた。この炊事の現場指導管理は、三十七年までは専任でなく、舎監の五、六人が兼務ということであたってくれていたが、三十八年からは専任を置いた。神石郡油木町出身の藤井静香さんの他に、本校卒業生を一名つけて指導管理にあたって貰った。尚四十一年度から輪番自炊制度を廃した。

三十九年四月より発足した短大の食物栄養学科の第一回生が出たので、この卒業生の栄養士六名を採用し、食物栄養学科の教授の出崎一枝氏の指導の元に、大学寮、高校寮の給食を始めたのである。前述のとおり、四十二年に上原へ大規模な寄宿舎を新築したが、給食の施設設備も完備しているので、上原寮の方で給食はやることにして、中島寮へは朝夕の食事を柳沢・大越両氏に運んで貰っていたのだがどうも便利が悪いので、二年後の四十四年からは、又々中島寮は中島で給食をすることにした。給食員は、中島寮へも本校の栄養科を年々卒業する栄養士を採用するので、職員採用に困るようなことはなく、上原に五名、中島に三名を配置していた。調理献立等専門教育を受けている者ばかりなので、充実した給食が出来る。又本学の卒業生なので、自分達の後輩に対して、愛情を込めて作ってやってくれることに、舎監も寮生も満足していた。

舎監の兼務制度廃止　本校卒業生を舎監に長年任用していた理由は前述のとおりであって、高等学校の教職員組合からの強い要望があって、専任の男子舎監長を置くことにした。そこで、四十六年一月から、福山市瀬戸田町出身の、元中学校で教鞭をとっておられた井上輝夫先生に、専任舎監長として就任して貰った。

舎生の急増期頃から、美しい伝統をもつ舎生の生活がくずれかけていたが、四十五年の一年で中島寮生の生活態度

が急激に低下したので、舎監の充実を計ってその挽回に懸命の努力をした。

女子師範卒業者で、教育経験も豊富で、又人間的にも誠に誠実な方でいらっしゃる中原貞代先生に、四十六年四月一日付けで着任して貰った。上原高校寮舎監の数本タミエ先生は、高校の食物科担当に配置替えをして、三十八年からおられた藤井静香先生は四十六年三月末を持って、結婚の為退任された。大学の舎監だった三隅先生に上原高校寮を担当して貰うことにして充実を期した。

舎監長の井上輝夫先生は、平素からあまり丈夫でなかったのであるが、九月になって胸部疾患と判明したので、職をつづけていただけなくなった。その後、舎監長の物色に大わらわ、一ヵ月間の空白はあったが、呉市長郷小学校長を最後に教育界を四十六年三月末勇退された番本正三先生を訪ね、本学園高校寮の実状を話して、御協力の懇願をしたのである。

番本先生御夫妻　番本先生御夫妻は、元々から懇意にしていただいていたお方である。それは、フサエ夫人は私の教え子で、私の教育信条はよく知っている人なので、本学園の現状を話したらよく解って下さり、色々と家庭の事情もおありであったようだが、それを乗り越えて、「それでは暫く二人で手伝ってやろう。」と快諾していただき、四十六年十一月初め着任して下さった。番本先生は、舎監長と共に高校図書館長の二役を背負っていただき、フサエ夫人は中島旧寮、中原貞代先生は中島新寮、三隅先生は上原寮という四人で、舎監長を中心に和協一致、努力をして下さった。

地に落ちるのは早いが、挽回は容易ではない。番本舎監長は本学園教育方針に則り、学校と寄宿舎は一体のものとして教育することに骨子を置き、寄宿舎教育も学校長の指導方針に基づくべきで、その指示を受けながら実行すべきだということを主張された。「寄宿舎の教育については、校長以外からかれこれと舎監や舎生に云々いわれることの

ないように、寄宿舎のことは、この舎監長が一切責任を負ってやるから、校長を通して舎監長にいってほしい。」という行き方にされたのである。もともとこの行き方であったのであるが、番本先生が舎監長になられてからは舎監たちは、又舎監長に対する信頼感を一層強め、明日への希望を持ち、舎監指導に喜びと安心をもってあたって下さった。舎生も、舎監長がそれだけの意気込みを示され、責任を持って下さり、充実した舎生生活が出来るように懸命の努力を払って下さっていることを知り、大きな喜びと感謝で、充実した生活を自らがするようになった。

自由と権利をはき違えた行動も、段々矯正された。舎監長や舎監の苦労や努力によって、少しずつではあるが、素直な気持をもって舎監のいわれることを聞く方向に向いてきはじめたのが、四十七年の中頃からである。ここまでに持って行くためには、舎監長の苦労は並大抵ではなかったと思う。

兎角、舎監長が本寄宿舎に赴任して下さる時に「武田ミキの教育方針による教育は決して間違ってはいないのに、それがゆがめられて元の姿を失っている。」と、私と同じように嘆かれ憂慮され、自分の力の及ぶ限り元の姿に戻すべく努力しようと決意して来て下さった。番本先生は死にものぐるいになって、命をかけてやろうとされていることが、私にもよく見えていた。或る時は父兄と、或る時は学校の担任教員と、厳しく議論を戦わせながら、懸命に努力して下さった。

四十七年三月末で、三隅舎監が退任。後任の物色に舎監長は東奔西走、自費でかけずり廻られ、候補者として依頼しようと思う人を自宅に招いて接待する等して依頼して下さった。しかし、家をあけて泊り込みで出てきて下さる人は仲々おらない。手を尽くし、承諾して貰う直前になっては、断わられるといった状態で、一人の人を得るのにも随分の苦労をかけた次第だが、三隅先生の後任には、こうした番本舎監長のお骨折りで、呉市から小学校教員を長年勤めておられた金本先生に就任していただくことが出来たのである。この方も舎監長から本寄宿舎の事情はよくよく聞

いて、覚悟決心をして来て下さったので、舎監長の意志をよく体して協力し努力して下さったのであるが、弟様が重患の身となられ、やむなく二ヵ月に至る長期欠勤の末、回復の見込みがつかめないので、四十八年三月末で退任された。その後任として、寄宿舎の給食の方に勤めて貰っていた寺崎国枝先生を、舎監に無理矢理お願いした。

暫くの間ということで承諾をして貰っていた番本フサエ先生が、家をあけて御夫婦ともこちらに来ていることは家の方に支障が大きいので、御主人の舎監長が二倍役努力して「武田が迚も心配している本校の教育のすべてというわけにはいかぬが、せめて寄宿舎だけでも何とか元に復するようにするから。」ということで、夫人フサエ氏は翌四十七年三月末に呉市に帰られた。その後任として、取りあえず、大学寮の寮監に兼務で九月まで舎監を務めて貰ったのであるが、その間、舎監長は後任物色の為に東奔西走して下さったおかげで、呉市広町から、これも長年教員をしておられた植尾夫妻に、四十七年九月に来て貰うことが出来た。

植尾良雄先生が、中島旧寮の舎監をして下さるので、夫人には、四十八年の三月まで事務の方を手伝って貰った。一方、中島新寮の中原貞代先生が、四十八年一月から病気をされ、入院されねばならなくなったので、植尾夫人にその後を引き継いで舎監の任についていただくことにした。夫人は旧寮を、ご主人の良雄先生は中島新寮を担当して貰うことにして、四十八年四月には、各部所の舎監もきちんと揃った。又、生徒もすっかり落ち付いた寮生活をするようになった。四十四、五年頃から高校教職員たちが組合運動を起し騒ぎ立てたので、生徒にもその影響が大きく、寄宿舎生活にまで影響したのである。

番本正三舎監長の努力によって心機一転、土台から建て直しが出来て、今年こそは成果が挙げられる明るい見通しをつけて、舎監長を始め、舎監全員が大きな希望と期待をかけて出発したのである。

舎監長番本正三先生病気、逝去

仲々世の中は思うようにはならぬ。今度は、寄宿舎の抜本的改善の中心である舎監長が、遂に倒れられた。四月は元気に希望の毎日であったのに、五月に入って身体の調子が良くないといわれ、病院に行かれたら、想像もしなかった大変な診断が下された。即ち胃ガン、その上にもう手遅れ、手術をしても駄目、全く驚きと失望、悲しみ、更にはおいたわしさ、いやそれだけではない、何だかこの舎監長の病気は、私がつくったような気がしてならない。誠に苦労に苦労をかけたことが、一つ一つ頭に浮かび胸を刺すのである。この私の心境は、ご本人の番本先生には勿論口にも出されぬ、顔にも出してはいかぬ。ご本人は「胃潰瘍だ。一と月も入院して養生すれば治癒するのだ。」と思っていらっしゃるのだ。

五月二十五日、国立呉病院に入院された。早速見舞に上がれば、ニコニコと笑顔で受け答えをなされる。それもその筈、四～五日前までは学校に出て下さっていたのだから。そしてご自分には、回復の見込みのない病気とは、全然思っていらっしゃらないのだから、私に向いて「先生、一と月もすればすっかり快くなりますけんのー。元気になって帰りますけんのー。今度は学校に泊りますけんのー。」そうして、ああしますけんのー、こうしますけんのーと、本学園の寄宿舎の将来の展望を、次から次と元気よく、一週間に一度ずつ伺うたびにおっしゃって下さった。医師の診断では、十一月頃まではもてるということだったが、そして又ひどくお弱りのようでもなかったのに、七月十一日にとうとう永遠の眠りにつかれたのである。

その時私は、その報に接して、重い責任を感じたのである。あまりに苦労が大きかったのではあるまいか。寄宿舎はお蔭でよい方向に向かい、寮生は一歩一歩と本学園建学の精神に添った人間になって行く見通しもついたが、舎監長の命をとったことになったのではないかしらん。地だんだ踏んでくるい回る程、苦しんだのであるが、もう取り返すことは出来ない。つらいつらい想いを胸に秘め、病院に取るものもとらず馳せつけた。あれ程、行く度に元気に受

け答えをして下さっていた先生が、呼べども御返事のいただけない身となっていらっしゃる、一時は目がくらみ、卒倒する寸前となった。フサエ夫人の言葉に「先生、一寸も苦しまず大往生しました。それだけは喜んで下さい。」その時私は、この世で善を尽くされた人だから大往生なされたのだ。この世で悪に動く人は絶対に死の直前も苦しみ、又未来でも苦しむ、と思ったことである。

兎角、番本先生の死は、私個人にとっても、又学校にとっても、大きな痛手である。いや痛手とは別に、大きな責任を感じている。番本先生の御逝去は悔いても悔いても限りない心境であるが、今更如何ともしがたい。この上は先生の御生前本学園教育に命をかけてお尽くし下さった大恩を謝し奉り、御冥福をお祈り申し上げます。

後任として、高田郡内で永年小学校校長をして勇退された、向原町御出身の望月省三先生にお出でを願い、舎監長と図書館長の両方をやっていただいているのだが、これ又番本先生に相次いで、教育経験といい、お人柄といい、非の打ちどころのない誠に立派な方である。番本先生の意志を継いで、一生懸命やって下さる。それに植尾夫妻もこれ又出来た人で、実に熱心に我が身を忘れて、それこそ一生懸命に御指導下さる。

「女の子なら武田学園に、そして寄宿舎に。」と言って貰った頃の寮生の姿にまではゆかぬが、四十四～七年頃よりはるかによくなって来た。当時は、ややもすると自己の利害に関する権利のみを主張し、無理でも大勢の力で押して行く、そして勝ち取るといった考え方での指導があったことと、当時の社会世相も、女専時代とはずい分変わってきていたからでもあった。今では私の描いている人間像・女性像とまではゆかぬが、より向上した姿が見られ、ほんとうに嬉しく、有り難く思っている。

故番本先生のご苦労に対しては勿論であるが、四十六年頃までの寮生が現在までに、美しい伝統の回復に近づいた寮生になったことは、偏(ひとえ)に舎監の先生方のご苦労の賜と深く感謝の誠を捧げている次第である。どうか、現在の寄宿

舎の先生方が、いつまでも、いつまでもこの本学園寄宿舎にいて下さることを祈念して止まない。

〔昭和五十一年二月十一日大槻病院の病室に於て〕

十四　時代の変遷に伴って

短大食物栄養科の科名改訂

四十二年九月末、広島文教女子大学短期大学部食物栄養科栄養専攻を、食物栄養専攻と改め、入学定員四十名を五十名に増員した。この届けを文部省に提出していたのが、四十二年十二月二十八日付を以って許可された。

変更理由は、栄養科の上に食物がつくことに法規が改められたことと、定員増は余りにも食物栄養専攻希望者が多いために、希望者の五分の一にしか希望に応えられぬこと、栄養士の求人が多いということであった。

校地を広島県へ提供

大学と寄宿舎との間に阿波川がある。その川の改修の為、四十二年十二月広島県へ校地を三四二〇平方米譲渡しなければならなくなった。しかし、元からあった阿波川の地は本校校地へ併合することになった。

根の谷川改修

根の谷川の幅員が狭いので、六十米を百米にするため、建設省が川筋に添った土地の買収に取りかかった。幾度となくその地主達に集合を求められて、その都度長男に出席させていたが、その改修の為に、本学の校地を四、三六九平方米提供せねばならぬことになった。本校校地の上隣の土地までは一坪当たり壱万円、

上原橋より更に上側が壱万弐千円というのに、本校校地の地価は、別に他の土地と差があるわけでもないのに、七千余円という。他より安く評価されても、教育者なので、それなら提供せぬ等ということも出来ず、いや、むしろ教育者の私達から安く提供して、一時も早く水害の恐れのないように川幅を広げ、しっかりした護岸を造って安心させて下さいといわねばならぬ立場にいるのだから、こんな安値をつけられても黙認して譲渡したのである。

それから二カ月後の四月、この根の谷川の改修工事区域が発表されたところによると、上原橋より下流側の改修工事は四十五年以降になるということを聞き、学生の通学路は、上原橋を渡って根の谷川の堤防を下るのであるのに、その堤防が通れぬことはまず困ること、四十五年以降といっても、その以降が何時になるかわからぬので、このままにしてはおけぬと思い、砂原格先生のところへ、今回の工事区域を武田学園のところまで延ばしていただきたいと陳情に参上した。偶然にも、可部町の山田町長を筆頭に町会議員連が七～八名、根の谷川改修に当たり、上原橋の位置を現在のところより百米川下にしてほしい（その位置が上原地区に通ずる道路であるから）という事で陳情に行っておられ、砂原格先生の議員会館事務所で私とばったり出合ったのである。同じ根の谷川改修のことで、同じ町内の者が同日に同じ国会議員の先生のところへ行くなんてと驚いた。

そこで砂原先生のお言葉に、山田町長に向って「君達は武田学園のことを一寸も考えていない。上原橋を百米下につけてくれというのは、その橋を渡ると上原地区に通ずる道路につなぐからであろう。町長を始め町会議員がそれほど多人数で来るのに、武田学園の校長さんはただ一人で、河川改修を武田学園のところまで今回して貰うようにと陳情に来なさらねばならぬということは、可部町の代表者の貴方が、全然武田学園のことを考えてあげないからである。町の代表者の君達はそれで良いのか。武田学園が可部町に所在していることは、可部町にとって大きなプラスになっていることが解っているのかどうか。」と厳しくおっしゃっていた。町長さんも、議員の方々も、二の句は出な

い様子であった。そしてその可部町の陳情団には「よし、君達の願いも聞いてもらうよう努力しよう。そのかわり、今後は武田学園のことを町民がみんなで考えてあげてくれ。」と言われた。

議員団が帰られた後、砂原先生は私を連れて河川局へ行って下さった。古川河川局長に面会を求められ、局長に「これは武田学園の理事長、校長の武田さんであるが、武田さんは宮澤喜一議員の親戚なので宮沢先生からもお願いがあると思うが、僕も自分の地区の方なので色々とお世話しているので、武田さんと一緒にお願いに来たのです。」という言葉から、根の谷川の改修図面を開いて色々と説明しながら、「この橋までで今回の工事は打ち切るようになっているそうだけれど、学園のところまで延ばしてやっていただきたい。そうしないと多くの学生が困る面が多大である。」と縷々と事情を述べて嘆願して下さった。古川局長は係の者を呼ばれて、どのようになっているのかとお聞きになり乍ら、ここまで延ばすわけにはいかぬのかとお尋ねになったら、係の方は予算が組んでないから無理でしょうといわれる。すると、古川局長は図面を指しながら「ここらあたりから何とかなるのではないか。他とは違って学校の事だ、教育の場だから何とか今回の分に入れて上げるよう努力してみるように。」と係の方へおっしゃって下さった。そして局長のその時の御返事に「こちらでも十分に考え努力するから、広島の太田川河川課にも行って、その旨を申しておくように。」とのことであった。

帰校後、早速、太田川河川課に嘆願したが、「そんなわけにはいかぬ、予算の都合があるので。」ということで、仲々聞いて貰えそうにもないので、その時は一応引き下った。そのうち、本省の河川局から何分の沙汰があるであろうと思ったからである。

その後、砂原先生からも、広島の河川課の方へも話していただいたりして、二、三度私も行って説明やお願いをしたが、本省からの指示があったのであろう、請願をかなえて貰うことが出来た。砂原先生には何から何まで親身も及

ばぬお世話になって、学校もここまで来れたことを感謝している。砂原先生がこの河川改修のことでも依頼して下さらねば、四十五年以降というのが、今日に至ってもなされていなかったと思う。

短大校舎を上原校地に新築

短大の被服科は、三十七年に中島校地で発足し、三十九年の食物栄養科増設の際は、文部省、厚生省の厳しい設置基準に合わせて、校舎の施設も設備も随分完備したものを、中島校地内に造って許可を受けた。四十年の国文科、英文科の増設も、中島校舎で発足したのだが、前述の如く、四十一年から四年制の文学部の新設の際、中島校地面積の都合もあって、上原地区に広い土地を求めて施設設備をして、この地で発足したのである。

かねてより考えていた（県の児童福祉課から、又一般からの要請もあるので）幼児教育学科を増設しようと思って文部省に行ったところ、文学部の完成年度に至らねば次の学科増設は出来ぬということで、続けての計画は暫く思い留まった。

四十五年が完成年度なので、その事前の四十四年から幼児教育学科増設の準備にかかることにした。大学文学部新設から三年、大学と短大が別々の場所にあることに非常に不便を感ずると共に、教育上にも色々な支障がある。例えば、図書館にしても二カ所に分かれる等といったことから、短大を大学校地内の上原に移したらということになった。食物栄養学科の施設設備には随分力も入れ、金もかけて、五年間しか使っていないので誠に勿体なく不経済なことだと思ったが、幼児教育学科だけを上原につくるというのも、短大が二カ所に分かれることは、これ又大学が分かれているよりもっと不便不都合を来すと考えた。四十三年に、幼児教育学科増設に伴って、思いきって短大全科を上原に移すことに決心した。一年間で準備をして、いよいよ校舎建築にかかったのが、四十四年度の初めであった。被服学科、食物栄養学科（食物栄養専攻、食物専攻）、国文学科、英文学科、それに新設の幼児教育学科の、五学科二

専攻の校舎なので、かなり大きな規模のものが必要である。費用も随分かかる。その資金作りから建築業者の事などを検討した。

今までは、鉄筋校舎は全部砂原組に委ねていたのだが、丁度その頃、㈱砂原組の方では事情があってか、職員の更迭が大幅に行われ、社長さんは元より、それぞれの幹部級はいなくなられ、藤田組からの人が多くなっていた。しかし、砂原組は続いていた。砂原格先生も御健在であったので、一応建築の相談には行ったが、今までのようにすらすらと事が進まない。色々と難行の結果、内部工事は別として、校舎だけを砂原組に請負って貰うことにした。

内部工事（給排水、電気工事、暖房、家具）は、元砂原組の建築部長だった川野浩さんがお世話して下さった。給排水、暖房、厨房等の工事は、菱電商事の青木さんに、電気はエビス電工に、家具は熊田工業にと、それぞれ別な所がやることになった。それで川野さんが「監督をつけた方が良い、その監督は良い人がいるから世話をしてやる。」ということで、中家さんという方を依頼して下さった。

一年近くかかって、漸く完成したが、今までのように、すべてを一つの建築会社に委ねてやって貰うよりか骨が折れて、良い事にならなかったことを痛感した。監督さんも、週二回は現場に来るということであったが、段々と足が遠くなり、終り頃には姿を見せなくなり、内部工事も幾人かでやるので、思い思いめいめいなことになりがちになって、今までにない苦労をした。随分と金もかけ、骨も折ったが、満足な物は出来上がらなかった。しかし、それは今まで工事をして来たのと比較するからかもしれない。みんなからは、大きな立派な校舎が出来たと賞められ喜ばれたので、私もほっとした。

こうして、四十五年度の初めから、この新校舎に移って授業を始めた。

普通科の一本化

四十七年度の中頃から、すでに懸案であった高校の普通科一本化の問題が具体化してきた。本学園高等学校の母体は、広島県可部女子専門学校、即ち各種学校、これに準拠して、女性の天賦の特性の伸長と共に、日本婦道の麗しい徳性の涵養という目的を踏まえ、家政科から出発したのである。ところが、時代の変遷に伴い、高等学校は既に義務教育化してきていた。そのため、大学・短期大学への進学希望者の数は、年々上昇し、現在では高校の卒業生の五十％以上に達してきた。従って高校が仕上げ教育の場ではなくなった。まさに、大学進学のつなぎの場となったと言え、ここに於て我が校の取るべき手段、進むべき道を考えたのである。高校以上には、我が学園にも短大あり大学ありといった現状なので、一貫した大学教育まで受ける教育と、高校から直ちに実社会に於て働く者達の為の教育をすることが必要と考えて、家政系、商業系は二年生から選択コースとして、普通科一本にしようという話がしきりに持ち上がり、色々と考慮した結果、愈々四十八年度からその実施に移したのである。従って四十八年度からは、家庭科・商業科は募集停止した。

従来、本校の家庭科は、女性の特性の伸長教育が徹底しているという一般からの好評があったので、生徒の絶対数が少なくなってからも、商業科・家政科・普通科の三科の中では、毎年の入学者数の率は、家政科が一番高い状態にあったが、年々と減少の一途を辿る状態となった。そうしてみると、いかに時代が変わってきたかと思わせられるのであった。十年前までは、女の子には、家庭的な面を修得させておかねばといって家政科を選ぶ親子が多かったが、科学が進歩し、すべてが機械化され、物づくりがオートメーション化され、大量生産され、金さえあれば何でも手に入るという衣食共に不自由がなくなって、人間の手によって作らなくてよい、一つ一つ作る事の方が時間がかかり、金が多くかかるといったような世の中になってきたので、女の子だからといって、そんな必要がなくなった面もあってか、本校だけでなく、一般に家庭科系を選ぶ者が少なくなった。それは、前述のごとき原因ばかりでなく、大学進

学者の率が非常に高くなってきた面もあってか、高校への進学者が普通科を選ぶ者が多くなったのである。

しかしこの原因の中で、第一にあげられている項は、私はあまり感心しないのである。一家を司る女性が、衣食住、育児、看護、養老といった面の知識がなくても、それは今の世では、結構人の妻にも人の親にも成ることができ、又なっておられる方が大半であるので、一概には言わぬが、しかしその心得のあるのとないのとでは違うと思う。というのは、家庭的な潤い、愛情、和かさ等々、家庭にはなくてはならぬものが、無意識の中に欠けてくるのではないかと思うのである。食事にしても、子供のおやつにしても、愛情こめて作ったものとインスタントの食事とでは違うし、又身体にまとう衣類にしても、そのとおりである。妻が夫のものを、母が子供のものを、すべて妻や母の手によって作らねばと言うているのではない。肌着一つにしても、湯上がり一枚にしても、愛情こめて作って、夫に子供に着用させるその心の美しさ尊さを思うのである。そして又、衣服についての知識があるなら、既製品を求める際にも大いに役立つと思うし、食べ物にしてもその通りである。だから、家政科に進んでこれを専攻しなくとも、女性たる者の心得として、家政に関する諸事を全て無視しないでほしいと思うのである。現在は男女平等で、男も女も一緒に家政のことをやればよいのだとされているが、平等というのは、男女が同じことをするのが平等というのではないと私は思っている。男子に男子の特性があり、女子には女子の特性がある。その特性を生かして、各々がその立場に立って働けば、それが平等であると思う。特性という意味からいえば、家政科という科を存続して女性の性能伸長教育に力を入れることもよいことだと思うが、現実に於ては、家政科進学希望者は全く減少してきているのである。重ねて考えてみるに、それは性能伸長教育を考える者が少なくなったこと、大学・短大に進学希望者が多くなったことなどが原因しているのではないかと思う。いずれにしても、家政科を希望する者が極少になれば、存置するわけにはいかなくなってきたのである。

本校は、尚今一つ実業教育を目指し、昭和三十四年に商業科を併置し、十四年間、社会の一線で活躍する人材を育成してきたが、これ又家政科の減少と同じような様相が表われてきた。思うに、実社会の要望が、在学中に実業学科を受けていなくても、就職に際し、現場に於てそれぞれ仕事を習得させ、即ち適材適所主義で行く、その意味から普通科卒の方が好都合だという考えが、一般的になったこと、また家政科と同様、大学進学希望者が上昇してきたからでもあると思う。右のような事情のもとに、色々と考慮した結果、四十八年を以って、右二学科は廃止し、普通科一本に踏み切ったのである。

十五　幼児教育に着手

幼児教育学科新設

一方では、幼児教育学科新設の申請に大童である。文部省へも例の如く、度々足を運び指導を受け、申請の準備に明け暮れの毎日であったが、現地審査も二度に亘り受け、又、本省の方からの諮問にもお呼び出しがあったので行ったが、あまり採りあげて質問なさるところもなく、すらすらといった。

他にも申請に来ていた人達も多かったが、随分厳しい言葉が出ていた。その人たちが後から「貴方の方は、えらい早いことすらすら行きましたねー。」と言われた。思うに、私方は、それまでに本省に幾度となく行って、係官の指導をきめ細かく受け、御指示のとおりに施設設備も教授陣容もきちんとしていたからだと思う。

文部省の方では、現地審査が終わり、二つの審査委員で書類審査が行われ、いよいよ許可するかしないかを、審査委員会が、一月に入ってから行われて決定するようだ。本学園へ許可通知があったのが、四十五年一月二十二日であった。

かねてより、募集案内には、幼児教育学科新設申請中と記載してあったけれど、いよいよ許可になったことを、各高校にお知らせした。定員五十名だが、初年度であるのに随分沢山の応募者があったが、定員オーバーは、幼教に限らず本学ではどの学科もしない主義で行っているので、これも定員でとどまるように工夫して受け入れた。

四十五年度からは、大学・短大を一ヵ所の場に於て授業をすることになり、何かと好都合となった。今まで短大と高校が校舎の棟こそ違え、同じ校地内であったことは、教育上、色々と支障もあり苦労も多かったが、これからは短大も高校も、それぞれの教育目標が浸透出来ることとなった。高校は、短大が移転したので校舎にも随分ゆとりが出来た。ゆったりした中で、一段と完備した施設設備で教育が行われることは、生徒も教師も幸せである。

附属幼稚園新設

幼児教育学科新設時に、附属幼稚園を一年後には創って、二年になった幼教の学生の実習の場とせねばならぬ。これは幼教新設時に文部省の方へもそのことは約束してあるので、四十五年度の一年間で、施設設備、幼稚園新設申請、と忙しい年であった。

幼稚園新設設置申請は県にするので、今までのように、大学、短大の設置申請よりかはるかに楽である。ただ、施設や設備の為の資金作りに苦労があった。

本学園の幼稚園の園舎は、一風変わった建物にした。一クラス一棟ずつに、各々手洗い場所から、便所、砂場等がついている。平屋の鉄筋園舎に、五棟を一棟ずつに作らして、良く見えるように、又五色の色わけした壁をつけ、園児達が一目見て自分の部屋であることを知ることが出来る、というふうに創った。又管理棟には、温水プール、保健室、図書室、給食場等、当時としては実に理想的な施設を創ったのである。園児の定員も一四〇名、五クラスということにした。教員も、二十年以上も教育経験のあるベテランの土屋孝子氏、それに従属する教官の島田信子氏、初年度は、この二人の教員で二十七名の園児と園長武田ミキ兼任で、昭和四十六年四月から出発したのである。

その二十六名の園児は、五歳児（一人、桑原健太郎君）、四歳児（桑原優子外十八名）、三歳児（桑原慶子外八名）と、八木町の桑原医院の御令息御息女が、一時に兄弟三人で入園された。父君の桑原先生は、幼教の健康・小児保健の学科を担当していただき、又、園医をお願いし、同じくお医者様でいらっしゃる明子夫人にはＰＴＡの会長をお願いし、お二方ともお忙しい中をまげてお引き受けを願い、本学教育に御協力下さっていることを深く感謝している。

発足二年目には、佐東町から「桑原の坊ちゃん、嬢ちゃんの行っていらっしゃる幼稚園へ。」ということで、大人気。この年から入園試験を行わねば受け入れきれなくなり、小さな幼児をテストするのは誠に残酷なことと思い乍らも、定員制限のあることで仕方がない。受付順で打ち切る事も考えてみたが、同じ日時に何人も列をなしての入園願書受付を中途で切ることも出来がたく、結局試験を行うのが最上ということになった。

広島文教女子大学附属幼稚園の第一回卒園児は、桑原健太郎君ただ一人。本幼稚園の歴史の第一頁を飾って下さった。その坊やが早や今は、広島学院中学校三年生。

次の年から、園長には海渡和雄先生に御就任いただいて、私は勇退した。

海渡和雄先生

海渡和雄先生は、本校創立時の協力者であることは、既に述べたとおりである。先生は敗戦後の学制改革当時より、三ヵ村組合立高宮中学校の校長として、（いや中学校教育のみでなく地域社会の発展に、日浅い新制中学校の充実発展に）随分活躍御貢献なされたことは、世人のよく承知している通りである。先生は、昭和三十年で高宮中学校をお引きになって上京され、親戚の方の経営しておられる会社の協力者として要請され、〃いそじのわらじのおをしめいまわれは二度のつとめにみやこへぞたつ〃の一句を残して、長年お住いの可部の地を去られ、七年間会社経営に協力され、再び可部の地にお戻りになった。先生のご生家は和歌山県、奥様は北海道の方でいらっしゃるのに、可部町に如何に愛着と親しみを持たれていたかを、御想像申し上げることが出来る。勿論

御令息、御息女お二方が、この安佐郡に定住なさっていることも、お戻りになる一つの要素であったかも知れぬが、兎角お戻りになって間もなく、可部町の教育長の任にお就きになった。可部町も、海渡先生の御人格、御手腕を良くご存じであったからだと思う。教育長として全く適任の方だと私共も思っていた。可部町が広島市に合併時の四十七年三月末まで、この任にあたっておられた。

その時から、教育長を辞められたら是非本校にお迎えして、御指導御協力をお願いしたいと考えていた。まだ可部町の合同庁舎の一室の教育長のお席にいらっしゃった時（四十七年三月）に、お願いに上がった。その頃、先生は矢張りその頃方々からお迎えがあったのではないかと思う。その時の御返事に「協力してあげたいと思うが、もう少し良く考えてから返事しよう。」とおっしゃられた。その後、もう一度行ったら、「元々あんたのところは、初めから手塩にかけて来た学校でもあるし、手伝うことにしよう。」と良き返事を下さった。

職名は附属幼稚園園長、並びに学校法人武田学園理事ということであった。私の思いは、幼稚園の方には前述の如くベテランの教員がいるので、幼稚園長の方の仕事より理事の方の仕事を主にお願いして、学園運営に御協力願うことに主体を置いていたが、こころよく御承諾下さった。

昭和四十七年四月一日付で御就任して貰った。出勤は隔日ということにした。永年のお務めであったので、あまり御無理のないようにという意図からである。先生が御赴任間のない四月中旬、本学園中島校地を本学園が譲渡の承諾をしていないのに、可部町が安佐中央総合病院の敷地として、県に合併申請書を提出し、県はそれを承認していたことの問題がおきて以来、この問題解決に先生が主幹者となって、東奔西走して下さった。

先生は、聡明で識見も豊富、実践力のある、俗にいう手腕家、敏腕家であった。当時、私は何もかも〝海渡先生、海渡先生〟で、全く大船に乗ったようなつもりで先生にお縋りしていた。

先生が五十年一月から、風邪気味ということで、今まで学校をお休みになることは全々なかったのが、冬休みが済んでもご出勤にならないので、先生のことだから、少々のことならお休みになる事はないのにと思い心配しながら、お見舞にあがったら、「風邪で声が出なくなった。これでは学校に出ても、ものがいえなくては仕事にならぬので、風邪が治れば声も出るようになるから、二～三日休んだら治ると思うので、少しの間、休ませてもらうからのー」と声をかすらせ乍らおっしゃった。ほんとうに風邪かと思って、ご平癒をお待ちしていたら、五～六日経って、奥様から、伊藤医師（海渡先生宅のすぐ近くの医師）の診断では、肺ガンで、もう左の胸は真っ黒くなっていて、手遅れだということをお聞きして、驚きと嘆きで胸が一杯になった。私にとっても、今一番大切な時期で学園の岐路にある時、頼りにしている先生が、不治の病いに伏せられたことは、何としても悲しい、全く火が消えたのも同然。医者の誤診であることを祈った。

かねて、総合病院で入院加療の御予定で入院を申し込んでおられたところ、ベットが空いたからということで、二月二十二日に御入院になるということで、お宅に馳せ参じたら、にっこりと笑顔で「行ってくるけんのー、もどったら、例の問題と取り組んでやるけーのー。」と有り難い勿体ないお言葉をいただいた。御令息の自動車に担架で運ばれ、車にお乗りになる時、どうか無言の御帰宅にならぬようにと祈りつつお見送りをした。入院後、度々お見舞に上がり、お慰めとお励ましの言葉をかけていた。手を合わして御返礼の意をお示し下さるお姿、いたわしく、悲しく、涙にくれるのであった。参ります度に衰弱の徴候が見えるので、これでは御全快の見込みはおぼつかないのではないかと思うと、又悲しく声をあげて泣きたくなるのをおさえて病室から去るのである。ご看病なさる奥様も覚悟は出来ておいでのようであった。けれど、辛い毎日の看護だったと思う。生きる見込みのない人の看病、どんなにおつらい事であろうかと思えば、又奥様もおいたわしくお慰めの言葉もない。

三月十三日午後八時五分、ご逝去の報に接し馳せつけたが、無言の対面。御生前に海山の御恩をいただいたお礼を申し上げないままお別れして終った悲しさは、筆舌では現わせない。病院でのベットに仰臥なさっていらっしゃったお姿、学校での会議の時に洋服の前を合され乍ら御高見をお述べ下さっていたお姿、今も私の心にきざみつけられている。又御恩の数々、一生お忘れ申しませぬと、朝な夕な、仏様の先生のお写真に申し上げて拝んでおります。これがせめてもの御恩返しの一端と考えております。

亡き竹吉先生を偲ぶ

亡くなられた先生と言えば、竹吉先生も忘れられぬお一人である。竹吉正規先生は、本学が昭和三十九年に、食物栄養学科を新設するにあたり、食物栄養科の主任教授として、お出でを願ったのである。以来、先生は、五十二年三月までの十三年の長きに亘り、本学教育の充実発展に、学校運営に、随分ご苦労して下さった御恩の深い先生である。生まれたばかりの食物栄養学科の科長として、よく科をまとめられ、実力のある立派な栄養士を養成し、実社会に送られた。現場から好評を受け、年々良き職場から求人を受け、毎年百%の就職率を見ていることも、その根底に竹吉先生のお力の絶大なるものを痛感している。又、先生は、本学広報の第一人者であった。

先生のご出身の島根県下から、優秀な学生が多数本学に学ぶようになったのも、先生の並々ならぬ御苦労の賜であると感謝している。その一例を挙げれば、先生は毎年十月から十二月の間にお伴を連れて、島根県下一円の高校を二、三回廻り、本学教育の特色を、初めの頃は言葉で、三～四年後は実績で周知徹底すべく努力をされた。又島根県では、先生のお人柄を十分知られているので、竹吉先生のおられる大学ならということも多分にあったと思われるが、兎角、毎年七、八十名以上の優秀な学生が応募している。又先生は、学校の経済面の負担にも非常に心を使い、こうした募集の為に出かけられても、お伴と運転手の三人で、国民宿舎を利用し乍ら四泊五日間位かけて廻って下さ

っていた。

先生のお宅は、御令息お二人共お医者様で、日常の御生活は、最高であったでしょうに、学園運営には、このようなきめ細かく心を労して下さっていた事に、いつも有り難く感謝していた。先生には武田学園の評議員の役もお願いしていたが、その役目の立場上からだけでなく、十三年間常に学園の運営に心を配り、学長を助けねばの念に燃えていて下さった。

昭和四十九年、長男学千を副学長にして、学長を助け学園の強化充実を計るようにと考えられ、学内の教授連から、武田学千を副学長に推薦する署名を取って、私のところへ持参下さった御厚意には、有り難く厚く感謝している。先生が、本学園の現在と将来を御心配下さり、御配慮下さったことに、心からお礼を申し上げたい。

竹吉先生が本学をお引きになったのは、五十年にハワイ旅行をされ、帰途カゼをひいて肺炎となられたのが遠因である。而しこれは治癒されたのだが、それから健康があまりすぐれられなくなった。それでも半年ほど御静養になった後は、学校には出て下さっていたが、奥様や御令息が先生の御身体を憂慮され、学校をお辞めになることをしきりにお薦めになっておられることを私に申されたので、私は、今まで随分御苦労かけたので、お身体だけは十分大切にして貰い、細くとも長くいて下さいと申して、五十二年度は毎週でなく隔週にお出を願っていた。五十三年三月に、このままでは学校にも迷惑をかけることになるので辞めたいと、たっての申し出でがあったので止むなくお受けすることにした。五十三年四月十五日、本学園創立三十年を記念して、竹吉正規、山根安太郎、浅地昇のお三人の各教授が、広島文教女子大学名誉教授の称号をお受けになった。その時の祝賀会も終えて、三人の中では一番元気でお帰りの時のお姿は、いつものように肩と胸を張って、正々堂々濶歩されていた。そのお姿で門を出られたのを見送った。その日は広島の親せきにお泊りになり、十七日島根の御自宅に戻られ、〃ああ疲れた〃と御長男の診療所へお立ち寄りにな

っておっしゃった由である。

その後、大腿炎症となられ、床につかれていたそうである。その事は、六月の終わりに本学三好助教授より聞き、夏休みになったらお見舞いに上ろうと思っていたのに、今度は私の健康がすぐれなくなり、島根まで行く元気が出てこず、気になり乍らも失礼しておったところ、わが家にも不幸があったりして、どさくさしていたところへ、突如、八月三十日の午後ご逝去の報に接し夢にも想像しなかった出来事で、一時は私の耳を疑い、幾度も問い返したが、事実であった。嘆きと悲しみのどん底に落ちた。〃ああ申し訳ない、お見舞いにも参らず、あの四月十五日の午後三時半、広島文教女子大の門を出られるのをお見送りしたのが、この世でのお別れの最後だったのか〃神ならぬ身の知るよしもなく、又会える日を楽しみにしていたことは、夢に過ぎなかった。

竹吉先生には御礼や御詫びをせねばならぬことが一杯だったのに、御礼申しても、御詫び申しても、ご返事のいただけない先生になられた。何と悲しいことであろう。〃先生お許し下さい。海山のご恩を受け乍ら、お礼の一言も申し上げずお別れしなくてはならなくなりました〃と竹吉先生のいます島根の浜田の方へ向いて手を合わし、お詫びを申して泣き伏した。

その時、学校への知らせでは、三十一日の晩がお通夜で、翌日が御葬儀ということであった。せめてお通夜に参ってお顔を拝ませていただこうと考え、学校を出て浜田へと車を走らせた。お宅に着いたのが夕方であった。早速お部屋に御案内いただき、先生はどこにと、本学の山根助教授に聞くと、「もうお骨になられています。」と。全く驚き、落胆、せめてお眠り遊ばすお顔を拝し、御礼と御詫びを申し上げ、最後のお別れをと思っていたことも空しくなり、お名残り惜しさが胸にこみ上げて泣き伏した。お骨に向って、長い間の御恩を謝し、御礼を申すお通夜が終わり、かつて先生に御案内いただいた浜田の千畳敷の国民宿舎で、先生の昔をお偲び申し上げながら一夜を過した。

明けて九月一日午前十時、御葬儀に参列して弔辞を捧げ、真心をこめて厚く御礼を述べ、御冥福をお祈りして、辛い辛いお別れをした。今も、先生の御在任中の御奮闘ぶり、一つ一つのお言葉、あの時こうおっしゃった、あーおっしゃった等、お姿、お顔が目に浮び、親しく、懐かしい感に打たれ、涙を流すことが度々である。

竹吉先生ありがとうございました。ほんとうに有り難うございました。よくお助け下さいまして、ほんとうに感謝しております。

神原カズエの死

カズエは、私の親代りの兄神原勝太郎の長女である。彼女は小さい時、小児ぜんそくを患ったため、身体が弱かった。そのためと、兄にとっては一人娘で親の手元におきたかったこともあって、養子を迎え分家させた。私より十一歳年下である。

彼女が四歳の時、弟の秀夫が産まれた。それからは、夜でも私と同じ蒲団の中に寝るなどして一緒に育ち、又村の行事等へも私が連れて行くようなことで、全く仲のよい姉妹生活だった。勿論、私を姉さんと呼び、慕っていた。私と彼女の母との間がうまくいかないことも、幼児の頃からさとっていた。辛いことがあって私が泣けば、一緒に泣いていた。いわゆる一心同体で、私が教員になってからは一緒に暮されなかったが、それからも私を慕い頼りにしていることには変わりなかった。

二人の子を産み立派に育てたが、彼女の六十一年間の生涯は、殆ど医者の手から離れられなかった。何んとかして、すっきりした晴やかな心に身体になりたいと念じ続けていた。晩年になって、ぜんそくからきた気管支肥大症も、「手術が出来る、手術すれば全治する。」ということを聞いて、自ら手術をすると言うて、京都大学附属病院に入院した。手術は、全体の検査をしたり、又体調を整えてからということであったが、手術にも至らぬうちにあの世へ逝ってしまったのである。私はそれまでにも度々病院を訪ねて見舞っていたが、死ぬる一週間前に行った時、あまり

にも弱っていたので、これではいかんと思い、本人に向って「えらい弱ったではないか。帰って福山の国立病院で少し元気を取り戻そうやー。」といったら、「いや、ここで手術をして貰って帰るんだ。」というのであった。それほど手術に執着を持っていたということは、六十一年もの長い歳月を苦しみ抜いてきたこの病根を取り除いてしまって、すっきりした身体になりたいの一念であったのだろうと、つくづく感じ、可哀想で可哀想でたまらなかった。

五十年二月十七日未明、危篤の電話が入ったので、京都の病院に馳せ着けたが、遺体はもう病院を出て、常石に帰る途中で、行きすりがえになった。折り返し常石に戻って、家に着くなり「カズエは」と家の中を見廻したら、まだ戻って来ないという。そのうち戻ってきたが、呼べども返事のない身体となってわが家に戻ったカズエにかぐりついて、「カズエ、どうして死んだのか、私より先に死んでしもうて。」と泣きくずれていたら、弟秀夫の妻の比露子さんが、私に「叔母さん、でもお姉さんはあの身体でよくここまで頑張られたんですよ。もう諦めて、それより供養をしてあげましょうやー。」と、私をなだめてくれた。比露子さんは寺に産まれ育った人なので、仏心の厚い人で、さとりも、あきらめも、仏から教えられて、この面においては先達者である。

三歳の時から幾度となく死線を越えてきた身体なので、比露子さんのいう通り、よく頑張ってきたわけである。それにしても、彼女が二十三歳の時から側についていて下さった夫の五郎氏の三十八年間に亘る、ほんとうに温情溢れる優しい心で、なぐさめ励ましながらの看病に対し、心から感謝している。

神原秀夫の死

神原秀夫は、私の生家の主で私の親代りの兄勝太郎の長男（一人子）である。嬰児の時、両親を亡くした私は、兄の子のカズエや秀夫と兄弟同様にして成長してきた。親代りであった兄の死後秀夫の私に対する心情は、父勝太郎の代理の者と考えていたようである。齢は私より十六歳も下であるが、今まで兄が私を我が同様にいたわり、はぐくんでくれていた心情そのもので、対してくれた。迎も大事にしてくれて、世話も

物心共によくしてくれた。又私を喜ばせ、安心させようとして、色々心を尽くしてくれた。

会社の事などは、全然といってよいほど話もせず、私も聞きもしなかったが、時々「おば、あののー、今年はこれ、これ儲かったんでー。」と、声を一段落として話してくれたことも度々あった。これは、私を喜ばせようという心情からであったと思う。又、親戚のこと等については、良い事も、気に入らぬことも、私に言うていた。両親に逝かれた後の肉親者では、妻子の外には私なので、一番親近感を持っていたようである。又、至らぬ私だが力にもしていたようであった。

会社の事など、私にはわからないけれど、本当によく頑張ってやっていたと思う。肉親の私から言っては、人様の前ではばかりある言い様だが、秀夫は着想も発想もよく、その上実践力が非常に強かった。仕事をやり抜く力も持っていて、父勝太郎の遺業の各会社を何十倍にも拡張した。あまりやり過ぎるので、肉親の我々は、ヒヤヒヤ、ハラハラしていた。これだけやり抜く力を持つ者でも、病気には勝てなかった。

母の遺伝からか、三十九歳の時、胃癌になり、京都大学付属病院で手術を受けた。快癒して、それから三年、五年、七年、十年と経ったので、もう大丈夫ということで、一族は喜びと安堵で、長い間詰っていた胸をなぜおろしていた。ところが、手術後十八年目頃から少し調子が悪くなって、入院したり、時には家庭で療養したりする状態になっていた。その状態でも、他人にまかせず、仕事だけはバリバリやっていた。しかし病魔には勝てず、癌の再発ではなかったが、手術後のコバルト治療のためか、六十歳の生涯の幕を閉じねばならぬ運命になったのである。昭和五十三年三月十二日であった。

私にとっては、親に置いて逝かれたような、又一面、わが子に先立たれたような、何んとも彼ともいえぬ、悲しい悲しい別れとなって終ったのである。まだ元気な時、私に「おばが死んだらのー、宮沢先生に葬儀委員長になって貰

って、にぎやかな葬式をしてあげるけんのー。」と言っていた者が、先に宮沢先生に葬儀委員長になって貰うようになって終った。世の中の無情をつくづく感ずる、今日この頃である。

彼の遺した大きな足跡である東京や常石の会社、みろくの里、進藤会館等を尋ねる度に、深い悲しみと、あつい涙にくれるのである。

十六　健康を祈って

私はまた病に倒れる

昨年一月（五十三年）から少し身体の調子が悪かったのだが、別に寝込む程悪いのでもないので、弱った、弱ったと思い乍ら、毎日精出していたが、とうとう十月十日に胸が痛むので、大槻病院に診察を受けに行った。レントゲンの診断の結果、肺炎と病名がついたので一寸吃驚した。それは、普段から老人が肺炎になったら、五十％は助からぬということを聞いていたからである。

院長先生から、直ちに入院加療を命ぜられたが、一応帰って十一日から入院させて貰いますと申しあげて帰宅した。それは、十月十一日が武田馨氏の四十九日の命日なので、仏前にお参りしてから入院しようと思って、一応帰って来たのであるが、十一日には全然動けなくなった。熱が上る、腰・胸が痛む等で一日寝ていて、十二日に入院して、治療に専念した。院長先生も一生懸命になって下さったおかげで、四十日ばかりの入院加療で退院が出来た。但し、帰ってからも、本年中は（五十三年）床について養生せよと命ぜられた。

そのつもりで病院はおいとましたのに、帰って見ればそうもゆかぬ。目の前に山積みしている仕事を、一つ一つか

たをつけて行けば元気も出る。又それが楽しい毎日であるので、ついつい自分の身体のことは忘れてしまって、校務に没頭するのである。治ったというものの、咳は相変らず出る。胸も時折は痛む、腰も痛むといった状態である。しかし週二回は病院に行って、点滴を打って貰い、薬も続けていただいてはいたのだが、十分身体が元気でないのに仕事を続けていたからか、二月十八日（昭和五十四年）の晩、強い咳が出て、血たんが口からも鼻からも沢山出るので恐ろしくなって、夕食をとらないでそっと床に入って静かに休んだ。おかげで、その晩は血痰は出なかった。翌日、恐る恐る学校に行って矢張り仕事はしていたのだが、どうも心配でならぬ。前夜程は血痰は出ぬが、痰には血液が少々混っている。長男が来たのでその事をいったら、大槻先生に電話で相談せよというので、先生にその事を申したら、広大附属病院の放射線科の勝田先生に依頼して上げるからということで、十九日に勝田先生のところへ行き、レントゲンを撮っていただいた。その写真を持って大槻病院に行き先生に見て貰ったら、気管支拡張症ということで、暫く入院加療するように命ぜられた。二月二十日に再び入院の仕度をして家を出る時は、迚も何んだか淋しい気持ちがして悲しかった。前の度の入院の時は、こんなに淋しい思いはしなかったのにどうしたことか、この度は辛い思いで家を出た。病院に来て、今度こそはゆっくりと、半年かかっても、一年かかっても、全治するまでは病院にいることに自分で心に決めて治療にかかった。今日は六月二十七日であるが、六月三十日には、退院が許されている。今度は学校に帰っても、仕事を半分にして、身体を第一に考え、大切にすることを院長先生からも約束をさせられているが、私自身も自分のことだからまず自分で大事にすることを決心している。これで、昭和二十三年以来五度の入院生活をしたのである。兎角風邪をひかぬように、過労にならぬように、食事療養をおこたらぬようにするつもりである。

（いみまろの（一三〇日）ながきつき日を、ねんごろに、ちりょうたまいし、ごおんわすれじ）

〔五十四年六月二十八日大槻病院の病室に於て〕

後　書

以上で一応学長の私記を終わる。

実は、ここに公表した私記は、量的にいえば、書き溜められたものの半分ぐらいといってよいのである。私の考えで削除した部分が多いのである。その削除部分は、あまりに私的なこと、殊に純粋に家族の私事に関することや、公的なことでも個人のプライバシーにかかわることや、未解決の問題を含むことなどである。現在も書き続けられていることとて、近時の文学部に初等教育学科増設に至る経緯も、その心情を含めて詳述してあるが、これもあまりに現在に近く生々しい記述もあるので、一応昭和五十四年の大槻病院へ入院するところで一区切りとしたのである。

公的なことで削除した主な部分を列挙すると、①同和教育問題に端を発した教職員組合結成に関すること、②中島校地を広島市安佐市民病院建設用地として売却したことに関すること、③文学部運営の苦労から初等教育学科増設に関することの三点である。この部分について、学長の意志をくみとりながら、私見を加えて略述しておこう。

①〝教育の前には万人平等である〟〝教育は普遍的である〟というのが学長の基本理念である。教育者は、身分や能力で教え子を差別してはならないとの考えのもとに、六十数年にわたる教育者としての生き方を堅持してきた人が学長である。当然、同和教

育に対しては強い関心を有し、積極的推進論者であったのである。昭和四十年代、広島県下の公私の高等学校で国民的課題としての同和教育が大いに推進されるようになり、当然本学園の付属高校においても同和教育の徹底に努力したのであるが、昭和四十五年生徒の間で差別問題が生起し、解放団体からの糾弾を受けるに至った。問題は付属高校で起ったのであるが、当時校長職も兼務していた学長は、極めて真剣にこの問題の解決に取り組み、学習を通じて姿勢を正す努力をされた。当時の学園の中には、同和教育問題に対する認識が必ずしも充分でなかったことも、この糾弾を通しての学習の中で判明し、学長は、その足らざるところの是正のために多様な方法をもって努力された。例えば、学習の結果、同和教育は学園全体で取り組まなくてはならないと考えられた学長は、当面した高等学校だけではなく、大学・短期大学・付属幼稚園においても同和教育推進の体制を整備し、殊に大学においては同和教育の講義を設定し、教官の同和教育研修会を積極的に推進された。そしてその成果は極めて大なるものがあったのである。いずれにせよ、この糾弾を通しての真摯な学習の中で、本学園全体の同和教育推進の体制が確立され、それ以後引き続いて国民的課題とされる同和教育問題の本質を研究し、その深化がはかられてきているのである。

ところで、この同和教育問題に関連して、高等学校の教職員の間で、極めて戦闘的組合運動が派生したのである。学長は、このあまりにも尖鋭的な組合運動に心を痛め、その結果体調を崩して福山の多田病院に入院せざるを得なくなったのである。

元来、学長には狭心症の持病があったので、精神的衝撃は禁物であったのであるが、私自身その狭心症の発作に二度ばかり立ち会って驚愕したことがあったけれど、

恐らく学長は自分の生命の危機を何度か感じられたのであろうと思う。だからこそ、この手記も書き始められたのである。

では何故組合運動が学長に精神的衝撃を与えたのか、手記からうかがえるのは次のようなことである。学長は、教育は聖職なりと信じ切って生涯を過ごしてきた人である。教育のためには、全てを犠牲にしてきた人である。学千先生も時に洩らされるが、教育に熱中のあまり学千先生たちは今でいう鍵っ子という有様で、夜も不充分な学力の子を連れて帰って家庭が即席教室になるということも度々で、いわゆる家庭という雰囲気をあまり知らないと。学長自身も、学千や健司には申し訳ないことをしたと手記にも書かれてあったし、自ら洩らされることもあるぐらいであり、学園から報酬を受けないのは教育経営者として当然のことだとして生き抜かれたような人なのである。言うことと行うこととは違う人が多いのが世の常であるが、学長は常に言行一致を旨として生きてきた人である。〃教育に生き教育に死す〃というのも、空言でなく身をもって体現しようとしている人である。

こうした生き方をしようとする学長の前において、〃教育者も労働者である〃〃生活権を保障せよ〃〃経営者は反省せよ〃〃経営権を組合に移せ〃などいう言葉が連発されるのであるから、その精神的衝撃が思いやられるのである。私教連とか日教組などの外部団体まで介入してきて、従来の学園内の平和的慣行を無視して、学長を極悪の経営者に見立てて攻めつけるのである。殊に学長に衝撃を与えたのは、一夜にして人間が変わるという体験であったようである。この道一筋の学長が変わりようもないのであって、人間が変わるというのは、今まで学長の意を体して教育に従事してくださっ

ていると信頼し切っていた先生方の豹変ぶりなのである。使用者、被使用者という考え方で先生方を採用しているのではなくて、先生方の個人的事情も充分承知の上で、人間的信頼関係によって武田学園の先生になっていただいているというのが学長の感覚なのであるから、そういう人間的信頼関係を根底から崩すような発言に出会うと、その精神的衝撃は計り知れないのである。組合との交渉の間、学千先生が〃母を殺す気か〃と激怒されたことがあるぐらいだから、その間の空気がうかがえるのである。

この入院中に、中島校舎の中で最初に建築した第一校舎が焼失するという事故が発生し、学長の精神的衝撃は二重のものとなるのである。中原校舎の焼失の時には、洩電（中電は否定したが）と思われて責任者とて糾明するには及ばなかったのであるが、中島校舎焼失の時には失火責任者の究明もできたと思うのであるけれども、組合活動が極盛期にあったにもかかわらず、組合員たる失火責任者を追求されることなく、全ての責任は、入院中とはいえ最高責任者たる自分にありとして万事処理された。一事が万事で、こうした精神的衝撃を受けながらも、自分の信念をまげることなく万事処理されたのである。武田学千先生と内海長次郎先生の時宜を得た助言と適切な助力があったからでもあるけれども。

学長の私記は、こうした中での人々の動きを微に入り細をうがって活写しているのであるが、今は公表すべきことではないと思い、全て省略したのである。現在は、組合活動も平静に帰しているので、こうした問題は生じていない。

② 中島校地売却問題は、いまだ未解決の問題である。この問題は、元来、広島市と

の合併を急ぐ市と町両当局の無責任な合併申請と、町当局の虚偽申請を見逃した県市当局の行政事務の行き違いから生じたものであると、私は見ている。

中島校地を市民病院の建設用地にという話は、武田学千先生を通じて、昭和四十七年の初め頃からあったようである。今考えると慙愧にたえないのだけれど、私自身この話を聞いた時、校地が高額に売却できて、新しい有利な高校立地が得られるようになり、理想的な校舎が建設でき、その上学園発展のために利用できる余剰金ができるというのであれば賛成だと、意見表明した記憶がある。ところが、学長は、血と涙を注いで造りあげたこの土地を手離すことはできない、私の教育のすべてがここにあると、昭和四十七年三月末日、広島市への合併期限ぎりぎりになって町当局から正式申し入れがあった時、明確にことわってしまわれたのである。それを聞いた私は、教育一筋に生き抜いて来た人の結論というものはこうしたものか、私とは違うと思ったものである。高校の問題でもあり、私自身あまり積極的に関与しないように心懸けていたのではあるが。

ところが、正式にことわったにもかかわらず、合併申請書には中島校地を市民病院建設用地にする旨が明記してあるという事態が生じ（当然、学園の売却同意書なきまま）、行政当局の政治責任まで云々されるに至り、学長も自分の考えを検討せざるを得ない事態に追い込まれたのである。ここで、学長は、教育の原点に立ち返り、〝武田学園の設立は地方文化向上の一翼を荷うことを一つの目標にしたものである。一方、市民病院の建設も厚生施設の充実をもって地方文化向上を図るものであるとするならば、学園設立の目的も、病院建設の目的も、究極的には一致するはずである。中島校

地を売却しても、市民病院用地として地方文化向上の一翼を荷うのである。とすればここで全ての私的な思いを捨てて譲渡に踏み切ろう〃と、辛い決心をされたのである。昭和四十七年の七月末のことであった。

その後、紆余曲折があった。学長が直感的に予感したごとく、先に私が意見表明したようにはうまく物事が進まないで、石油ショックという異常事態もあったのだけれど、何かと学園に不利な方向に事態は展開するばかりであった。教育以外の思惑などが混入すると、教育の場では物事がうまく進展しないものだと感じたことであるが、学長はねばり強く事態の解決に努めて、高校移転問題も何とか片付け、教育上は何の支障もない形で落ち着くこととなったのである。しかし、市当局との間には、いまだ未解決の問題が山積みしているのである。その中の一つに、中小田古墳の問題がある。

中小田古墳の問題は、高校移転先を中小田（高陽町）の丘陵地と定め、土地買収もほぼ完了し、熊谷組と団地造成の契約も済ませ、保安林解除の申請を申し出た時に判明した問題である。買収済である丘陵地帯の一帯が、広島市にとって最大最古にして貴重な古墳群の埋没しているところだというのである。しかし、買収も完了に近く、中島校地明け渡しの期限も迫っていることでもあって、今更後に引くこともできず、文化庁の方へ中小田古墳の開発許可を申請することとなった。学園の非常事態ということで、これまでどちらかというと傍観者的であった私も積極的に関与することとなり、文化庁への陳情には学長のお伴をしてよく上京したものである。あれこれの経緯はあったけれど、文化庁も学園の苦境を勘案して、調査の上で開発を許可するという

方向で解決することになった。係官からその意向をうかがって、大よろこびで文部省を出たところで、〝これで学園も歴史に汚点を残すことになるなあ〟と私がつぶやいたそうである。そのことで、学長との間で一二問答があった記憶がある。私自身は、文化財を破壊するのはよくないことは知識として知っているだけで、学園が当面する危機が回避できると大よろこびしていたのであるが、学長は、その夜定宿の常石造船の寮でまんじりともしないで考え続けたということである。当時、私自身を含めて学園当事者は、中小田古墳群の文化財としての重要さについて充分なる認識を有していたとはいえないのであるが（当局も、盗掘を恐れて公式発表を控え目にしていたという事実もあったようである。）、それから学長は実に真剣に文化財保護についての勉強を始められた。

文化庁から中小田古墳群の調査発掘の許可が正式におりると同時に、広島大学文学部史学科考古学教室の構成員を中心として、中小田古墳を守る会が結成され、全国的規模で反対の署名運動を起し、街頭でも署名を求めるという事態となった。そして文化庁を始め県市当局への陳情運動が行われた。本学園にも陳情があった。元来、明治の人である学長は、こうした大衆的示威運動が大嫌いな人である。デモとか署名運動とかいう団体の力を誇示する圧力には反撥する人である。ましてや、当時は全国的に荒れ狂った大学紛争の直後であり、当然学長はこの陳情団に会見することを嫌われた。が、例の暴力団まがいの陳情団とは違うことが判ったので、とにかく会ってもらうこととなった。

陳情団に会った学長は、大学院生を中心とする陳情団の真摯で学究的態度と、私学

の存立も大切なので、公有化を通じて学園に損害を与えないように運動するという情理を尽した説明と、教育が教育を破壊することのないようにお願いしたいという嘆願とに、強い感銘を受けられたようである。いかにも勉強好きな学生らしい態度に接し、可愛い教え子に会ったような感じを受けられたのでもあろう。〃教育の原点に立ち返って充分考えてみましょう〃という返事をされた。

教育者であると共に経営者である学長は、見通しのないままで中小田の開発を断念するわけにはいかないので、文化庁と県当局とに公有化の意志の有無を確認（当時は市当局とは、文化財保護に関する話し合いはなかったので）、公有化の意志が鮮明であったので、何かと学園に損失（土地買収に際し買収以外のことで要した資金やら高校移転延期に伴う各種トラブルによって生ずる損害、更には好立地条件の候補地を失うことなど）が生ずるのを覚悟の上で、中小田の開発断念の決断をされたのである。この決断も、教育の原点に立って熟慮を重ねた上でのものであり、それは中島校地売却を決断された時と同じことであった。教育者として生涯を全うしたいという学長の信念が、こうした決断に生きていると思うのである。

中小田古墳群の公有化は、文化庁・県当局及び中小田古墳を守る会の推進にもかかわらず、受皿たる市当局の文化財保護行政の立ち遅れから、いまだ実現しないままである。親方日の丸ではない私学なので、多額の経費を注ぎ込んだ中小田古墳群が公有化されなくては、経済的に立ち行かないのであるが、文化財保護行政の大義からいっても、この問題に関与してきた多くの人々の責任において、いずれは公有化は実現されると確信し、ともあれ〃教育が教育を破壊する〃という事態だけは、学長の決断で

避け得たのを喜びたいのである。

学長の私記には、この一連の事情が事細かに記述してあるのであるが、現存の著名人の名前も多出するし、未解決の問題でもあるので省略せざるを得なかった。

③　文学部運営の苦心談については、文学部創設時のことから説明しなくてはならない。

学長の学園創設の基本理念は、地方文化向上の一翼を荷いたいというところにあったので、学術の最高学府たる四年制大学まで創りたいという素志は最初からあったようである。しかし、女子の学園なので、学長が常々主張していた女性の性能伸長教育に適合する、技術教育重視である短期大学を当面設置したのである。そして昭和四十年までに、当初計画していた四学科二専攻の設立が完了したので、四年制大学の創設にと向ったのである。

四年制大学など、短期大学がまだ完全になっていないのに時期尚早で夢物語だと笑う人もいたけれど、私は強く創設のことを主張した。私の考えは、短期大学のままではなかなか研究体制の整った大学とはなりにくいので、学部は何であれ、研究と教育とを共に推進し得る大学を創るべきだ、時期尚早などと引っ込み思案とならず、学長の素志を実現するのは一日も早い方がいいというのである。

では学部を何にするか、学長は、最初薬学部創設を考えておられた。そのために、各地の薬学部を訪問調査したものである。その一つ、武庫川女子大学を訪問した時、公江学長から薬学部を創設したばかりの生々しい苦労話を聞いて、私は駄目だと思っ

た。経済的なことは、学長が例のがんばりで東奔西走して何とかされるであろうが、まだ広島大学に薬学部がなかった時代でもあり、教授陣容の整備が不可能だと思ったのである。次に、学長の専門である家政学部を考えたけれど、教授陣容の整備が困難であるのと将来性の問題で二の足を踏むこととなった。栄養士養成の学部という話もあったが、あまり問題とならなかった、というより、私自身国文学専攻で我田引水の気味があったけれど、文学部創設ということがだんだん具体性を帯びてきていたのである。前年、短期大学に国文科と英文科を増設していたので、教授陣容の整備にはある程度手がかりが掴めていたし、図書の整備も基本的なものは完了していたので、比較的容易に整えられるという具合に、割合に条件が整っていたからである。

ただ、文学部を経済的に運営可能な最低限度入学定員といえる百名の学生を最初から集め得る自信なく（当時の状況では、広島県において短期大学の必要性は充分あったけれど、女子大学は必ずしも緊急に必要ではなかったかもしれないのである。）、当面各学科二、三十名程度だろうと予測し、学長にもそのように申し上げていた。私は、学部は当面丹頂鶴的存在でよいと考えていた。大学となれば学園の重みが違ってくるので、学園全体としては好結果を生じ得ると信じていたのである。と同時に、十年も経てば定員が確保できるようになるとも言った記憶がある。私にしてみれば、十年も経つと社会も進展して、大学進学者が増加するであろうし、大学の内容も十分整備充実できるので、自然に学生は集まるようになると信じていたのである。いつもの極楽とんぼの楽観的な見通しである。

文学部を創設してすぐ、私は広島大学の助手として転出した。可部女子短期大学創

設準備の昭和三十六年以降、絶え間ない学科増から文学部創設へと席をあたためる暇とてなく、研究と教育の両立する大学への条件作りのために何かと努力したつもりであったが、夫子自身の研究生活は正に荒廃に帰していたからの転出であったが、住居こそ学園の側に移したものの（一寸した相談事に便利と思っての移転、朝早く学長が庭先に顔を出されることもあった。）、ともあれ戦列離脱であることに違いなかった。開学以来の教務部長職も、新任の山根安太郎先生にお願いした。とにかく外枠だけは作り上げたのだから、諸先生方が中味を充実してくださるに違いないという思いもあったのである。

広大の国文学教室の内規である二年間の助手期間に何とか学位論文の見通しをつけて、学園に復帰してみると、初年度四十一名だった入学者に減少の傾向が見られるという有様であった。我慢強くて遣り繰り上手の学長は、その点少しも愚痴をこぼさず、基準点以下の学生は受け入れないという開学以来の方針を堅持して頑張っておられた。この方針というのは、学長の考え方として、多額の学資を投じて四年間の大切な歳月を費して学ぶのであるから、嫁入道具にしたいというような虚栄心で進学を希望するような子弟は受け入れたくない、大学教育の何たるかを充分理解して自己の最大限を尽そうという意欲と能力ある子弟を受け入れ、社会の期待に応え得る女性を育成したいという基本理念から生れた方針であった。そして、この方針は、開学から今に至るまで、例え定員を大幅に割り込んでも、堅持されてきている方針なのである。

如上の方針で学生募集を続けながら、大学の内容充実に努力を続けたにもかかわらず、十年経っても改善の徴候が顕著でないのである。英文学科などはむしろ悪化の傾

向が見られるという有様で、私の楽天的大甘な予測も大ボラということとなり、さすがの学長もいかがなものかと焦慮の念を示されるようになった。それぞれ個性の強い先生方も多く、学生募集の責任は理事者側にある、見通しの悪さは理事会の責任だ、教師は研究にのみ専念しておればよい、学生募集などその任にあらず（これらは理の当然の発言なのであるが、国公立大学やマンモス私大では通る理でも、小規模の私大ではそうとばかりもいっておれないのが現実である。）など言われる先生方もあったりで、時に学長も鬱屈する思いを爆発させて、大学の先生方の信頼と協力を得ることの困難さを嘆かれたこともあった。

しかし、こういうところでねばり抜く剛さを有するのが学長の特性で、文学部建て直しの方策を多面的に模索され、②で述べた事態で実現が七年おくれたのであるが、昭和五十六年度に初等教育学科の増設を断行したのである。現在、学科増は非常に困難なのであるが（広島市が政令指定都市になってからは、行政的に学科増を制限されている位である。）、学長に対する文部省の信頼が大きくものをいって、比較的容易に増科が認可されたのである。ともあれ、初等教育学科増設の結果は上々で、国文学科・英文学科にも波及効果を与えて、入学する学生は質量ともに向上の一途をたどって、第二次募集を廃止した本年は、三学科併せて百五十五名の入学者（応募者六百八十九名）を見るに至り、経営的にも安定の度を増しているのである。

かくして、今や学長の永年の教育理想を思うがままに実現できる地盤が確立されたのではないかと思うのである。そして、私自身、楽天的で大甘な予言が、おくればせながら現実となったようで、ホッとした気持ちを抱いているのである。

学長の私記には、ここに至る経緯が、学長の心情を含めて詳論されているのであるが、①とほぼ同じような事情で割愛したのである。

※　※　※

学長の手記で割愛した部分については、以上の説明で終わる。ところで、私が、このように学長の手記を編集するという立場になったについては、〃人の縁〃ということをつくづくと感じるのである。

学長と私との縁は、武田学千先生を通じて生まれたものである。昭和二十五年四月、広島文理科大学を卒業されたばかりの学千先生が数学の教師として可部高校に赴任され、札付きの問題児であった私のクラス担任となられたのが縁の始まりである。いかに問題児であったかは省略に従うが、先生を先生とも思わぬ生意気な生徒で、何かといえば先生にかみつき立往生させたり、泣かせたりしていたことは間違いない。先生方も、この問題児を敬して遠ざけておられたことも確かである。（ひどくかわいがってくださる先生もおられたが。）そうした問題児のいるクラス担任になられた学千先生は、裸で私どもの中に飛び込んでこられた。そして、それぞれ癖のある生徒の一人一人を巧みに自分のペースに巻き込んで、先生というだけで不信の目で見がちであった私どもを、いってみれば丸めこんでしまわれたのである。

当時の学千先生と私どもの間は、先生と生徒というより、兄と弟という感じであり、女生徒の間では恋愛感情で対していた者もいるという関係であった。少々度外れた行動をしても許されるという甘えもあり、今考えると目茶苦茶なことであるが、一緒に焼酎を酌みかわすということさえあった。今もって、酒はおまえらに教えられた

と言われることもある。後で聞くと、とにかく退学者だけは出したくない、こいつらと一蓮托生だという心境で、何時も辞表持参だったようである。

そういう親密で平和な師弟関係が成立していたある日、可部高校の裏にある高松山の中腹（?）で、先生を囲んで数名の級友と一緒に四方山話をした記憶がある。他愛ない話に花が咲いたのだと思うが、その中で先生が〃将来、立派な高等学校を作りたい〃と話された、私は即座に〃ホンジャー、ボクゥ教頭ニシテーヤー〃と応じたのであった。昭和二十五年の秋ごろであったろうか、ポカポカ日の当る松林の中でのことであった。（ある級友は、〃大学〃も作りたいと言われたと証言する。〃大学〃と〃教頭〃では、平仄があわないが、とすれば、私の場合その程度の知識での座興であったのである。）

私どもは、学千先生の母上が学校を経営しておられるなど知りもしなかったのだが（昭和二十五年の頃、私どもの話題となるような存在ではなかった。）、当時から先生は発足したばかりの広島県可部女子専門学校をきちんとした学園にしたいと願っておられたのであろう。私の対応の方は出まかせで、先生が学校を作るのなら手助けしますという、先生に対する親愛の情の表現の一種に過ぎなかった。その頃から就職の事前運動をするはずもないし、当時の私は教師になどなろうとも思わず、さすがに才能足らざるを自覚して作家志望は断念していたが、文芸評論などができればよいなど夢見ていたこととて、それは単なる座談の即応だったのだが、今も鮮明に記憶しているところに〃縁〃を感じるのである。

学長に初めてお目にかかったのは、昭和二十六年の三月、高校の卒業式の翌朝であ

った。私どものクラスの悪童連は、先生のお言葉に甘えて、卒業式の夜、古市にあった広島県可部女子専門学校の校舎（井伏鱒二作「黒い雨」に出てくる〝日本繊維株式会社古市工場〟の寮の後身と思われる。）の二階に集まり、夜を徹して別れの大酒宴を催した。畳敷きの相当大きな部屋であったが、卒業したのだから遠慮はいらんと大盤振舞である。女生徒が参加していた当初はまだおとなしかったが、女生徒が退去した後は、乱酔に至る大あばれ、今考えると無茶をしたもので、まだ進学先も決っていなかったのに、どんなつもりであったのだろうか。と同時に、礼儀知らずでもあった、御当家（隅々まで掃除してあり、学校というより家庭という雰囲気であった。）のご主人にごあいさつもしないで酒盛をしたのであるから。酔いつぶれて雑魚寝をした翌早朝、枕もとで〝叱られた、叱られた〟と学友がごそごそ話し合っている。中庭ともいうべきところに小屋掛けで炊事場と洗面所の兼用のごときがあったのだが、そこで寮生が早朝洗面しようとしているのを見て、二階からからかって叱られたというのである。名誉にかけて弁明しておくが、声をかけたのは私ではない、私は深酒で二日酔状況であったし、当時軽度ながら女性恐怖症にかかっていたのであるから。ともあれ、おわびに参上すべきであると衆議一決、こういう時の通例としてシンチュウという渾名の竹本君（故人）と私とで、学千先生の後についておずおず参上、母上は病床に伏しておられたが、小柄で色の白いふとった人（二重あごで、病身だったのだろうが、病人という感じはなかった。）で、半身を起して応対された。その小柄な奥さんは、私どものあいさつと弁明とを聞かれるだけで、ニコニコ笑って別に叱ることはされなかった。悪童どもを叱っても仕様がないというのであったろうが、この小柄な奥さん

が、今考えると学長なのである。早々に退散したのであったけれど、当時のことは、この酒宴のあり様を含めてほとんど忘却の彼方なのであるにかかわらず、こうした一瞬の出会いを鮮明に記憶しているのも、〃縁〃なのかと思うのである。

それから三十数年、私と武田学園のつながりは深まるばかりである。短期大学を創設した時も、文学部を創設する時も、武田学園とこれほどの〃縁〃でつながれるとは考えてもいなかった。家庭の事情で広島を離れることは困難と思っていたけれど、研究者たるもの、至るところ青山ありと思っていた。学園に勤務する以上、自己の研究生活のみに忠実たれ（私の行動を、このように言って叱責された恩師もおられた。）というのは間違いで、その与えられた場で自己の持てる力の最大限を出し尽すは当然のことと信じてはきたが、それ以上には、武田学園の運命と自分のそれを全く同一視するには至っていなかったのではないかと思うのである。学長の私記を編んで、学長が武田学園と死生を共にしておられるのが如実に判り、一層その感が強いのである。

今や知命、なかなか孔子さまの言のごとき境地には達しないのであるが、武田学園の将来を思う時、皆ともにその輝かしい未来を我がものと考えて行動しなくてはならないのではないかと思うことである。

（昭和五十八年八月三十日、横山邦治記す）